

平成24年度
お茶の水女子大学部局別評価

自 己 評 価 書

平成 2 4 年 1 0 月

お茶の水女子大学生活科学部

目 次

I	学部の現況及び特徴	1
II	目的	3
III	基準ごとの自己評価	
基準 1	部局の使命・目的	5
基準 2	教育研究組織	7
基準 3	教員及び教育支援者	10
基準 4	学生の受入	15
基準 5	教育内容及び方法	24
基準 6	学習成果	58
基準 7	施設・設備及び学生支援	65
基準 8	教育の内部質保証システム	72
基準10	教育情報等の公表	80

I 学部の現況及び特徴

1 現況

(1) 大学名 お茶の水女子大学生生活科学部

(2) 所在地 東京都文京区大塚2-1-1

(3) 学部等の構成

学科: 食物栄養学科、人間・環境科学学科、人間生活学科

関連施設: 生活環境教育研究センター (shokuiku部門を含む)、ジェンダー研究センター、人間発達教育研究センター

(4) 学生数及び教員数 (平成23年5月1日現在)

学生数: 学部579人

専任教員数: 45人

助手数: 0人 (AF1人 AA7人)

2 特徴

お茶の水女子大学は、国立大学法人化にあたり、そのミッションとして、「お茶の水女子大学は、学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現される場として存在する。」となることを掲げ、業務・教育・研究の改革にあたってきた。創立以来 137 年にわたり、日本の女子教育を先導してきた伝統を踏まえ、グローバル化時代の各界 (研究・教育・行政・産業) で活躍する女性リーダーを育成し、同時に女性の雇用や生活環境の改善 (ワークライフバランス) を図ることで、21 世紀の日本社会の革新を女子大学から発信する役割を担っている。

本学の歴史は、明治8(1875)年の東京女子師範学校創立に始まり (明治 41 年に東京女子高等師範学校と改称)、我が国最初の国立の女子高等教育機関として、全国から選抜された女子学生を集め、多くの教育者・研究者を育てた。女子高等師範学校時代の明治 32 年に技芸科が設置され今日の生活科学部の源となった。その後東京女子高等師範学校時代の大正3年に家事科が師範学校・高等女学校の教員養成のために設置された。

昭和 24(1949)年に新制の女子総合大学として文学部と理家政学部の2学部で発足し、昭和 25 年、文教育学部、理学部と家政学部 (児童学科、被服学科、食物学科) の3学部となった。さらに昭和 43 年に家庭経営学科が設置された。その後平成4年に改組を行い、生活環境

学科 (生活工学講座、食物科学講座、人間科学講座)、人間生活学科 (発達臨床学講座、生活社会科学講座、生活文化学講座) の2学科6講座とし、学部名称も生活科学部へと改称した。平成 13 年に人間科学講座が人類科学講座に、平成 14 年に発達臨床学講座が発達臨床心理学講座に各改称した。そして平成 16 年、生活環境学科が食物栄養学科 (管理栄養士養成課程) と人間・環境科学科の2学科となり、人間生活学科とあわせて、生活科学部は3学科、3講座 (食物栄養学科、人間・環境科学科、人間生活学科発達臨床心理学講座、同学科生活社会科学講座、同学科生活文化学講座) となり現在に至っている。本学部は自然科学系の食物栄養学科と人間・環境科学科、人文社会科学系の人間生活学科の3学科で構成された文理融合型で、理系・文系の枠を超えた学際的なプログラムが特徴である。現在の学科講座の特徴は以下のとおりである。

食物栄養学科は“食物と人を見つめるサイエンス”をキーワードとして、食物と栄養に関する科学的視点と実践力を身につけた、食物栄養学の専門家の育成を目指し、広い専門性と充実した実験・実習を特徴とする。人間・環境科学科は環境と人間との間の相互作用を、環境と人間の双方の視点から捉え、人間と環境がバランスを保ちつつ暮らせる具体的な対策を社会に対して提案していく学科で、理工系基礎科目を履修し、基礎力を身につけた上で専門科目を学ぶことを特徴とする。人間生活学科には、① 発達臨床心理学講座、② 生活社会科学講座、③ 生活文化学講座の3講座があり、それぞれが提供するプログラムのもとで、① 人間の発達を、発達心理学、臨床心理学、保育学を柱にして実践的に学ぶ、② 家族、高齢者、教育、消費者問題などを、生活者の視点から社会科学の方法によって学ぶ、③ 生活に根ざした視点から文化を歴史の中で、また、美意識の変遷を比較文化的な視点から学ぶことを、目標にしている。本学科では複数プログラム選択履修制度を平成 23 年度から導入し、2年次への進学時に上記の3つの主プログラムの中から選ぶこととした。

本学部は激しく変化する社会における大学の機能の再構築を常々行っており、学部のミッションを常に考えてきた。具体的には家政学部から生活科学部へと

改組することで旧来の家政学の範疇を超えた新しい生活科学を構築してきた。すなわち人間と生活と環境を多角的な視点と複合的なアプローチで探求する学部へとミッションを充実させてきた。

平成 22 年に新成長戦略「元気な日本」復活のシナリオが政府により発表された。「グリーン・イノベーション」、「ライフ・イノベーション」等の成長分野に日本の将来を託そうとするもので、新しく、エコ住宅、バリアフリー住宅、革新的な医薬品、医療・介護技術の研究開発など生活に関連する産業に経済成長の重点を移そうというものである。生活科学部のミッションはこの新しい時代に対応することのできる学部としてさらに発展していかねばならない。一方で小学校、中学校、高等学校の家庭科という教育・学問分野を担う人材を養成してきたのも本学部の大きなミッションである。この分野の若い研究者、教育者を今後も育成し、社会に送り出すことも本学部の大きなミッションと考える。

II 目的

お茶の水女子大学は、1875年(明治8年)、「御茶ノ水」(文京区湯島)に東京女子師範学校が開校されて以来137年の間、国によって設置された最も歴史ある女性の高等教育機関としての使命を遂行し、多くの優れた女性を社会に輩出してきた。「お茶の水女子大学は、学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現される場として存在する。」この標語の下、常に時代の変化に敏感でありつつも普遍的な真理を追究し、そのことによって、女性も男性も自由かつ対等に活躍できる多様で豊かな人間社会を実現するという歴史的使命を果たしていくことを目指している。そのために広く知識を授け、深く専門の学術を教授、研究し、知的、道徳的及び応用的能力を養い、もって社会の諸分野における有為にして教養高き女子を養成し、併せて文化の進展に寄与することを目的としている。高度な専門教育と並んでリベラル・アーツ教育も重視すると同時に、高度な専門教育における長年の蓄積を生かし、それを発展させ、一人ひとりに豊かな学びの可能性を拓いてゆく。また基礎研究を力として、独自の研究の開拓・実践に努め日本の文化と科学の発展に資する研究や、生活の質の向上を促す研究、さらには、次代を見据えた先端的創造的研究に果敢に挑戦し続ける。また海外との研究・教育上の人的交流・文化的交流を意欲的に進める。さらに社会的存在としての大学のあり方を自覚しつつ、教育と研究の成果を社会に還元し、広く社会に貢献する。

科学技術の進展、情報化、国際化、少子高齢化など、現代社会の大きな変化は、私たちの生活を大きく変えようとしている。そして、生活の質と仕方を再検討し、これからの時代にふさわしい価値と基準を生み出していくことが強く求められている。生活科学部では人間らしい豊かで健康な生活とはなにか、異なる人々との共生にどう対応していくのか、環境と人間との共存の実現にはなにをすればよいのかをテーマとしている。自然・人文・社会科学的教養に基づき、人間と生活についての総合的な学識を身に付け、生活者の立場から、社会で活躍できる優秀な人材を養成することを目的としている。家政学部から生活科学部への変革は、そのまま社会における女性の位置や役割、そしてそれらに対する認識の変化に対応するものであるといえよう。そしてそれに応じて、生活科学は、家政学に比べてはるかに広い問題領域を対象とするようになった。しかし生活科学の固有性は、どこまでも人間生活という視点に立つところにある。そのような意味で生活科学は、身体と精神にかかわる諸問題を人間生活という視点から捉え直す包括科学であるといえる。

この目的を達成するため生活科学部各学科の目的を、次に掲げるとおりに定めている。

- (1) 食物栄養学科は、“食物と人を見つめるサイエンス”をキーワードとして、食物について科学的概念と実践的知識を身につけた、食物栄養学の専門家の育成を目指している。おいしさ、香り、品質といった食品を中心とする研究に加え、食物が人間に対してどのように機能するかという人間栄養学的な研究教育を充実させ、また原料、生産(加工、調理)、流通を含めて、多数の人に食品を供給する場合を含めた食品の安全性を評価し、トータルマネジメントする能力も養う。豊かな食生活や健康な社会を実現するために、食物と栄養について科学的知識と実践的能力を備えた、将来の日本の食物栄養分野の研究・教育をリードしていける人材を育てていく。
- (2) 人類は利便性、快適性、安全性などを追求し、身の回りの環境を常に変えて来た。しかし人間が環境を変える力が大きくなり、バランスを越えた急激な環境の改変が行われるまでに至った。そこで様々な“環境学”ができたが、その多くは行き過ぎた環境の改変に対する視点が中心で、もう一方の人間に関しては、あまり扱っていないとは言えない。そこで、人間・環境科学科は、たがいに影響を受け合って変化する環境と人間との間のダイナミクス(相互作用)を、人間と環境がバランスを保ちつつ暮らせる視点から具体的な対策を社会に対して提案していくことを目的としている。生活者たる人間と環境との相互作用に関する深い理解を備え、科学的手法を応用して、生活面での諸課題に対して人間と環境が共存しうる方策を考案し、かつ、実社会にて実践できる優秀な人材を養成する。
- (3) 人間生活学科は、個人の発達や心の健康、人間と社会の関係、生活と文化について、多角的な視点と複合的なアプローチを駆使し、人間と生活を総合的に理解し、分析する力を備えた優秀な人材を養成する。
 - (a) 発達臨床心理学講座では、生涯にわたる人間の発達・変容と、それに対する支援・援助のあり方について、実践的な教育・研究を行う。人間理解に関する教育・研究と心理臨床・保育実践との連携・融合、心理臨床と保育の現場を有機的につなぐ知の開発・創造を目指す。発達心理学、臨床心理学、保育学を柱として、基礎となる様々な学問的知見、研究・実践の基礎的姿勢と方法を身につけた人材を養成する。
 - (b) 21世紀に入ってグローバル化がいつそう進展し、現下の日本社会は、少子高齢化や格差の拡大など脱工業化社会に特有な諸問題に

直面している。いっけん平和で豊かに見えていた私たちのくらしの背後には、さまざまなリスクや問題が山積している。生活社会科学講座は、こうした現代における日本や世界に生じる諸問題に、家庭生活や市民生活に基盤をおく「生活者の視点」から、社会科学の方法を用いて説明することを目指している。

- (c) 生活文化学講座は、日常生活に関わるさまざまな文化事象を対象として学際的に考究する学問である。衣食住に関わる物質文化はもとより、家族や家庭に関わる思想文化まで広い領域に及ぶが、特に生活に関わる「もの」の文化を歴史と今日的視野で探究することを特徴としている。つまり服飾、住まい、工芸、デザインなど生活造形を切り口とし、それらを比較文化論、民俗学、歴史学、美学などの手法によって多角的に探究し、新しい文化論の構築を目指している。

これらの目的を実現するために生活科学部の教育課程編成・実施方針(カリキュラム・ポリシー)は、文理融合の総合応用科学としての生活科学という見地から、高度な専門知識、市民的教養、判断力を身につけることをカリキュラムの根本理念とし、それを実現するために、質の高い講義、少人数の実験・実習・演習、個々に応じた卒業論文作成指導を基軸とするカリキュラムの中で、思考力と対話能力を広めかつ深める。また各種資格の取得を念頭に高等学校・中学校教員免許(家庭)取得のための科目などを設置している。

さらに生活科学部では学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)として以下のように定めている。

生活科学部は、自然・人文・社会科学的教養に基づき、人間と生活についての総合的な学識を身につけ、生活者の立場から、社会で活躍できる人材で、所定の期間在学し、生活科学部履修規程に定められた所定の単位数を修得し、教員の指導のもとに卒業論文のテーマを決定し、資料・データの収集を行い、学問の手法に則り、論理的な分析を行い、自ら卒業論文を完成し、審査に合格した者に学士の称号を与える。

またキャリア支援プログラムとして、家庭科教員キャリア支援プログラム、消費生活アドバイザー資格取得支援プログラムのほか、栄養教諭免許取得支援なども行なっている。またピア・サポートプログラムや学年を超えた交流や就職活動報告会など、学生生活を積極的にバックアップしている。

Ⅲ 基準ごとの自己評価

基準 1 部局の使命・目的

(1) 観点ごとの分析

観点①： 大学の目的（学部、学科又は課程等の目的を含む。）が、学則等に明確に定められ、その目的が、学校教育法第 83 条に規定された、大学一般に求められる目的に適合しているか。

【観点到係る状況】

本学の目的は、学則第 1 条に定められている（資料 1-①-A）。その目的にしたがって学則第 3 条の 4 において生活科学部の学士課程の教育目的、および学部を構成する食物栄養学科、人間・環境科学科、人間生活学科の教育目的を明確に定めている（資料 1-①-B）。すなわち現代生活の諸問題を文理融合の総合応用科学として理解・分析する能力の養成を目的とすることが明示され、この目的にしたがった学科編成をとっている。

資料 1-①-A 大学の目的

○国立大学法人お茶の水女子大学学則（抜粋）
（目的） 第1条 国立大学法人お茶の水女子大学(以下「本学」という。)は、広く知識を授け、深く専門の学術を教授、研究し、知的、道徳的及び応用的能力を養い、もって社会の諸分野における有為にして教養高き女子を養成し、併せて文化の進展に寄与することを目的とする。

資料 1-①-B 生活科学部の目的

○国立大学法人お茶の水女子大学学則（抜粋）
（生活科学部の目的） 第3条の4 生活科学部は、自然・人文・社会科学的教養に基づき、人間と生活についての総合的な学識を身に付け、生活者の立場から、社会で活躍できる優秀な人材を養成することを目的とする。 2 前項の目的を達成するため、第3条第2項に定める生活科学部各学科の目的は、次に掲げるとおりとする。 一 食物栄養学科 食物栄養学科は、人間の「食」を自然科学的かつ総合的に捉え、豊かな食生活や健康な社会を実現するために、食物と栄養について科学的知識と実践的能力を備えた人材を養成する。 二 人間・環境科学科 人間・環境科学科は、生活者たる人間と環境との相互作用に関する深い理解を備え、科学的手法を応用して、生活面での諸課題に対して人間と環境が共存しうる方策を考案し、かつ、実社会にて実践できる優秀な人材を養成する。 三 人間生活学科 人間生活学科は、個人の発達や心の健康、人間と社会の関係、生活と文化について、多角的な視点と複合的なアプローチを駆使し、人間と生活を総合的に理解し、分析する力を備えた優秀な人材を養成する。

【分析結果とその根拠理由】

本学の掲げる目的は、「広く知識を授け、深く専門の学術を教授、研究し、知的、道徳的及び応用的能力を養い」、これによって、「社会の諸分野における有為にして教養高き女子を養成し、併せて文化の進展に寄与すること」である。このような目的のもと、生活科学部は、「自然・人文・社会科学的教養に基づき、人間と生活についての総合的な学識」を養い、生活者の立場から社会に貢献できる人材を養成するという特色が明確に示されている。

学部を構成する3学科についても、それぞれの目的は明確である。食物栄養学科は、食をめぐる問題点を自然科学的・総合的に捉える視点、人間・環境科学科は、人間と環境の相互作用を自然科学的に捉える視点、人間生活学科は、個人の発達・心理、社会生活の諸問題、生活文化という多角的な視点、各学科の特色が明確に示されている。

これらは、学校教育法第83条に規定された大学一般に求められる目的に合致していると判断される。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

生活科学が文理融合の総合的応用科学であり、本学部が生活者の視点で社会に発言できる人材の養成を目的とすることを明確に示している。各学科の特色とする目的は、そのなかに明確に位置付けられている。

【改善を要する点】

生活科学が、生活事象を対象とし、より豊かな現代生活を実現するための総合応用科学であるとするなら、生活科学部としては常に現代的課題を検証し、それを教育目標に反映させる必要がある。その意味で生活科学部の目的、あるいは今後の学部教育のありかたを論議する組織の設置が検討される必要がある。

基準 2 教育研究組織

(1) 観点ごとの分析

観点①： 学部及びその学科の構成（学部、学科以外の基本的組織を設置している場合には、その構成）が、学士課程における教育研究の目的を達成する上で適切なものとなっているか。

【観点到係る状況】

国立大学法人お茶の水女子大学学則では、生活科学部の目的を、自然・人文・社会科学的教養に基づき、人間と生活についての総合的な学識を身に付け、生活者の立場から、社会で活躍できる優秀な人材を養成すること、と定めている。すなわち、生活科学部は、生活に係る人間と環境とを分かちことなく、分析的かつ総合的に理解する技法を学び、専門的学知に裏打ちされた確かな教養と豊かな構想力を身につけ、将来、社会の多方面で活躍する女性リーダーを育成することを使命とする。これに従って、現代生活の諸問題を、生活者の視点から多面的かつ総合的に解明することを目指し、食の科学と健康、人間と環境、人間の生活（発達と心の健康、社会、文化）という人間生活の基本的な主要問題群に従って、学則にて、学部を3学科で編成している（資料 2-①-A）。各学科の目的は以下である。

食物栄養学科の目的は、人間の「食」を自然科学的かつ総合的に捉え、豊かな食生活や健康な社会を実現するために、食物と栄養について科学的知識と実践的能力を備えた人材を養成すること、人間・環境科学科の目的は、生活者たる人間と環境との相互作用に関する深い理解を備え、科学的手法を応用して、生活面での諸課題に対して人間と環境が共存しうる方策を考案し、かつ実社会にて実践できる優秀な人材を養成すること、人間生活学科の目的は、個人の発達や心の健康、人間と社会の関係、生活と文化について、多角的な視点と複合的なアプローチを駆使し、人間と生活を総合的に理解し分析する力を備えた優秀な人材を養成することである。

このように各学科のカリキュラムは、公共の利益に資する高度な専門知識、市民的教養、判断力を身につけることを根本理念とし、自然科学から人文社会科学に至る幅広い専門分野をカバーしつつ、文理融合の総合応用科学としての生活科学という見地から構成されている。また、その特色は、質の高い講義、少人数の実験・実習・演習、個々に応じた卒業論文作成指導にある。加えて、卒業後の進路選択に資することを目的に、専門教育に関連する各種資格の取得も対応が図られている。高等学校・中学校教員免許（家庭）取得のための科目も設置されている。各学科とも、以上の目的に沿って教育・研究活動を進めており、まとまりのある学部となっている。

資料 2-①-A

○国立大学法人お茶の水女子大学学則（第3条）	
（学部）	
第3条 本学に、次に掲げる学部を置く。	
文教育学部	
理学部	
生活科学部	
2	学部の学科及び収容定員等は、次の表のとおりとする。
～（略）～	
3	前項に規定する学科に、次に掲げる講座を置く。

文教育学部

人文科学科 形象分析学講座、哲学講座、比較歴史学講座、地理学講座

言語文化学科 日本語・日本文学講座、中国語圏言語文化講座、英語圏・欧州言語文化講座、応用言語学講座、日本語教育講座

人間社会科学科 応用社会学講座、教育科学講座、心理学講座

芸術・表現行動学科 舞踊教育学講座、音楽表現講座

理学部

数学科 数理構造講座、数理解析講座

物理学科 基礎物理学講座、物性物理学講座

化学科 構造化学講座、反応化学講座

生物学科 構造生物学講座、機能生物学講座

情報科学科 情報数理講座、情報処理講座

生活科学部

食物栄養学科 食物栄養学講座

人間・環境科学科 人間・環境科学講座

人間生活学科 発達臨床心理学講座、生活社会科学講座、生活文化学講座

【分析結果とその根拠理由】

観点に係る状況でみたように、生活科学部は、現代生活の諸問題を、生活者の視点から多面的かつ総合的に解明することを目指しており、3学科体制で編成している。各学科のカリキュラムは、自然科学から人文社会科学に至る幅広い専門分野をカバーし、文理融合の総合応用科学としての生活科学という見地から構成されている。以上から、生活科学部では、3学科全体が文理融合の総合応用科学としての生活科学の考え方のもとで、本学部の学士課程における教育目的を達成していると判断され、適切に学科が構成されているものと判断される。

観点⑤： 教授会等が、教育活動に係る重要事項を審議するための必要な活動を行っているか。

また、教育課程や教育方法等を検討する教務委員会等の組織が、適切に構成されており、必要な活動を行っているか。

【観点に係る状況】

生活科学部には、国立大学法人お茶の水女子大学教授会規則にもとづき、教育課程編成、学籍に関する事項、教員選考、その他の研究教育・運営に係る重要事項を審議するため、教授会が設置されている（資料2-⑤-A）。教授会はほぼ毎月1回の頻度で開催されており、平成22年度の開催回数は12回、23年度の開催回数は13回であった。その構成員は、平成22年度は、教授20名、准教授21名、助教2名であり、23年度は、教授22名、准教授20名、講師1名、助教2名である。議事は報告事項ならびに審議事項からなり、おもな審議事項としては、教育課程の編成に関する事項、学生の在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項、教員の採用及び昇任のための選考に関する事項、その他重要事項などであった。議事録は学内グループウェア上にアップロードされ、構成員による閲覧が随時可能である。

一方、全学部的な教育課程や教育方法等を点検・審議する組織として、学部カリキュラム委員会が設けられている。その構成は、各学科・講座から選出された委員5名により、うち1名が委員長を務める。教育に係る重要

事項の審議は、教授会の付託を受けてカリキュラム委員会が案を作成し、最終的に教授会の審議ならびに承認を経る体制となっている。同委員会ではほぼ毎月 1 回の頻度で開催されており、平成 22 年度、23 年度ともに年 8 回の開催であった。審議内容は直近の教授会にて報告・審議が行われている。とくに緊急の課題に対しては臨時でも開催されるとともに、委員会の審議内容は、教授会のみならず、各学科・講座会議においても十分に審議・報告されている。

資料 2-⑤-A

○国立大学法人お茶の水女子大学教授会規則(抜粋)	
(組織)	
第 2 条 教授会は、当該学部等の教授をもって組織する。	
2 教授会には、当該教授会の議により、当該学部等の准教授、常勤の講師、助教その他の職員を加えることができる。	
(代議員会)	
第 3 条 教授会は、当該教授会の定めるところにより、当該教授会に属する職員のうちの一部の者をもって構成する代議員会を置くことができる。	
2 教授会は、当該教授会の定めるところにより、代議員会の議決をもって当該教授会の議決とすることができる。	
(審議事項)	
第 4 条 教授会は、次に掲げる事項を審議する。	
一 学部又は研究科の教育課程の編成に関する事項	
二 学生の入学、卒業又は課程の修了その他その在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項	
三 教員の採用及び昇任のための選考に関する事項	
四 その他当該学部等の教育研究及び運営に関する重要事項	

【分析結果とその根拠理由】

生活科学部に設置された教授会は、お茶の水女子大学教授会規則、ならびに教授会内規に基づいて定期的に開催されており、本学部の教育研究活動に係る重要事項を審議するために必要な活動を行っているものと判断される。また、学部カリキュラム委員会は定期的に開催され、教育課程や教育方法を検討するための審議を行っている。緊急の課題に対しては臨時でも開催される。学部カリキュラム委員会の審議内容は、教授会のみならず、各学科・講座会議においても十分に審議・報告されていることから、本委員会は、学部の教育目的を実現すべく適切に開催され、実質的な審議および検討により、有効に機能していると判断される。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

該当なし

【改善を要する点】

該当なし

基準 3 教員及び教育支援者

(1) 観点ごとの分析

観点①： 教員の適切な役割分担の下で、組織的な連携体制が確保され、教育研究に係る責任の所在が明確にされた教員組織編制がなされているか。

【観点に係る状況】

本学の教育課程を遂行するための組織態勢および運営の基本的な方針は、国立大学法人お茶の水女子大学組織運営規則に定められている。生活科学部の教育研究及び管理運営に関しては、教授会（国立大学法人お茶の水女子大学教授会規則）ならびに生活科学部代議員会（国立大学法人お茶の水女子大学生生活科学部代議員会規程）が設けられている。加えて、各組織を構成する教員については、教授、准教授、講師、助教及び助手として、その就業に関して規則（国立大学法人お茶の水女子大学教員の就業に関する規則）による定めがある。

具体的な生活科学部教員の構成状況を下表に示す（資料 3－①－A）。これら学部に配置された教員はつぎの役割分担に従って互いに連携をとりつつ教育研究に係る活動にあたっている。すなわち、全学に係る委員会組織として、学務部会、教職課程専門部会、教育実習専門部会、学芸員課程・社会教育主事課程専門部会、社会調査士課程専門部会、インターンシップ専門部会、学生委員会、学生支援センター運営委員会、キャリア支援センター運営委員会の各委員会に生活科学部教員を選出し、全学的な教育研究業務の分担を行っている。

また、学部内委員会活動として、平成 22 年度および 23 年度ともに、学部カリキュラム委員会、家庭科教員キャリアコース支援委員会、消費生活アドバイザー資格取得支援プログラム委員会、学部ピアサポート委員会が設置されており、基本的に、各学科から 1 名、必要に応じて人間生活学科の各講座から 1 名となるように教員が選出され当該委員会活動を行っている。

資料 3－①－A

○生活科学部教員の構成状況				
	教授	准教授	講師	助教
平成 22 年度	20	21	0	2
平成 23 年度	22	20	1	2

【分析結果とその根拠理由】

観点に係る状況で述べた一連の規則により、生活科学部長の統括の下、組織的な連携と責任所在が明確な組織編制であることがわかる。加えて、生活科学部内に各学科・講座の目的に応じた適切な数の教授、准教授、講師、助教が配置されている。それらの教員は、規則によって定められた手続きにより、採用並びに昇任のための選考を経た者であり、各教員は、学科・講座等の目的に応じて適切に学部内委員ならびに全学委員会委員を役割分担している。上述のごとく教員を組織的に連携させることで、効果的に学士課程の教育研究を遂行するための実施体制が整えられていると言える。全ての学部内委員会は、学部長の統率の下、責任体制が明確化されており、組織的な連携かつ責任所在が明確な教育研究組織編制であると判断される。

観点②： 学士課程において、教育活動を展開するために必要な教員が確保されているか。また、教育上主要と認める授業科目には、専任の教授又は准教授を配置しているか。

【観点に係る状況】

生活科学部教員の構成状況は、大学現況票に示すとおりである。平成 22 年度には、教授 20 名、准教授 21 名、助教 2 名であり、23 年度には、教授 22 名、准教授 20 名、講師 1 名、助教 2 名であり、法令に定められている基準数を満たしている（資料 3－②－A、大学現況票）。また、必修授業科目の 80～86%を教授・准教授が担当している（資料 3－②－B）。非常勤講師の担当状況に関しては、平成 23 年度、本学部の非常勤講師数は 122 名である。常勤・非常勤を合わせた開講総時間数は 10,515 時間であり、そのうち、31.8%を非常勤講師が担当している（資料 3－②－C）。また、特に教育上主要と認める授業科目（コア科目と教職科目を除いた科目）における非常勤講師担当状況を下表（資料 3－②－D）に示す。

資料 3－②－A

○生活科学部教員の構成状況（学科内訳）					
		教授	准教授	講師	助教
平成 22 年度	食物栄養学科	8	4	0	1
	人間・環境科学科	2	4	0	1
	人間生活学科	10	13	0	0
	計	20	21	0	2
平成 23 年度	食物栄養学科	7	4	1	1
	人間・環境科学科	4	2	0	1
	人間生活学科	11	14	0	0
	計	22	20	1	2

資料 3－②－B

○必修授業科目数ならびに教授・准教授の担当割合				
	平成 22 年度		平成 23 年度	
	必修授業科目数	うち、教授・准教授担当科目数(%)	必修授業科目数	うち、教授・准教授担当科目数(%)
食物栄養学科	49	41 (83.7)	49	41 (83.7)
人間・環境科学科	15	12 (80.0)	15	12 (80.0)
人間生活学科	33	27 (81.8)	44	38 (86.4)

資料 3－②－C

○学部非常勤講師の担当状況（平成 23 年度）				
区 分	非常勤講師		開講総時間数 〔常勤・非常勤〕 (b)	非常勤講師の担当比率 (a/b)
	人数	時間数(a)		
文教育学部	454人	13,437	31,830	42.2%
理学部	164人	4,271	10,635	40.2%
生活科学部	122人	3,340	10,515	31.8%

計	740人	21,048	52,980	39.7%
---	------	--------	--------	-------

資料 3-②-D 学部非常勤講師の「教育上主要と認める授業科目 (※)」担当状況(平成 23 年度)

区 分	非常勤講師		開講総時間数 [常勤・非常勤] (b)	非常勤講師の担当比率 (a/b)
	人数 (※1)	時間数(a) (※2)		
文教育学部	237人	6943	20415	34.0%
理学部	130人	3371	8850	38.1%
生活科学部	93人	2500	9225	27.1%
計	460人	12814	38490	33.3%

※「教育上主要と認める授業科目」とはコア科目と教職科目を除いた科目とする。

(出典：教務チーム作成)

【分析結果とその根拠理由】

基準 2 において述べた学部理念に基づき各学科の目的が明文化・設定されており、これに沿った教育課程を実施するため、必要な教員を学科・講座に配置している。すなわち、学則で定められた学部定員 125 名に対し、専任教員数 43 名(平成 22 年度)ないし 45 名(平成 23 年度)を配置している。教員数対学生数をみれば、教員一人当たり 2.7～2.9 名の学生数となり、本学が掲げる少人数教育の実施に適切と考えられる。教授・准教授、講師・助教のバランスについても、教授数と准教授数がおおよそ等しく、適切な配置であると判断される。教育上主要と認める授業科目(必修科目)についても、3 学科とも、その 80%以上を教授又は准教授が担当している。また、主要科目の非常勤講師依存率に関しても、27%程度と高い数字ではない。以上の状況から教育活動を展開するために必要な教員が確保されており、かつ実際に実現されていると判断される。

観点⑦： 教育活動を展開するために必要な事務職員、技術職員等の教育支援者が適切に配置されているか。また、TA等の教育補助者の活用が図られているか。

【観点に係る状況】

教育活動を展開するために必要な事務職員等の教育支援者の配置に関しては、国立大学法人お茶の水女子大学事務組織規則に基づき、事務分掌として、教務チーム、ファカルティ支援チーム、学生・キャリア支援チーム、図書・情報チームの計 4 チームが置かれている。関係窓口は資料の通りである(資料 3-⑦-A)。

各チームへの教育支援担当事務職員等の配置状況に関しては、平成 23 年度には、事務職員については、教務チーム 17 名、ファカルティ支援チーム 7 名、学生キャリア支援チーム 14 名、図書・情報チーム 18 名の計 56 名である。技術系職員については、学生キャリア支援チームに 1 名が配置されている。また、アカデミック・アシスタント(AA)が 7 名(食物 3 名、人間・環境科学科、発達臨床心理学講座、生活社会科学講座、生活文化学講座各 1 名)配置されている。生活科学部における TA等の教育補助者の配置状況に関しては、平成 23 年度には、総開講授業数 468 コマに対し、「栄養学実験」「人間・環境科学実験実習」「生活社会調査実習」「生活文化実習」など実習系科目を中心とする 75 コマに TAが配置され、必要な支援を行っている状況である(資料 3-⑦-B)。

資料 3-⑦-A

○事務職員等の教育支援者の配置

○ 学生関係窓口と取扱時間

部署名	業務内容	取扱時間	場 所
教務チーム	1 教育課程及び授業に関すること 2 入学・卒業・退学・休学・復学及び転学部・転学科等の学籍に関すること 3 修学指導に関すること 4 履修登録に関すること 5 学業成績の管理及び記録に関すること 6 学業成績、修得単位に係る諸証明及び卒業（見込）証明書等の発行に関する こと 7 教育職員免許状、その他の資格取得に関すること	月～金 8:30～17:15	学生センター 1 階
学生・キャリア 支援チーム	1 奨学金に関すること 2 授業料の免除、徴収の猶予に関すること 3 学寮（国際学生宿舎、小石川寮、お茶大SCC）に関すること 4 アルバイトに関すること（家庭教師） 5 学生教育研究災害傷害保険に関すること 6 学生相談室に関すること 7 通学証明書、学生旅客運賃割引証の発行に関すること 8 学生会館及び課外活動施設の管理に関すること 9 課外活動（サークル活動・団体・集会・掲示など）に関すること 10 学生に対する広報に関すること 11 学資貸付金に関すること		学生センター 2 階
国際交流チーム	1 外国人留学生に関すること（奨学金、在留資格、証明書など） 2 海外留学に関すること 3 国際本部に関すること		大学本館114室 大学本館113室
財務チーム	授業料、施設使用料の納入に関すること		
施設環境チーム	1 野外教育施設に関すること（志賀高原・館山野外教育施設） 2 自転車（バイクを含む）駐輪許可申請に関すること	月～金 9:00～21:00 （授業のない期間は9:00～17:00） 土 9:00～17:00 （夏・冬・春期休業期間中は閉館） 3については 月～金 9:00～17:00 （12:00～13:00を除く）	図書館
図書館	1 図書館資料の検索・閲覧・貸し出し・返却に関すること 2 図書館利用についての質問や相談の受付 3 学外図書館の利用 （1）紹介状の発行 （2）他機関所蔵の文献複写の依頼 （3）他機関からの図書の取り寄せ 4 希望図書の購入		保健管理センター
保健管理センター	1 健康相談の実施 2 定期健康診断の実施と事後措置 3 健康診断書の発行 4 事故や急病への応急処置 5 学生及び教職員の健康管理に関すること 6 保健管理のための調査研究 7 精神衛生等についての相談、助言 8 環境衛生及び感染症の予防と措置についての指導援助	月～金 9:00～17:00 （12:00～13:00を除く）	情報基盤センター 事務室
情報基盤センター	1 コンピュータの利用に関する相談・回答 2 お茶大アカウントに関すること	月～金 10:10～17:00	共通講義棟 1 階
パソコン活用室	1 パソコン活用のための学習支援及び相談・回答 2 パソコン活用のための各種講演会 3 貸与パソコンに関すること	月～金 10:10～17:00	学生会館 1 階
学生相談室	1 個別相談 2 心理教育プログラム（グループワークなど）	月～金 10:00～16:00	保健管理センター 1 階
セクハラ等 人権侵害相談室	セクシャル・ハラスメントその他の人権侵害についての相談	月・水・木・金 10:00～17:00	学生センター 3 階
キャリア支援 センター	1 就職活動に関すること 2 就職相談に関すること 3 キャリア教育に関すること	月～金 9:00～17:00	学生センター 1 階
総合学習支援 センター	1 複数プログラム履修に関すること 2 GPA制度、カラーコードベンチマークに関すること 3 総合的な学習相談、学修支援に関すること	月～金 8:30～17:00	留学生相談室 （共通講義棟3号館2階）
グローバル教育 センター	〈外国人留学生対象〉 1 日本語学習支援、日本語添削 2 生活支援、情報提供 3 書籍貸し出し、DVD/CD鑑賞 〈海外留学希望者対象〉 1 留学相談 2 関連書籍の閲覧、貸し出し	月～金 10:00～17:00 （夏・冬・春期休業期間中は閉室） 月～金 10:00～17:00	学生センター 3 階

★ 授業、履修手続き関係については、履修ガイドを参照してください。なお、大学院の教務関係の詳細については、「大学院履修ガイド」を参照してください。

事務職員等の教育支援者の配置（『学生便覧 キャンパスガイド2012』P.28）

資料 3－⑦－B T Aの配置状況(平成 23 年 5 月現在)

区分	開講授業数	T A申請授業数	T A配置授業数
文教育学部	777	143	132
理学部	431	103	88
生活科学部	468	76	75
大学院人間文化創成科学研究科 (博士前期)	539	62	54
計	2215	384	349

(ファカルティ支援チーム作成)

【分析結果とその根拠理由】

上記のように、教務チーム、学生キャリア支援チームなどの事務組織に適切な職員が配置され、職務を遂行する体制が整っている。このことから、本学の事務組織態勢は、生活科学部における入学時から卒業時までの一連の教育課程を遂行するために有効に機能していると判断される。また、教育補助者としてのT Aは各学科・講座に、実験・実習・演習等の科目を中心に適切に配置され、科目の特性に応じた教育支援に活用されていると判断される。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

本学部の教員数対学生数は教員 1 名当たり 3 名弱の学生数であり、少人数教育の効果的な実施に適切であり、人材育成に優れていると判断される。教授・准教授、講師・助教の職位バランスについても良好である。

【改善を要する点】

教員数については数年来、減少が続いており、一部の講義科目に関しては非常勤に頼らざるを得ない状況が生じている。十分な教育活動を展開するために必要な教員数の確保が課題である。

基準 4 学生の受入

(1) 観点ごとの分析

観点①： 入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められているか。

【観点到係る状況】

学部・学科の学士課程における教育目的に沿って、入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）を策定し、求める学生像や入学者選抜の基本方針を明示している（資料 4-①-A、資料 4-①-B）。アドミッション・ポリシーは、「入学者選抜要項」および各種入試の「学生募集要項」に掲載され、公表、周知されている。また、本学ホームページ（以下、HPと表記）からも、これらの募集要項等は自由にダウンロードできる（資料 4-①-A、資料 4-①-B）。

資料 4-①-A

○生活科学部の入学者受入方針	
生活科学部	現代のわたしたちの日常生活は、日々、地球規模の変化と連関の中で営まれており、あらゆる場面で持続可能性が問われています。生活の質と作法を再検討し、現代にふさわしい価値と規準を発見し創出することは、まさに時代の要請だといえます。 生活科学はこの要請に応えるために、食の科学と健康、人間と環境、人間の発達と心の健康、人間生活と社会、人間生活と文化に関する諸問題を、高度に専門分化した学知を結集して、生活者の視点から多面的かつ総合的に解明することを目指しています。 生活科学部の特徴は、第1に、このような文理融合の総合応用科学としての生活科学を学ぶ点にあります。第2に、(1)高密度の講義、(2)少人数の実験・実習・演習、(3)個別的な卒業論文指導を軸とする少人数教育にあります。また特に家庭科の教員免許を取得しやすいカリキュラムになっていることも生活科学部の特徴の一つです。 生活科学部は、人間と生活と環境を分析的かつ総合的に理解する技法を学び、専門的学知に裏打ちされた確かな教養と豊かな構想力を身につけ、将来、社会の多方面で活躍する女性リーダーを育成することを使命としています。 高校での学習はすべての科目が、大学での勉学に必要な基礎です。志願学科の別を問わず、家庭科・芸術科目・保健体育も含め、オールラウンドの学力を身につけておくことを望みます。
生活科学部の入学者受入方針（「平成 24 年度入学者選抜要項」〔学部〕 P. 1） http://www.ao.ocha.ac.jp/application/H24_about.pdf	

資料 4-①-B 生活科学部 3 学科の入学者受入方針

○学科の入学者受入方針（抜粋）
【食物栄養学科】 食物は人間が生きていくために必要であり、おいしい料理や豊かな食生活はわれわれの生活にうおいと楽しさを与えます。一方で、偏った食事や不規則な食習慣はさまざまな疾患の原因となって、われわれの健康に影響を及ぼします。食物と人間および健康は時代を問わず、社会の人々から大きな関心もたれています。 本学科は、豊かな食生活や健康な社会の実現に向けて、食物と栄養に関する科学的視点と実践力を身につけ

た社会のリーダーとなる専門家の育成をめざしています。そのために、本学科では、食品化学、食品貯蔵学、調理科学、栄養化学、臨床栄養学、応用栄養学、栄養教育学、給食経営管理学、公衆栄養学などさまざまな学問分野において、遺伝子レベルから人間栄養学的なものまで幅広く教育研究を行っています。少人数教育による実験実習を重視し、卒業研究では、全員が食物栄養学科や生活環境教育研究センターの各研究室で、特定のテーマについて研究を行います。また、本学科を卒業すると、栄養士免許を取得できると同時に、管理栄養士の国家試験受験資格が得られます。

本学科の教育研究は自然科学を基盤とするため、高等学校において化学、生物、物理などの自然科学の基礎をしっかりと学習していることを望みます。具体的には、数学については数学Ⅰ・Ⅱ・A・Bを、理科については物理Ⅰ・Ⅱ、化学Ⅰ・Ⅱ、生物Ⅰ・Ⅱのうち2科目以上を履修しておくことを求めます。また、数学Ⅲ・Cについても履修していることを望みます。食物や栄養、健康に強い関心を持ちそれを社会に還元しようとする意欲のある人には最適な学科です。

○前期日程

前期日程では、大学入試センター試験（5教科7科目）と本学の個別学力検査（数学、理科、外国語）において、自然科学をはじめとする幅広い基礎学力を評価します。

○後期日程

後期日程では、大学入試センター試験の成績を重視します。面接では本学における勉学意欲や適性の確認、自然科学系の基礎知識に関する質問をすることもあります。面接はABC評価により、合格判定の資料とします。

【人間・環境科学科】

人間は、利便性、快適性、安全性などを追求し、身の回りの環境を常に変えて来ました。食糧は豊富になり、暮らしは便利になり、病気が減り寿命も延びました。しかしその反面、環境のあまりに大きく急速な変化に対して人間が適応できず、人類の存続にも影響する様々な問題も生じてきています。これに対して本学科では、「人間にとっての環境、環境にとっての人間」という視点に立ち、人間と環境の相互の働きかけを具体的に評価・設計・提案し、よりよい生活環境を創造するための研究と教育を行っています。

本学科の柱となる学問分野には、自然人類学、人体生理学、人間工学、福祉工学、環境機能材料学、環境化学、環境衛生工学、建築学などがあります。自然科学の好きな人、人間と環境にかかわる基礎的な科学を十分に学び、深く研究してみたい人、専門家として真に健康で豊かな生活を構築するために寄与したいと考えている人を、本学科は歓迎します。志望される方は、高等学校において理数系の基礎をしっかりと履修していることを望みます。具体的には、数学については数学Ⅰ・Ⅱ・A・Bを、理科については物理Ⅰ・Ⅱ、化学Ⅰ・Ⅱ、生物Ⅰ・Ⅱ、地学Ⅰ・Ⅱのうち2科目以上を履修しておくことを求めます。また、数学Ⅲ・Cについては履修していることを望みます。

○前期日程

前期日程では、大学入試センター試験（5教科7科目）と本学の個別学力検査（数学、理科、外国語）において、自然科学をはじめとする幅広い基礎学力を評価します。

○後期日程

後期日程では、大学入試センター試験の成績を重視します。面接では本学における勉学意欲や適性の確認、自然科学系の基礎知識に関する質問をすることもあります。面接はABC評価により、合格判定の資料とします。

【人間生活学科】

人間の生活は、生涯にわたる人間の発達、生活を営むための人間社会のあり方、民族、歴史や伝統、文化などさまざまな面が相互に関連した、複雑で総合的な営みです。高度に複雑化した現代社会においては、この複雑な人間生活の営みを総合的に理解し、人間が生涯を通して生き生きと生活するための条件や社会の仕組み、文化のあり方を明らかにし、それを実現する人材が求められています。

人間生活学科では、こうした豊かな人間生活の実現を担う人材の育成を、相互に関連する3つのアプローチによってめざしています。①人間の生涯発達にかかわる発達心理学・臨床心理学・保育学的理解と実践の連携、家庭や保育あるいは心理臨床などの現場に役立つ理解—発達臨床心理学、②地域社会から国際社会まで、多元的な社会環境を視野に入れ、家族、消費者、女性、高齢者、子ども、制度と政策の問題など、生活と社会及びその関係についての社会科学的理解—生活社会科学、③人間にとって最も身近な服飾と住居、工芸、デザインを中心とする生活造形を対象とし、生活文化の歴史と現在について、美学的・比較文化的・民俗学的理解—生活文化学の3つです。こうした課題に関心があり、問題意識と研究意欲を持っている人、錯綜する現代の生活状況の中で、人間性を重視した社会を築くために貢献したいと考えている人、潤いのある生活を実現しようという熱意をもっている人には、ぜひ人間生活学科で学んでほしいと思います。

志望される方は、人間生活学科の3つのアプローチを踏まえ、高等学校において地理歴史・公民の諸科目など文科系の基礎を幅広く履修していることを望みます。

○前期日程

前期日程では、大学入試センター試験（5または6教科7科目）と本学の個別学力検査（2教科：外国語、国語または数学）により、幅広い基礎学力を評価します。

○後期日程

後期日程では、大学入試センター試験の成績を重視します。面接では本学における勉学意欲や適性の確認、問題意識や人文科学・社会科学系の基礎知識に関する質問をすることもあります。面接はABC評価により、合格判定の資料とします。

（大学HP「入試情報」 http://www.ao.ocha.ac.jp/admissionpolicy_1.html）

【分析結果とその根拠理由】

アドミッション・ポリシーは、学部・学科の教育目的に沿って策定され、募集要項の配布や大学HPにおける掲載等により、多方面に公表、周知されている。

観点②： 入学者選抜方針に沿って、適切な学生の受入方法が採用されているか。

【観点に係る状況】

学部入試においては学科ごとに各種の入学試験を行っているが、いずれもアドミッション・ポリシーに沿って学生を受入れている。学士課程一般入試の前期日程入試においては、大学入試センター試験及び本学の個別学力検査を課し、学科ごとに受験科目や配点に配慮している（Web 資料 4—②—1、Web 資料 4—②—2）。後期日程入試、推薦入試、帰国子女・外国学校出身者特別入試、私費外国人留学生特別入試、第3年次編入学学生選抜においては、学力検査のほか、小論文試験や、面接又は口述試験等を行っている（Web 資料 4—②—2～5）。AO入試では、学際性、国際性、コミュニケーション能力等について試験を行っている（資料 4—②—A）。高大連携特別選抜は、

大学教員との連携による授業（教養基礎2科目と選択基礎）を履修している附属高校生徒を対象とし、授業の履修過程においてアドミッション・ポリシーとの適合性を判定している。22・23年度、食物栄養学科2名、人間・環境学科2名、発達臨床心理学講座2名が入学した。22・23年度の各種の入試実施状況を以下に示す（Web 資料4-②-6、資料4-②-B～D）。平成23・24年度入試において、入学定員125に対して、志願倍率は5倍を越し、定員充足率は1.08、1.10であり、適正な状況である（資料4-②-B）。第3年次編入学試験においては、学力検査のほか、小論文試験や口述試験等を行っている（Web 資料4-②-2～5）。編入学については、定員を充足していない（資料4-②-C）。

Web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容（URL、該当頁又は該当条文）
Web 資料4-②-1	平成24年度 入学者選抜要項 (http://www.ao.ocha.ac.jp/application/H24_about.pdf)
Web 資料4-②-2	平成24年度 一般入試(前期日程・後期日程)募集要項 (http://www.ao.ocha.ac.jp/application/h24_general.pdf)
Web 資料4-②-3	平成24年度 推薦入試・帰国子女外国学校出身者特別入試募集要項 (http://www.ao.ocha.ac.jp/application/H24_recommendation.pdf)
Web 資料4-②-4	平成24年度 私費外国人留学生(学部)募集要項 (http://www.ao.ocha.ac.jp/application/h24_foreign.pdf)
Web 資料4-②-5	平成24年度 文教育学部 生活科学部 第3年次編入学募集要項 (http://www.ao.ocha.ac.jp/application/h24_bun_sei.pdf)
Web 資料4-②-6	学部の入学試験実施状況（大学HP「入試情報」） (http://www.ao.ocha.ac.jp/statistics.html)

資料4-②-A

○選抜方法（「平成24年度 AO入試（アドミッション・オフィス入試）募集要項」P.9）											
Ⅰ. 選 抜 方 法 選考は、次の第1次選考・第2次選考に分けて行う。 (1) 第 1 次 選 考 出願書類による書類選考を行い、平成23年10月5日(水)に、その合格者には「第1次選考合格通知書」を、合格とならなかった者には「第1次選考結果通知書」及び「検定料返還請求書」を郵送（速達）する。 また、同日正午に入試チームホームページにも第1次選考合格者の受験番号を掲載する。 入試チームホームページURL http://www.ao.ocha.ac.jp/ (2) 第 2 次 選 考 第1次選考合格者に対し、模擬講義(英語による講義を含む。)、討論、レポート、面接、小論文を平成23年10月21日(金)・22日(土)に行い、結果を総合して合格を判定する。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>1 日 目</th><th>内 容</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>模擬講義 (日本語)</td><td>日本語による模擬講義の受講(文系・理系の計2講義) 受講した模擬講義に関するレポートの作成 受講した模擬講義についてのグループ討論 受講した講義テーマに関する小論文</td></tr> <tr> <th>2 日 目</th><th>内 容</th></tr> <tr> <td>模擬講義 (英語)</td><td>英語による模擬講義の受講(1講義) 英語による模擬講義に関するレポートの作成 (日本語で作成、辞書(電子式を除く)持ち込み可)</td></tr> <tr> <td>面 接</td><td>グループ面接 *志望学科によっては、個別面接も行います。</td></tr> </tbody> </table> (注) 第2次選考の日程の詳細については、「第1次選考合格通知書」に同封し通知する。		1 日 目	内 容	模擬講義 (日本語)	日本語による模擬講義の受講(文系・理系の計2講義) 受講した模擬講義に関するレポートの作成 受講した模擬講義についてのグループ討論 受講した講義テーマに関する小論文	2 日 目	内 容	模擬講義 (英語)	英語による模擬講義の受講(1講義) 英語による模擬講義に関するレポートの作成 (日本語で作成、辞書(電子式を除く)持ち込み可)	面 接	グループ面接 *志望学科によっては、個別面接も行います。
1 日 目	内 容										
模擬講義 (日本語)	日本語による模擬講義の受講(文系・理系の計2講義) 受講した模擬講義に関するレポートの作成 受講した模擬講義についてのグループ討論 受講した講義テーマに関する小論文										
2 日 目	内 容										
模擬講義 (英語)	英語による模擬講義の受講(1講義) 英語による模擬講義に関するレポートの作成 (日本語で作成、辞書(電子式を除く)持ち込み可)										
面 接	グループ面接 *志望学科によっては、個別面接も行います。										
(大学HP http://www.ao.ocha.ac.jp/application/H24_ao.pdf)											

資料 4-②-B 入学試験実施状況（抜粋）（入試チーム作成）

学部名	平成 23 年度					平成 24 年度				
	入 学 定員	志 願 者数	入 学 者数	志 願 倍率	定員 充足率	入 学 定員	志 願 者数	入 学 者数	志 願 倍率	定員 充足率
生活科学部	125	726	135	5.81	1.08	125	657	137	5.26	1.10
食物栄養学科	36	282	39	7.83	1.08	36	290	39	8.06	1.08
人間・環境科学科	24	106	26	4.42	1.08	24	108	28	4.50	1.17
人間生活学科	65	338	70	5.20	1.08	65	259	70	3.98	1.08

資料 4-②-C 第 3 年次編入学試験実施状況（入試チーム作成）

区分		募集人員		平成 23 年度						平成 24 年度					
				志願者数		合格者数		入学者数		志願者数		合格者数		入学者数	
		一般	社会人	一般	社会人	一般	社会人	一般	社会人	一般	社会人	一般	社会人	一般	社会人
生活科学部	人間・環境科学	10 名		0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	発達臨床心理学			12	2	2	0	2	0	13	3	4	0	4	0
	生活社会科学			12	4	3	2	3	1	17	2	4	0	4	0
	生活文化学			1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0
	計	10 名		25	6	5	2	5	1	34	5	8	0	8	0

資料 4-②-D 留学生、社会人入学試験実施状況（入試チーム作成）

区分		募集人員	平成 22 年度			平成 23 年度			平成 24 年度		
			志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数
生活科学部	食物栄養	若干名	2	0	0	4	0	0	1	0	0
	人間環境		0	0	0	2	0	0	2	0	0
	人間生活		14	2	2	9	1	1	3	0	0
	計	-	16	2	2	15	1	1	6	0	0

【分析結果とその根拠理由】

アドミッション・ポリシーに沿った学生を選抜するため、学部入試では、受験科目や配点への配慮、小論文や面接の重視（一般入試）、集団討議や英語講義の実施（AO入試）、連携授業による適性の確認（高大連携特別選抜）などを行っている。第 3 年次編入については定員が満たされていないが、平成 23・24 年度の入学定員 125 に対して、志願倍率は 5 倍を越し、定員充足率は 1.08、1.10 であり、適正な状況である。

観点③： 入学者選抜が適切な実施体制により、公正に実施されているか。

【観点に係る状況】

入試実施体制として、入学試験実施委員会（Web 資料 4-③-1）の下に、学部入試実施部会（Web 資料 4-③-2）を設置している。入学者選抜に係る各種の要項については、教授会等の検討を経て入試実施部会で決定する。学部入試実施部会の下に、入試方法専門部会、入試問題専門部会、AO入試専門部会を置く。入試問題専門部会では一般選抜における作問の取りまとめを、入試方法専門部会では入試の実施方法に関する具体的な検討を行い、AO入試専門部会ではAO入試に関する企画や実施等を担当する。入試の実施に係る業務や採点等は、学部入試実施部会が直接掌握し運営する。合格者判定は厳密な採点とその検査を経て行い、多数の集計員による成績集計確認のもとに判定資料が作成される。この資料に基づき教授会の議を経て合格者の決定を行う。一般選抜後、合格者数、合格者平均点等の情報をHPで公開し、希望者には入試成績の開示を行っている。

Web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容（URL、該当頁又は該当条文）
Web 資料 4-③-1	入学試験実施委員会規則 (http://www.ocha.ac.jp/reiki/act/frame/frame110000029.htm)
Web 資料 4-③-2	学部入試実施部会規程 (http://www.ocha.ac.jp/reiki/act/frame/frame110000030.htm)

【分析結果とその根拠理由】

学生募集要項等の作成から判定資料の作成まで、入学試験実施委員会の各入試実施部会が全過程を掌握し実施している。合否判定は各部局において、責任の所在や役割分担を明瞭にした上で実施され、入学者選抜の公正さが確保されている。また、入試の集計データをHPで公表するとともに、個人に対する入試成績開示を行い、透明性を高めている。以上のことから、入学者選抜が適切な体制により、公正に実施されていると判断される。

観点④： 入学者受入方針に沿った学生の受入が実際に行われているかどうかを検証するための取組が行われており、その結果を入学者選抜の改善に役立てているか。

【観点に係る状況】

入試の企画、広報等を行う組織として教育機構内に入試推進室が設置され、各種入試の問題点や改善点を抽出し、アドミッション・ポリシーに沿った学生の受入れが行われたかを検証している（資料 4-④-A）。大学の方針を踏まえ、生活科学部入試委員会は、各学科・講座の入試実施に関する具体的な計画や、反省点の確認、改善案などについて検討している。本委員会は第3年次編入学試験の英語試験について検討し、平成25年度入試から英語の試験をTOEICの成績にかえることに変更した。また編入学の定員数を見直す検討に入る予定である。平成23年度の複数プログラム選択制導入に伴い、人間生活学科では入試ワーキング・グループが組織され、講座間で面接体制を共同化する方法を策定し、アドミッション・ポリシーに沿った選抜をより徹底させている（資料 4-④-B）。生活科学部は他学部に比して入学辞退者が少ない（資料 4-④-C）。

資料 4-④-A 入試推進室

○国立大学法人お茶の水女子大学機構規則（業務）（抜粋）
第 12 条 入試推進室は、次に掲げる業務を行う。 - 一 入学者選抜に関する将来構想計画及び企画立案、実施に関すること。 - 二 その他所掌業務に関し必要なこと。

資料 4-④-B

○学部入試委員会、人間生活学科入試WGの検討状況
平成 22 年度 第 4 回生活科学部入試委員会・人間生活学科入試ワーキング・グループ 議事録（案） 日時：平成 22 年 12 月 21 日 12 時 15 分より 13 時まで 場所：大学本館 3 2 2 室 出席者：岩壁茂（発達臨床心理学講座）、鈴木禎宏（生活文化学講座）、赤松理恵（入試委員）、杉田孝夫（学部長） 欠席者：小谷眞男（生活社会科学講座） 議題： （1） 推薦・帰国子女・高大連携入試の反省 平成 23 年度入試（平成 22 年 11 月実施）から、推薦・帰国子女・高大連携入試の実施方法を一部改めた。これに関し、次のような反省点が指摘された。 ・ 一次選考の方法については、問題がなかった。 ・ 面接チームの編成、およびその受験生への周知方法に関しては、やや問題があった。3 つのグループの別や、午前・午後の別が、受験生の間で不要な不安を招いたかもしれない。 ・ また、面接チームによって面接時間に関きがでたことや、判定基準が必ずしも統一されていない（統一できない）点も、反省点として残った。 ・ 面接に際し、学科として統一した採点シートを採用したことは、良かった。 これらの反省点をふまえ、今後の入試のあり方について次のような意見がでた。 ・ 長期的にみた場合、面接チームの編成は、「講座チーム」から「混合チーム」へと移行していくべきである。複数プログラム制の実施を考えると、複数のプログラムの教員が一人の受験生を面接することが望ましい。 ・ ただし、「混成チーム」への移行をどのようなスケジュールで行うかに関しては、今後検討を要する。 ・ 採点シートの統一に加え、質問（出題）の統一も今後検討する。 ・ 受験生一人あたりの面接時間を、学科として統一することを今後検討する（一人あたり 10～12 分か）。 （2） 三年次編入試験における英語の出題について 他大学の例を参考として、三年次編入試験において英語を出題する代わりに、TOEIC、TOEFL の成績を提出させることを、今後前向きに検討していくこととした。 以 上

資料 4－④－C

○入学辞退者数								
	平成 23 年度				平成 24 年度			
	前期日程		後期日程		前期日程		後期日程	
	入学者数	入学辞退者数	入学者数	入学辞退者数	入学者数	入学辞退者数	入学者数	入学辞退者数
文教育学部	124	17	34	5	137	17	28	10
理学部	82	6	23	5	86	1	25	6
生活科学部	89	2	18	0	87	4	22	0
合計	295	25	75	10	310	22	75	16

（「お茶の水女子大学平成 24 年度入学辞退者アンケート集計」2012 年 5 月、入試チーム作成をもとに改良）

【分析結果とその根拠理由】

各種入試に関する問題点や改善点の把握、アンケート調査の分析等を行い、平成 23 年度の複数プログラム選択制導入に伴う新たな特別選抜の導入や面接要領を策定している。以上のことからアドミッション・ポリシーに沿った学生の受入れが実際に行われているかどうかを検証するための取組みが行われており、その結果を入学者選抜の改善に役立てていると判断される。

観点⑤： 実入学者数が、入学定員を大幅に超える、又は大幅に下回る状況になっていないか。また、その場合には、これを改善するための取組が行われるなど、入学定員と実入学者数との関係の適正化が図られているか。

【観点に係る状況】

入学定員に対する実入学者数の定員充足率は 1.10（平成 24 年度）であり適正な値となっている（前掲資料 4－②－B）。実入学者数の改善に関する取組みは、入試推進室等で入学者動向を分析するとともに、役員会等で入学者数の管理に関する検討を行っている。現在、入試区分（AO、推薦、前後期日程など）に対する各学科の定員配分の見直しが検討されている。

資料 4－②－B（再掲） 入学試験実施状況

学部名	平成 23 年度					平成 24 年度				
	入学定員	志願者数	入学者数	志願倍率	定員充足率	入学定員	志願者数	入学者数	志願倍率	定員充足率
生活科学部	125	726	135	5.81	1.08	125	657	137	5.26	1.10
食物栄養学科	36	282	39	7.83	1.08	36	290	39	8.06	1.08
人間・環境科学科	24	106	26	4.42	1.08	24	108	28	4.50	1.17
人間生活学科	65	338	70	5.20	1.08	65	259	70	3.98	1.08

【分析結果とその根拠理由】

入学定員に対して実入学者数が大幅に超過したり下回ったりする状況にはなっていない。定員管理に関する取組みが慎重に行われており、入学定員と実入学者数との関係の適正化が図られていると判断される。

(2) 優れた点及び改善を要する点**【優れた点】**

アドミッション・ポリシーに沿った学生の受入れが行われており、平成 23 年度からは、複数プログラム選択制導入に伴い、入学時の間口を広くし、より広い視野から徐々に専門性を高めるカリキュラムに向けた改善が行われている。HPや印刷物等を通じてアドミッション・ポリシーを広く公表するとともに、入試方法についても、募集単位ごとにきめ細かく受験科目や配点を設定し、小論文や面接の重視、AO入試での集団討議や英語講義の実施、面接要領の策定等、アドミッション・ポリシーに沿った学生受け入れの工夫を行っている。

【改善を要する点】

3 年次編入学試験の定員、入試区分（AO、推薦、前後期日程など）に対する各学科の定員配分等の見直しを検討される必要がある。

基準 5 教育内容及び方法

(1) 観点ごとの分析

<学士課程>

観点①： 教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められているか。

【観点到係る状況】

本学部教育課程の編成・実施方針は「生活科学部教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）」により、学部・学科およびプログラム毎に定められている（資料 5－①－A）。また人間・環境科学科および人間生活学科の3講座が提供する主プログラム、強化プログラム、副プログラムには教育目標および内容・構成が、『学生便覧 履修ガイド』に明記されている（資料 5－①－B）。生活科学を文理融合の総合応用科学として位置づけ、高度の専門的知識と市民的教養、判断力を養うことをカリキュラムの理念としている。

資料 5－①－A 教育編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）

○生活科学部教育編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）（抜粋）

生活科学部の教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）

生活科学部は、人間と生活と環境を分析的かつ総合的に理解する技法を学び、専門的学知に裏打ちされた確かな教養と豊かな構想力を身につけ、将来、社会の多方面で活躍する女性リーダーを育成することを使命としている。この目的を実現するために、食の科学と健康、人間と環境、人間の生活（発達と心の健康、社会、文化）という人間生活の主要問題群に従って、学部を3学科で編成し、高度に専門分化した学知を結集して、現代生活の諸問題を、生活者の視点から多面的かつ総合的に解明することを目指す。カリキュラムは以下の見地から構成される。

1. 文理融合の総合応用科学としての生活科学という見地からカリキュラムを構成する。
2. 公共の利益に資する高度な専門知識、市民的教養、判断力を身につけることをカリキュラムの根本理念とする。それを実現するために、質の高い講義、少人数の実験・実習・演習、個々に応じた卒業論文作成指導を基軸とするカリキュラムの中で、思考力と対話能力を広めかつ深める。
3. 専門教育に関連する各種資格の取得を念頭に置いたカリキュラムを構成し、卒業後の進路選択に資する。高等学校・中学校教員免許（家庭）取得のための科目を設置する。

（大学HP http://www.ocha.ac.jp/program/curriculum_policy/undergrad.html）

資料 5-①-B プログラム教育目標

○生活科学部 主プログラム・強化プログラム 教育目標 (抜粋)		
【人間・環境科学科の例】		
	主 60 単位	強化 20 単位
主プログラム ①教育目標 環境と人間との間でのアンバランスから生じるさまざまな問題に対し、人間が享受する快適性、利便性、安全 安心を生活者にとって重要な要素と位置付けた上で、互いに影響を受け合って変化する環境と人間との間のダイナミクス（相互作用）を、環境と人間の双方の視点から、また歴史 進化史的視点のもとで科学的に理解することを目標とする。さらには、人間と環境がバランスを保ちつつ暮らせる具体的な対策を、社会に対して提案して実践する能力を養うことを教育目標とする。		
②内容 構成 人間と環境のあいだの問題の解決には定量制や客観性といった科学的な思考能力が不可欠であるため、入学後の 1 2 年次には、徹底した自然科学系基礎教育（数学、物理、化学、生物、統計学など）を行い、卒業研究のための基礎力を涵養する。3 年次には関心に従い、応用へ展開する諸科目を学習する。4 年間の勉学を通じて、科学技術の実践的な応用、生活関連分野におけるタイムリーなテーマへの取り組み、研究成果の社会での応用 評価などを学ぶ。		
強化プログラム ①教育目標 科学技術応用による具体課題の解決に対する社会的要求に応えるべく、実験実習を中心に充実した工学教育プログラムを提供する。本プログラムでは工学分野における主要科目（講義科目ならびに実験演習科目）を配置し、設計から評価にわたる徹底した一連の工学教育を展開する。そして、理系における実務教育の実施および女性技術者の育成に努める。なお、二級建築士受験資格を目指すものは、必要となる単位数が異なるので、注意すること。		
②内容 構成 主プログラムで学んだ自然科学基礎力を一層発展させることとし、工学的トレーニングを通じて、設計 評価能力を養う。また、プレゼンテーション技術を身につける。世界的科学技術競争の激化、少子高齢化、安全と安心の問題や地球的課題などに対応すべく、優れた創造的人材を育成する。理工系の基礎能力を身に付け、かつ、生活 生活の質に関連した具体的応用課題に対する解決能力を有する人材の育成をはかる。		
『学生便覧 履修ガイド 2012』 P. 137～156)		

【分析結果とその根拠理由】

生活科学として、いずれの学科・講座においても現代生活の問題を多角的に検証し、問題の解決にいたる実践的能力の習得を目指している。すなわち環境、社会、人間発達、歴史、文化の広い視野で、相互の関連を重視しつつ、基礎的知識の習得とともに、問題解決のための応用力の養成にちからを入れており、本学部のカリキュラム・ポリシーは明確に提示されていると判断される。

観点②： 教育課程の編成・実施方針に基づいて、教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切なものになっているか。また、選択履修制度は定着しているか。

【観点に係る状況】

本学部の教育課程は「生活科学部履修規程」により定められている。本学部は「コア科目」30 単位を必修として課し、一定の教育水準の保証を図っている。一方「専門科目」の習得単位については学科の教育目標によって異なる（資料 5-②-A）。食物栄養学科では、専攻科目として 101 単位、卒業要件として 138 単位の履修を課し、高度の専門教育を行っている。プログラム選択履修制度を採っている人間・環境科学科では、専門教育科目として 80 単位、人間生活学科では 62 単位の履修を課している。専門科目には、履修年次を示し、各学科ともに学年進行に従った教育課程を構築している（資料 5-②-B）。2 学科に採用されている選択履修制度については、生活科学部履修規程の別表第 2 として、三つ目までのプログラム選択が示され（資料 5-②-C）、さらに『生活科

学部『履修の手引き』に説明を加えている（資料 5-②-D）。以上のような教育課程を編成しており、学士「生活科学」の学位を卒業した者に授与している（資料 5-②-E）。

資料 5-②-A 生活科学部教育課程の編成（『学生便覧 履修ガイド 2012』P. 213～222）

○生活科学部履修規程 別表 1-1、別表 1-2（第 5 条関係）

別表第1－1（第5条関係）																		
学科別 科目区分	必修及び選択必修の科目・単位								自由に選択して履修する科目・単位								卒業に必要な履修単位数	
	コア科目					専門教育科目(必修プログラム)			コ ア 科 目	専 攻 科 目	学 部 共 通 科 目	自 由 科 目	他 学 部 の 科 目	全 学 共 通 科 目	教 職 共 通 科 目	教 職 に 関 する 科 目		必修以外の 選択プログラム
	文理融合リベラルアーツ	基礎講義	情報報	外国語	スポーツ健康	主プログラム	強化プログラム	副プログラム										
人間・環境科学科	30					60	20			14								124
人間生活学科	30					42	20			32								124

別表第1－2（第5条関係）																		
学科別 科目区分	必修及び選択必修の科目・単位							自由に選択して履修する科目・単位								卒業に必要な履修単位数		
	コア科目					専 攻 科 目	学 部 共 通 科 目	コ ア 科 目	専 攻 科 目	学 部 共 通 科 目	自 由 科 目	他 学 部 の 科 目	全 学 共 通 科 目	教 職 共 通 科 目	教 職 に 関 する 科 目		必修以外の 選択プログラム	
	文理融合リベラルアーツ	基礎講義	情報報	外国語	スポーツ健康													
食物栄養学科	30					101	4	3								138		

資料 5-②-B 授業科目一覧（『学生便覧 履修ガイド 2012』P. 139～160）

○生活科学部履修規程 主プログラム 強化プログラム（抜粋）【人間・環境科学科の例】

授業科目	単位	履修年次	CCBM	プログラム◎必修○選択			
				主プログラム	備考	強化プログラム	備考
統計学	2	Ⅱ	Green	○			
基礎有機化学	2	Ⅰ	Pink	○			
数学物理学演習Ⅰ	2	Ⅰ	Pink	○			
物理学	2	Ⅰ	Pink	○			
生物化学	2	Ⅱ	Green	○			
人体解剖学	2	Ⅰ	Pink	○			
環境科学	2	Ⅱ	Green	○			
情報工学演習	2	Ⅲ	Red	○			
人間環境科学演習	2	Ⅲ	Red	○			
人間環境科学実験実習Ⅰ	2	Ⅲ	Red	○			
人間環境科学実験実習Ⅱ	2	Ⅲ	Red	○			
人間環境科学実験実習Ⅲ	2	Ⅲ	Red	○			
人間環境科学輪講Ⅰ	2	Ⅳ	Red	○			
人間環境科学輪講Ⅱ	2	Ⅳ	Red	○			
卒業論文	10	Ⅳ	Red	○			
数学物理学演習Ⅱ	2	Ⅰ	Pink	○	以下の科目から 22 単位以上 選択		
物理化学	2	Ⅱ	Green	○			
反応工学論	2	Ⅱ	Green	○			
環境生理学	2	Ⅱ	Green	○			
ヒトと文化	2	Ⅰ～Ⅳ	Pink	○			
人体計測学演習	4	Ⅱ	Green	○			
科学英語演習	2	Ⅲ	Green	○			
機器分析演習	2	Ⅱ	Green	○			

資料 5-②-C プログラムの選択

○生活科学部履修規程 別表第 2

別表第 2 (第 5 条関係)

【(生) 二つ目の選択プログラム】(別表第 1-1 備考 5 関係)

所属学科・講座	所属学科の強化プログラム以外に選択することのできる「選択プログラム群」					
	人間・環境科学(副)	発達臨床心理学(副)	公共政策論(副)	ジェンダー論(副)	生活文化学(副)	消費者学(学際)
食物栄養学科						
人間・環境科学科		×	×	×	×	○
人間生活学科	発達臨床心理学講座	○	○	○	○	○
	生活社会科学講座	○	○	○	○	○
	生活文化学講座	○	○	○	○	○

【(生)三つ目の選択プログラム(文・プログラム)】(別表第 1-1 備考 8 関係,別表第 1-2 備考 4 関係)

所属学科・講座	所属学科の強化プログラム以外に選択することのできる「選択プログラム群」														
	哲学・倫理学・美術史(副)	比較歴史学(副)	地理環境学(副)	日本語・日本文学(副)	中国語圏言語文化(副)	英語圏言語文化(副)	仏語圏言語文化(副)	日本語教育(副)	社会学(副)	教育科学(副)	心理学(副A)人間社会科学科対象	心理学(副B)人間社会科学科以外対象	舞踊教育学(副)	音楽表現(副)	グローバル文化学(学際)
食物栄養学科	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
人間・環境科学科	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
人間生活学科	発達臨床心理学講座	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	生活社会科学講座	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	生活文化学講座	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

【(生)三つ目の選択プログラム(理・プログラム)】(別表第 1-1 備考 8 関係,別表第 1-2 備考 4 関係)

所属学科・講座	所属学科の強化プログラム以外に選択することのできる「選択プログラム群」							
	数学(副)	物理学(副)	化学(副)	生物学(副)	情報科学(副)	応用数理(学際)	物理・化学(学際)	ケミカルバイオロジー(学際)
食物栄養学科	○	○	○	○	○	○	○	○
人間・環境科学科	○	○	○	○	○	○	○	○
人間生活学科	発達臨床心理学講座	○	○	○	○	×	×	×
	生活社会科学講座	○	○	○	○	×	×	×
	生活文化学講座	○	○	○	○	×	×	×

【(生)三つ目の選択プログラム(生・プログラム)】(別表第 1-1 備考 8 関係,別表第 1-2 備考 4 関係)

所属学科・講座	所属学科の強化プログラム以外に選択することのできる「選択プログラム群」					
	人間・環境科学(副)	発達臨床心理学(副)	公共政策論(副)	ジェンダー論(副)	生活文化学(副)	消費者学(学際)
食物栄養学科	○	○	○	○	○	○
人間・環境科学科		○	○	○	○	○
人間生活学科	発達臨床心理学講座	○	○	○	○	○
	生活社会科学講座	○	○	○	○	○
	生活文化学講座	○	○	○	○	○

『学生便覧 履修ガイド 2012』P. 215)

資料 5-②-D 複数プログラム選択履修制度

○複数プログラム選択履修制度について (抜粋)

(3) 人間生活学科

人間生活学科の 1 年生は、まずコア科目やリベラルアーツ科目群を学びつつ、学科の必修科目・選択必修科目を履修して、1 年次終了までに、学科の提供する三つの主プログラム（発達臨床心理学主プログラム、生活社会科学主プログラム、生活文化学主プログラム）のいずれかを選択します。そして 2 年次終了時に、すでに履修している主プログラムを基礎として二つ目のプログラムを選択し、以降三つ目のプログラムも選択することができます。

二つ目のプログラムとして選択可能なのは、それぞれの主プログラムに接続する「強化プログラム」、また生活科学部内の他学科、もしくは同一学科の他の主プログラム主宰講座が提供する「副プログラム」、そして「消費者学学際プログラム」のいずれかになります。また三つ目のプログラ

ム（選択は任意）については、学科・学部、理系・文系の枠を超えて自由に選択して学ぶことができます。

（『生活科学部 履修の手引き 平成 24 年度』P. 3～4）

資料 5-②-E 授与される学位

○お茶の水女子大学学位規則（抜粋）

（学位の名称）

第 2 条 本学において授与する学位は、学士、修士及び博士とする。

2 学位に付記すべき専攻分野の名称については、次の表のとおりとする。

学部又は研究科			学位	専攻分野の名称
文教育学部			学士	人文科学
理 学 部				理学
生活科学部				生活科学
大学院人間文化創成科学研究科	博士前期課程	比較社会文化学専攻	修士	人文科学、社会科学、生活科学、学術
		人間発達科学専攻		人文科学、社会科学、生活科学、学術
		ジェンダー社会科学専攻		人文科学、社会科学、生活科学、学術
		ライフサイエンス専攻		生活科学、理学、学術
		理学専攻		理学、学術
	博士後期課程	比較社会文化学専攻	博士	人文科学、社会科学、生活科学、学術
		人間発達科学専攻		人文科学、社会科学、生活科学、学術
		ジェンダー学際研究専攻		人文科学、社会科学、生活科学、学術
		ライフサイエンス専攻		生活科学、理学、学術
		理学専攻		理学、学術

第 3 条 学位を授与された者は、その学位の名称を用いるときは、本学(この条において「お茶の水女子大学」とする。)の名称を付記するものとする。

第 2 章 学士の学位

（学位授与の要件）

第 4 条 学士の学位は、本学を卒業した者に授与する。

【分析結果とその根拠理由】

教養教育と専門教育との有機的な連携が図られる一方、専門教育の授業科目および課程編成には、学科もしくは講座による個別の特徴を示している。専門科目の履修単位数および必修・選択科目の配置に学科・講座による個性が示されているとともに、全体として生活・環境・健康をめぐる諸問題の解決に向けて、自然科学・人文社会科学の両面で探究する学部教育の体系性は確保されている。またプログラム選択履修制度において消費者学学際プログラムが、人間・環境科学科および人間生活学科の 3 講座に共通した副プログラムとして設定され、文理融合の生活科学の理念が示されている。

観点③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。特に学生の満足度や不満を把握しているか。

【観点に係る状況】

平成 23 年度より全学的に導入されたプログラム選択履修制度を、人間・環境科学科および人間生活学科は採用し、学生は副専攻として他学部・他学科・他講座のプログラムを選択できる。国内 4 大学との単位互換制度があ

り（資料 5-③-A、資料 5-③-B）、国外の大学についても単位互換を認めている（資料 5-③-B、C）。インターンシップは、「人間・環境科学特別実習」「栄養臨地実習」「生活社会科学特別実習」等の科目名で全学科において行われ、単位化されている（資料 5-④-A）。人間・環境科学科および人間生活学科では第 3 年次編入を実施し、編入生には他大学にて取得した単位の認定を行っている（学則第 18 条）。家庭科教員免許、幼稚園教員免許、栄養教諭免許の取得を促し、また学芸員資格、社会調査士資格、消費生活アドバイザー資格の取得を促している（資料 5-③-D）。学生の授業内容に対する満足度は、学期末に行われる学生アンケートによって、担当教員に通知される。教員指導に関する専門教育の満足度は全学で平均して 87%が、「満足」または「ある程度満足」と回答しているが、人間・環境科学科および人間生活学科では 90%以上と特に高い（資料 5-③-E）。平成 22 年度から社会人、特に保育・就学前教育・子育て支援などにかかわる現職者を対象とした特別設置科目群があり、社会人は科目等履修生として、学生は通常の授業として受講できる（資料 5-③-F）。授業科目の内容には、学術の発展動向が反映され、たとえば「家族社会学総論」は、文科省委託事業による研究プロジェクト「ジェンダー・格差センシティブな働き方と生活の調和」による最新の研究を反映させている（資料 5-③-G）。

資料 5-③-A 学部単位互換制度

○学部学生交流協定に基づく単位互換制度					
学部学生交流協定校一覧					
協定先	受入・派遣学生の条件				履修可能学部
	対象学生	文教育学部	理学部	生活科学部	
東京工業大学	—	○	○	○	理学部／工学部／生命理工学部
東京芸術大学	—	○	○	○	音楽学部
共立女子大学	—	×	×	○	家政学部
東京外国語大学	2 年生以上	○	○	○	外国語学部／言語文化学部／国際社会学部
東京海洋大学	—	×	○	×	海洋学部

（『学生便覧 履修ガイド 2012』P. 28～29）

資料 5-③-B

○他大学との単位互換実施状況（教務チーム作成）						
区分	平成 22 年度			平成 23 年度		
	互換先大学等名	履修者数	単位履修者数	互換先大学等名	履修者数	単位履修者数
文教育学部	東京外国語大学	3	2			
	東京芸術大学	5	3			
	東京工業大学	4	0			
理学部	東京工業大学	8	7	東京工業大学	8	5
生活科学部				東京工業大学	2	0

○国外大学との単位互換実施状況（教務チーム作成）				
区分	平成 22 年度		平成 23 年度	
	大学等名	単位履修者数	大学等名	単位履修者数
文教育学部			アンカラ大学	1
	オタゴ大学	1		
			北京外国語大学	1
			淑明女子大学校	1
			大連外国語学院	1
			パデュー大学	1
			パリ第 7 大学	1
			ブッパタール大学	1
			ブレーズ・パスカル大学	1
			マンチェスター大学	2
	梨花女子大学	1	梨花女子大学校	1
	ロンドン大学	1	ロンドン大学 アジアアフリカ研究学院	1
	マンチェスター大学	5	マンチェスター大学	10
	モナシュ大学	6	モナシュ大学	5
	オタゴ大学	2	オタゴ大学	4
理学部	オタゴ大学	1	オタゴ大学	1
	ハル大学	5	ハル大学	6
	マンチェスター大学	2	マンチェスター大学	3
	モナシュ大学	2		
生活科学部	オタゴ大学	5	オタゴ大学	2
	モナシュ大学	2	モナシュ大学	1
	ハル大学	1		
			マンチェスター大学	5

語学研修

資料 5-③-C 交換留学派遣制度 (『学生便覧 履修ガイド 2012』P. 34～35)

○派遣先大学一覧

大学間交流協定校一覧 (学生派遣可能な協定校のみ)

(2012年3月現在)

協定大学	締結年月日	国・地域名
アジア (16校)		
1 韓国芸術総合学校舞踊院	2011. 01. 17	韓国
2 慶北大学校	2011. 06. 22	韓国
3 淑明女子大学校	2000. 02. 14	韓国
4 同徳女子大学校	2005. 03. 30	韓国
5 梨花女子大学校	2000. 02. 28	韓国
6 大連外国語学院	2006. 10. 02	中国
7 北京外国語大学	2005. 10. 17	中国
8 北京大学歴史学系	2002. 01. 26	中国
9 復旦大学歴史学系	2010. 10. 17	中国
10 国立政治大学	2001. 07. 25	台湾
11 国立台北芸術大学	2002. 01. 29	台湾
12 国立台湾大学	1999. 12. 17	台湾
13 タマサート大学	2007. 06. 13	タイ
14 チェンマイ大学	2010. 05. 27	タイ
15 プリンス・オブ・ソンクラーク大学	2009. 08. 14	タイ
16 国立ハノイ教育大学	2008. 03. 03	ベトナム
中 東 (1校)		
17 アンカラ大学	2007. 08. 08	トルコ
アフリカ (2校)		
18 カイロ大学	2007. 03. 15	エジプト
19 マンソウラ大学	2003. 03. 30	エジプト
北 米 (3校)		
20 ヴァッサー大学	2006. 06. 01	アメリカ
21 パーデュー大学	2004. 01. 26	アメリカ
22 マウントアリソン大学	2006. 08. 09	カナダ

協定大学	締結年月日	国・地域名
オセアニア (3校)		
23 ニューサウスウェルズ大学	2011.09.30	オーストラリア
24 モナシュ大学	1994. 12. 14	オーストラリア
25 オタゴ大学	2003. 12. 19	ニュージーランド
ヨーロッパ (19校)		
26 オックスフォード大学クイーンズコレッジ	1994. 01. 18	イギリス
27 ケンブリッジ大学ガートンコレッジ	1994. 07. 20	イギリス
28 マンチェスター大学	2009. 09. 15	イギリス
29 ロンドン大学 東洋・アフリカ研究学院	1999. 08. 05	イギリス
30 ストラスブール大学	2002. 07. 05	フランス
31 パリ・ディドロ (パリ第7) 大学	2008. 02. 01	フランス
32 ブレーズ・パスカル (クレルモン第2) 大学	2009. 08. 28	フランス
33 ケルン大学	2010. 03. 18	ドイツ
34 ブレーメン応用科学大学	2011. 01. 21	ドイツ
35 バーギシェ・ブッパタル大学	2002. 02. 24	ドイツ
36 国立ナポリ大学オリエンターレ	2011. 01. 11	イタリア
37 ウィーン工科大学	2002. 12. 05	オーストリア
38 スロバキア工科大学	2003. 03. 04	スロバキア
39 カレル大学	2004. 09. 07	チェコ
40 ワルシャワ大学	2010. 02. 10	ポーランド
41 ブカレスト大学	2009. 08. 03	ルーマニア
42 オウステロボテナ先端科学大学	2009. 12. 01	フィンランド
43 タンペレ大学	2003. 02. 13	フィンランド
44 トムスク国立教育大学	2002. 07. 03	ロシア

※ 1. 協定大学48校の内、学生を派遣できる協定校のみを記載しています。

※ 2. 協定校は随時更新されますので、最新情報は以下の大学HPにてご確認ください。

<http://www.ocha.ac.jp/intl/exchange.html>

資料 5—③—D

○「家庭科教員キャリアコース」(左)、「消費生活アドバイザー資格取得支援プログラム」(右) パンフレット

家庭科は、生活を広く奥深く……

高等学校では… (お茶大附属高校の場合) Senior high

高校は、必修「家庭総合」5単位です。

衣・食・住・生活設計・共生、高齢者・福祉・保育・消費経済・環境・生活文化、の各分野を学んでいます。具体的には、以下のような内容が中心です。

何をどれだけ食べればよいのか？ 調理の基本、食文化、マナー、地球にも自分にもやさしく持続可能な「ミニマム・エッセンシャル・サステナブル・クッキング」、食の衛生・安全・環境、衣生活と環境、スカート製作、手縫いの基礎、住生活と安全・健康、住歴史、現代建築見学、住宅設計、高齢社会と福祉、介護体験、附属幼稚園・ナースリ訪問、子どもの発達と育児支援、乳幼児の食生活実習、絵本作成、生活文化、行事食、刺し子、水引、消費者としての自立、暮らしと経済、貯金・保険・年金制度、クレジット・消費生活、エシカル消費、消費と環境、フェアトレード、民法 婚姻 相続 相続 女性史とジェンダー etc.

● 生徒の声 (高等学校) ●

「目の前のものが、世界やいろいろな人の暮らしにつながっていることを、物を通して考えるようになった。」「家庭科は調理や縫製というイメージが強かったがもっと広い分野のことを学んだ。」「ジェンダーが案外意識に置かれていてよかった。」「調理の楽しさを知ることができた。作ったスカートは今も持っている。」「考えることが多く楽しかった。将来は家庭科的な仕事につきたい。」「生きる基盤となるのは家庭科だと再確認した。」「

先輩から

● 伊藤葉子 さん(昭和58年家庭学研究科修士課程修了、千葉大学教育学部教授・家庭科教員)

「家庭科」教師は、魅力あるキャリアだと思えます。特に、長い目でみれば、私の所属する教育学部では、中学校の教師をめざす人は、二つ目の免許(2種)をとることになっています。最近、この二つ目の科目として「家庭科」を希望する学生さんが、とても多くなってきました。男子学生の割合も少なくありません。ある男子学生が、言いました。「もう一つ教科を受け持ったら、家庭科がいい!」年を重ねるとともに、教えるのがおもしろくなっていきそうな科目だから」

私自身はと振り返ってみると、大学院の2年のときに、たまたま非常勤講師をすることになり、教えてみて、なかなかおもしろそう、教師なら働き続けることができるし…と、当時住んでいた神奈川県某高校の家庭科の教師になりました。その後、男子中学校で教えたり、いくつもの大学の非常勤を掛け持ちしたりと、教える対象は変化しただけで、中身はいつも家庭科でした。

大学を離れて、はや30年たち、今、家庭科という教科のもつ広さと奥深さをより実感しています。それは、夫と二人三脚で3人の息子を育てるなかで、私自身が、日々の生活という喜びを重ねていくことの大切さを痛感したからです。だから、「家庭科」教師は、魅力あるキャリアだと思えます。特に、長い目でみれば、1人でも多くの後輩が、この魅力あるキャリアに興味をもっていただければ嬉しいなと思っています。

お茶の水女子大学 生活科学部
あなたのキャリア計画を支援します

消費生活アドバイザー資格取得支援プログラムに登録しましょう

生活科学部には、消費生活アドバイザー資格取得に必要なカリキュラムが揃っています。消費者と企業の関係、消費者行政、消費者相談、消費者問題などに関心がある人、消費生活アドバイザー資格に関心のある人は、プログラムに登録して、アドバイザー資格取得に挑戦しませんか。

「お客様との接点の例」(パナソニック株式会社)

消費生活アドバイザーの活躍の場は、企業や行政機関などさまざま。
[企業での例] 消費生活アドバイザーは、企業と消費者とのさまざまな接点で、コミュニケーションを円滑かつ有意義にするために力を発揮している。

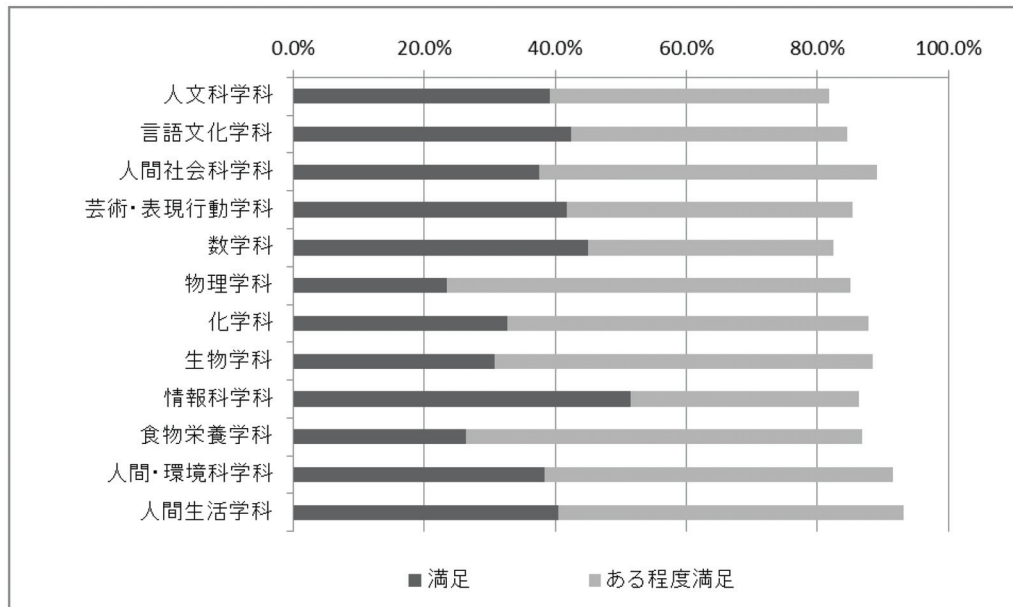
支援プログラムに登録すると、こんなメリットがあります。

- ◆ 消費生活アドバイザー資格取得のための履修計画のアドバイスが受けられます。
- ◆ 消費生活アドバイザー、消費者関連専門家会議、消費生活アドバイザー コンサルタント協会などの情報が得られます。
- ◆ 消費生活アドバイザー資格で活躍している人からのメッセージを受けられます。

資料 5-③-E 専門教育の満足度

○教員指導に対する評価

図表 2-21 全体的な教員指導の満足度(専門教育)



注)「ある程度不満」および「不満」、無回答の割合はグラフから省略した。

(『平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査』 P. 15～16)

資料 5-③-F 特別設置科目群

○「変革期の乳幼児教育・保育を考える」前学期(4月開講)科目等履修生募集(抜粋)

わが国の幼児教育、保育は、この数年来さまざまな変革の波にさらされています。

お茶の水女子大学「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業(ECELL:エクセル)は、幼稚園教諭、保育士などの現職者をはじめ、子どもに関わる社会人の方々を対象として、生活科学部に特別設置科目を開設し、豊かな保育や子育てを実現できるよう再学習の機会を提供しております。

平成 24 年度も引き続き「変革期の乳幼児教育・保育を考える」を主題として、ECELL 社会人プログラムを実施いたします。社会人受講生は科目等履修生として登録され、一定の条件を満たせば生活科学部で単位が認定されます。多くの方々のご応募をお待ちしております。(旧アプリカ特設講座で単位を取得された社会人受講生の方も、科目内容が異なりますので全科目受講可能です。また、平成 22 年度に開講された同一名称の科目に関して再度履修を希望する場合には、聴講というかたちでの受講が可能です。)

応募方法については、出願要項をご覧ください。なお、本学卒業生(本学学部から本学大学院博士前期課程に飛び入学した者を含む)・修了生(大学院博士後期課程の単位修得退学者を含む)は入学金が無料となります。

(大学HP「平成24年度お茶の水女子大学ECELL社会人プログラム前学期科目等履修生募集」

<http://www.ocha.ac.jp/news/h240209.html>)

資料 5-③-G

○シラバス (大学HP「お茶の水女子大学シラバス」) (http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index_gakka.cfm)
http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index_kyoin.cfm?jugyo=12D0709



お茶の水女子大学 シラバス
Ochanomizu University Syllabus

家族社会学総論 [12D0709]

科目名	家族社会学総論 [12D0709] Introduction to Family Sociology
科目区分・科目種	生活社会科学講座
クラス	生活社会科学講座
単位数	2.0単位

担当教員・所属	石井クンツ 昌子 [生活科学部]
主担当学科	人間生活学科 生活社会科学講座
連絡場所	

履修年次	3 年
学期	前期
曜日・時限	火曜 5.0～6.0
教室	①生活科学部本館209室

受講条件・その注意	特になし
-----------	------

授業の形態	講義・討論・講読・発表
-------	-------------

教科書・参考文献	随時提示する。
----------	---------

評価方法・評価割合	小論文(レポート)=2本 20%、出席=毎回出欠をとる 20%、発表=グループによる口頭発表 30%、その他=グループ研究レポート、グループディスカッションへの参加 30%
-----------	--

主題と目標	社会学および家族社会学の理論と方法論を理解し家族社会学の様々なトピックについて学ぶ。主なトピックは同棲、結婚、夫婦関係、離婚、再婚と家族、セクシュアリティ、妊娠と出産、育児と子育て、父親と母親の役割、子どもの社会化、家事と育児の性別役割分担などである。さらにこれらのトピックを通して可能な限りの国際比較(特に日米比較)を行う。
-------	---

授業計画	1. クラス(シラバス)の説明、2. 社会学・家族社会学理論と調査方法、3. 男女の同棲と結婚、4. 夫婦関係、5. 離婚、再婚と家族、6. セクシュアリティ、7. 避妊、妊娠、出産、8. 育児と子育て、9. 父親と母親の役割、10. 家事と育児の家庭内性別役割分担
------	---

学生へのメッセージ	家族社会学の視点から家族内外の様々なトピックについて学びます。また日米比較を通して、グローバルな視点から日本の家族を理解していくことを重要視しています。ディスカッションも多くやりますので、積極的な授業態度で履修して下さい。
-----------	---

教務チーム 

Copyright (c) 2008 お茶の水女子大学 All rights reserved.
Last Update: 2012年10月18日

文理融合リベラルアーツWeb-Site

【分析結果とその根拠理由】

多様な授業を提供するために、国内外の協定大学との間で単位互換が行われている。インターンシップの単位化、教員免許や資格の取得を支援するための「家庭科教員キャリアコース」「消費生活アドバイザー資格取得支援

プログラム」の実施により、学生の進路選択に資する配慮がなされている。第3年次編入を認め、既習得単位の認定を行っている点で社会の要請に対応している。専門教育に対する満足度も高く、学術の発展動向を反映した授業内容であり、社会の要請に従った教育課程編成であると判断される。

観点④：教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

【観点到係る状況】

本学部では、学科・講座の教育目標に応じて、講義、演習、実験、実習の授業形態を置いている（資料 5-④-A）。食物栄養学科では、専攻科目 55 科目中に、実習 8、実験 6、演習 2 の科目が含まれている。人間・環境科学の主・強化プログラム 57 科目には、実習 5、演習 7 の科目が含まれる。人間生活学科では、3 講座の性格によって異なる。発達臨床心理学主・強化プログラム 56 科目には、実習 4、演習 10、生活社会科学主・強化プログラム 77 科目には、演習 19、実習 2 が、生活文化学主・強化プログラム 48 科目には、実習 4、演習 8 が含まれる。学科・講座の特性が顕著である本学部では、それぞれの分野の性格に応じた学習指導が行われている（資料 5-④-B）。また本学部の特徴は少人数教育にあり、学生と教員の人数比はおよそ 3 対 1 である。

資料 5-④-A 専攻科目 (『学生便覧 履修ガイド 2012』 P. 213～222)

○専攻科目 (第 5 条関係) 食物栄養学科 (事例)

別表第 8 専攻科目 (第 5 条関係)

食物栄養学科

授業科目	単位数	備考
●専攻科目(必修)	97	
解剖生理学Ⅰ	2	(Ⅰ)
生化学	2	(Ⅰ)
解剖生理学Ⅱ	2	(Ⅰ)
調理科学	2	(Ⅰ)
基礎調理学実習	1	(Ⅰ)
細胞生化学	2	(Ⅱ)
臨床医学総論	2	(Ⅱ)
代謝栄養学	2	(Ⅱ)
社会福祉学	2	(Ⅱ)
食品化学	2	(Ⅱ)
栄養教育論Ⅰ	2	(Ⅱ)
生活環境学	2	(Ⅱ)
食嗜好評価学	2	(Ⅱ)
応用調理学実習	1	(Ⅱ)
臨床医学各論Ⅰ	2	(Ⅱ)
臨床医学各論Ⅱ	2	(Ⅱ)
応用栄養学	2	(Ⅱ)
給食経営管理論	2	(Ⅱ)
食品製造・保存学	2	(Ⅱ)
食品微生物学	2	(Ⅱ)
臨床栄養アセスメント学	2	(Ⅱ)
栄養カウンセリング論	2	(Ⅱ)
分析化学実験	2	(Ⅱ)
解剖生理学実験	1	(Ⅱ)
食品微生物学実験	1	(Ⅱ)
病態栄養学	2	(Ⅲ)
食品衛生学	2	(Ⅲ)
臨床栄養療法学	2	(Ⅲ)
公衆栄養学	2	(Ⅲ)
栄養教育論Ⅱ	2	(Ⅲ)
ライフステージ栄養学	2	(Ⅲ)
公衆衛生学	2	(Ⅲ)
給食マネジメント論	2	(Ⅲ)
栄養行政学	2	(Ⅲ)
ライフスタイル栄養学	2	(Ⅲ)
食品機能論	2	(Ⅲ)
食事療法学	2	(Ⅲ)
栄養学実験	2	(Ⅲ)
応用栄養学実習	1	(Ⅲ)
食品製造・保存学実験	2	(Ⅲ)
栄養カウンセリング論実習	1	(Ⅲ)
公衆栄養学実習	1	(Ⅲ)
臨床栄養アセスメント学実習	2	(Ⅲ)
食品化学実験	2	(Ⅲ)
調理科学実験	2	(Ⅲ)
給食経営管理実習	2	(Ⅲ)
食物栄養管理論総合演習	2	(Ⅳ)
栄養臨地実習	4	(Ⅳ)
卒業論文	6	(Ⅳ)
●専攻科目(選択)	4	
*食物栄養専門英語	2	(Ⅱ)
食品学	2	(Ⅱ)
食品評価論	2	(Ⅲ)
食物栄養学基礎演習	2	(Ⅳ)
食物栄養学輪講	4	(Ⅳ)
*印はコア科目外国語(必修)英語に充てることができる。		
●専攻科目(選択)ー高大連携科目		
食物栄養学選択基礎	2	(Ⅰ)
高大連携科目は、大学との連携を行っている高校の生徒が履修する科目であるため、大学生は履修できない。なお、履修した生徒が本学に入学した場合は、当該科目は別表第 1-2 (第 5 条関係)「自由選択して履修する科目・単位」内の「専攻科目」の単位として認定することができる。		

資料 5-④-B

○シラバス (大学HP「お茶の水女子大学シラバス」) (http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index_gakka.cfm)http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index_search.cfm?jugyo=12D0014


お茶の水女子大学 シラバス
Ochanomizu University Syllabus

年度	科目別検索	学科別検索	教員別検索	プログラム別検索	資格別検索	時間割検索	全文検索
----	-------	-------	-------	----------	-------	-------	------

人間関係学 [12D0014]

科目名	人間関係学 [12D0014] Human Relations
科目区分・科目種	生活科学部共通
クラス	生活科学部
単位数	2.0単位

担当教員・所属	刑部 育子 [生活科学部] 高濱 裕子 [大学院人間文化創成科学研究科] 小玉 亮子 [大学院人間文化創成科学研究科]
主担当学科	人間生活学科 発達臨床心理学講座
連絡場所	

履修年次	1 年
学期	前期
曜日・時限	木曜 5.0~6.0
教室	①生活科学部本館306室

受講条件・その注意
1. 各回終了時にレポート提出(出席確認を兼ねる)。2. 各担当者ごとにレポート提出あるいは試験(計3回)。レポートは担当分終了後の1週間後が締め切り。発達臨床心理学講座の講座研(生活科学部本館353)に提出。

授業の形態
講義

教科書・参考文献
適宜、プリント資料を配布する。

評価方法・評価割合
小論文(レポート)=各担当者ごとにレポート提出あるいは試験(25%×3=75%)。出席=全体の3分の2以上出席することが条件(25%)。

主題と目標
子どもと子ども、子どもと大人の関係形成について、保育学、発達心理学、教育学的観点から考える。

授業計画
(授業の担当順については変更になることがあります。)
1. オリエンテーション(刑部、小玉、高濱)
2. 生涯発達心理学的観点から[担当:高濱]
(1) 親と子どものやりとり(相互交渉)
(2) 大人(親・保育者)と子どもの関係と愛着
(3) 大人によるしつけ・社会化と文化化
(4) 親行動の発達支援
3. 教育学的観点から[担当:小玉]
(1) ヨコの関係
(2) タテの関係
(3) ナナメの関係
(4) いろいろな関係
4. フィールド心理学的観点から[担当:刑部]
(1) 子ども同士の身体同調と共感性
(2) 子ども同士のあそび:自他の分化
(3) 子ども同士のあそびのストラテジー発達
(4) 集団における子ども同士の関係性

学生へのメッセージ
3人の教員がそれぞれの観点から授業を行います。上記の「主題と目標」を各自が念頭において、自分なりの「子どもと子ども、子どもと大人の関係学」を立体的に構成しようという姿勢をもってほしいと思います。



お茶の水女子大学Web Site

教務チーム 
Copyright (c) 2008 お茶の水女子大学 All rights reserved.
Last Update: 2012年6月4日

【分析結果とその根拠理由】

提供する授業科目に演習・実験・実習の占める割合は、25～40％であり、演習、実験、実習の配分も、学科・講座の特性に応じた構成になっている。少人数教育を生かし、また学科・講座の教育内容に応じた適切な学習指導が行われていると判断される。

観点⑤： 単位の実質化への配慮がなされているか。

【観点に係る状況】

学年歴により、1年間に35週の授業時間が確保され、授業は15週単位として行われている（資料5-⑤-A）。1年間の履修登録の上限の目安を50単位としている（別添資料5-⑤-1『学生便覧 履修ガイド』P.26）。平成22年度卒業生の平均取得単位数154単位は、23年度には148単位に減少し、科目毎の勉学はより充実したと思われる（資料5-⑤-A）。新入生には、入学式直後に行われる新入生セミナーにおいて、『生活科学部 履修の手引き』を配布、学科またはプログラム別に、モデル時間割を示すなど履修計画作成の指導を行っている（資料5-⑤-B、資料7-⑤-B）。また全教員がオフィス・アワーを設け、学生の授業に関する質問・相談を受ける体制をとっている（資料5-⑦-A）。自習のための大学内の施設を明示している他、本学部の共通図書室、各学科・講座に図書室・資料室を設け、学生の自習に供している（資料5-⑤-C、資料5-⑦-C）。また学生の夜間の自習のために学部所属の1講義室を開放している。

資料5-⑤-A 卒業生の平均取得単位数（教務チーム作成）

学科	講座	平成22年度		平成23年度		平成22-23平均	
		卒業者数	平均取得単位	卒業者数	平均取得単位	卒業者数	平均取得単位
食物栄養学科		40	169.4	40	159.1	40	164.3
人間・環境科学科		20	147.8	22	138.3	21	143.0
人間生活学科	発達臨床心理学講座	35	152.8	32	156.3	33.5	154.5
	生活社会科学講座	28	140.3	31	138.1	29.5	139.2
	生活文化学講座	21	150.7	15	142.6	18	146.6
	総計	144	154.0	140	148.8	142	151.4

別添資料・Web資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料5-⑤-1	1年間の履修登録の上限の目安（『学生便覧 履修ガイド』P.26）

資料 5-⑤-A 学年暦・行事予定・授業開講日

○学年暦・行事予定 (抜粋)

2012	
4月4日	入学式
4月5日	第1回 TOEIC試験
4月11日	前学期授業開始
4月30日(祝)	通常授業
7月18日	水曜の授業を開講せず、月曜の授業開講
7月23日～9月13日	夏期休業
9月14日	金曜の授業を開講せず、月曜の授業開講
9月24日～9月28日	前学期末試験・補講期間
10月1日	後学期授業開始
11月9日	微音祭準備のため休講
11月10日～11月11日	微音祭
11月29日	創立記念日(休講)
12月25日	火曜の授業を開講せず、木曜の授業開講
12月26日～1月4日	冬期休業

※カレンダーの■は授業日など(補講・期末試験も含む)

4 日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	5 日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	6 日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	7 日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
8 日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	9 日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	10 日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	11 日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30
12 日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	1 日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	2 日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28	3 日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

学年暦・行事予定(大学HP http://www.ocha.ac.jp/campuslife/r_schedule.html)

授業開講日 (『学生便覧 キャンパスガイド2012』 P.27)

資料 5-⑤-B 履修計画 (『生活科学部 履修の手引き 平成 24 年度』P. 47～49)

○生活文化学プログラム 4 年間の履修計画 (事例)

4. 4 年間の履修計画



1 年生は・・・

(1) 人間生活学科の必修科目を履修する。

- ・「人間生活論」は学科の必修です。
- ・「生活文化学概論」は生活文化学主プログラムの必修です。
- ・「生活社会科学概論」、「児童学概論」から少なくとも 1 科目を履修しましょう。

(2) コア科目を幅広く履修する。

文理融合リベラルアーツ、基礎講義、情報、外国語、スポーツ健康の科目を履修しましょう。
情報処理演習 (2 単位)、外国語 (8 単位)、スポーツ健康実習 (2 単位) は、単位数の下限が設けられていますので、計画的に必ず履修しましょう。
文理融合リベラルアーツ科目、基礎講義は、様々な分野の科目が準備されています。
自らの興味、関心に応じて、積極的かつ計画的に履修してください。

(3) 生活文化学主プログラムの基礎の科目を履修する。

- ・生活文化学主プログラムを希望する場合は、基礎となる 4 科目「生活造形論」「民俗学」「服飾文化概論」「服飾美学概論」を 1 年次で履修できます。



2 年生は・・・

(1) 主プログラムの必修科目を履修する。

- ・必修科目は生活文化学講座の教員が担当し、原則として毎年開講されます。
- ・取り落とすと翌年度の時間割に影響しますから、2 年次に必ず単位をとりましょう。

(2) 強化プログラムの中から講義科目を履修する。

- ・強化プログラムの講義科目は、非常勤講師による隔年開講がほとんどですから、開講された年に履修しましょう。

(3) 「生活文化学専門英語」を履修する人は、2 年次に履修しましょう。

(4) 実習の履修。

- ・実習は半期で 1 単位です。
- ・「生活文化実習 I」は 2 年次で履修してください。
- ・「服飾文化実習」は隔年開講ですから、2 年次または 3 年次で履修してください。
- ・「服飾制作実習」は毎年開講されますが、2 年次で履修してください。



3 年生は・・・

- (1) 主プログラムの演習科目を履修する。
 - ・前期に少なくとも2科目を履修しましょう。
- (2) 強化プログラムの中から講義科目を履修する。
- (3) 強化プログラムの演習科目を履修する。
 - ・それぞれ主プログラムの演習科目に対応していますから、同様に2科目以上を後期に履修しましょう。
- (4) 実習の履修。
 - ・「生活文化実習Ⅱ」は3年次で履修してください。



4 年生は・・・

- (1) 卒業論文の作成
 - ・卒業論文8単位（必修）を完成させることが、4年生の最大の課題です。
 - ・卒業論文の締め切りは12月中旬です。
 - ・9月下旬から10月上旬に卒業論文中間発表会があります。2月中旬に卒業論文発表会があります。
 - ・卒業論文の評価は指導教員と副査の教員の2名で行います。
- (2) 卒論指導の演習を履修する。
 - ・前期に「生活文化学論文演習Ⅰ」、後期に「生活文化学論文演習Ⅱ」を履修します。
 - ・4月に、卒論のテーマを決め、生活文化学講座の教員から1名の指導教員を選び、教員から開講の時間等の指示を受けてください。
- (3) 単位の確認をする。
 - ・「単位不足で卒業できない!」ということがないように、単位数の確認をしましょう。

資料 5-⑤-C 学習研究のための施設 (『学生便覧 キャンパスガイド 2012』P. 41-47)

○学習研究のための施設 (抜粋)

学習研究のための施設

総合学修支援センター

きめ細やかな学習支援体制—— 主体的な学習プロセスの構築をサポートします

『何を学ぶのかを決めるのは皆さんですよ』と言われても、私にできるだろうかと不安になる人もいるかもしれません。たしかに、「複数プログラム選択型」専門教育課程は、これまでの大学教育と比べても、学ぶ皆さんの自由度が高いことに特徴があります。でも大丈夫です。お茶の水女子大学は、これまで以上にきめ細やかな学修支援体制を整備するため、総合学修支援センターを設置して、専門のスタッフが情報関連機器を活用しながら皆さんの主体的な学びをサポートします。ですから、困ったときは迷ったときには、安心してサポートを受けることができるようになっています。

また、それぞれのプログラムを構成している科目に、学修の順序性や難易度を表す色分けによるカラーコードを付けました。これにより、カリキュラムの構造を視覚的に把握できるようになり、プログラムを選択するときに、どのような順番と組み合わせで各科目を履修すればよいのか判断しやすくなりました。

組織の概要

学内共同教育研究施設として、総合的な学修相談、学修指導などの支援を行い、本学の教育活動に資することを目的としています。

■ 21世紀型リベラルアーツ教育【教養教育】による幅広い教養の学習

1年次から、文系理系にまたがる5つのテーマに沿って学修し、広い視野から多角的に世界に関わる問題を考察し理解する。

■ 「複数プログラム選択型」専門教育により、多角的で主体的な学びの構築へ

多様な学びを可能にする3方向のプログラムをキャリア形成に応じた自分のニーズに合わせて選択し、専門教育課程を生き活きと意欲的に自分自身でレイアウトする。

相談できること

教職員や専門のスタッフ または学生スタッフなどに、複数プログラム選択履修に関する様々な相談をすることができます。

■ プログラム選択前の相談

- どんなプログラムがあるか
- 履修シミュレーション
- 履修方法について
- 履修登録について

■ プログラム履修中の相談

- 科目履修取り消しについて
- プログラムの変更について
- 成績評価 (fGPA制度) について
- 各種学修支援システムの使い方について
- 単位認定について (他大学、インターシップなど)

場 所

学生センター1階教務チームとなり

図 書 館

図書館は、本学の教育 研究機能を支える総合図書館として、学習図書、研究図書のほか、視聴覚資料や電子ジャーナルなどの印刷媒体以外の資料も収集保存していますので、大いに活用してください。なお、詳細については以下をご覧ください。

- 図書館ホームページ
<http://www.lib.ocha.ac.jp/>
- 「図書館利用案内」(リ フレット)

1 図書館の開館時間と休館日

■ 開館時間

月～金 8 45～21 00
(ただし、授業のない日は17 00まで)

土 9 00～17 00
(ただし、夏 冬 春期休業期間中は閉館)

【閲覧スペース】 月～土 9 00～閉館まで

【書庫1-3】 月～土 9 00～閉館10分前まで

【1階オープン書庫】 月～土 9 00～閉館30分前まで

IV

学習研究のための施設

【分析結果とその根拠理由】

『学生便覧 履修ガイド』が1年間の履修登録の上限を50単位程度に設定している。『生活科学部 履修の手引き』が詳細かつ具体的に、履修すべき科目とその年次、さらに履修のモデルケースを示しており、これらによって学習時間の確保が可能である。また学生の自習のための施設が十分に準備されており、単位の実質化への配慮は相応になされている。

観点⑥： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。**【観点到係る状況】**

各学科・講座は、教育課程の趣旨に沿って、授業科目のシラバスを作成している（資料 5－⑥－A）。シラバスは、全学で統一されたフォーマットのもと、学習到達目標、授業計画、評価方法等を明記し、大学HP上で公開している。学生に対し、入学時のガイダンスにおいて、履修登録の際にシラバスを活用することを説明している。平成22年度の調査によれば、生活科学部学生のシラバスに関する満足度は、「満足」および「やや満足」を合わせて61.7%である（前掲資料 5－④－B）。

観点⑦：基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。

【観点に係る状況】

自主学習への配慮として、事前・事後学習の指示、学生からの授業などの質問や要望のためのオフィス・アワーを開設している他、教員研究室、連絡先、メールアドレスを示し、相談は随時受け付けている（資料5－⑦－A）。また各学科・講座ごとに、各学年に学年担当教員を置き、種々の相談に応じられる体制を敷いている。ピアサポート・プログラムによって、学習に関する多様な情報の学生間の共有を図っている（資料5－⑦－B）。学部所属の講義室を自習室として開放している他、学部共通図書室や講座の資料室を設け、自主的な学習への環境整備を行っている（資料5－⑦－C、資料5－⑦－D、資料5－⑦－E）。実習・演習、受講者の多い科目にTAを配置し、個々の学生の学習進度に配慮している（再掲資料3－⑦－B）。入学生に対する補充授業は、それぞれの学科・講座が個別に対応している他、全学共通科目として「物理学サプリメント」「生物学サプリメント」を開講、基礎学力の向上をはかっている。

資料5－⑦－A 生活科学部教員一覧（『生活科学部 履修の手引き 平成24年度』p.78）

○生活科学部教員一覧、オフィス・アワー

10. 生活科学部教員一覧



食物栄養学科

氏名	専門	オフィスアワー	研究室部屋番号	メールアドレス
大塚 誠	細胞生化学	概ね平日12:20～13:00	総合研究棟207室	otsuka.yuzuru@ocha.ac.jp
香西みどり	調理学	概ね平日12:20～13:00	総合研究棟410室	kassai.midori@ocha.ac.jp
久保田弘久枝	食品化学	概ね平日12:20～13:00	総合研究棟507室	kubota.kikuo@ocha.ac.jp
近藤 和雄	臨床医学	概ね平日12:20～13:00	総合研究棟308室	kondo.kazu@ocha.ac.jp
鈴木忠実子	応用栄養学	概ね平日12:20～13:00	総合研究棟613室	suzuki.emiko@ocha.ac.jp
須藤 紀子	公衆栄養学	概ね平日12:20～13:00	大学本館204室	sudo.noriko@ocha.ac.jp
藤原 美子	栄養化学	概ね平日12:20～13:00	総合研究棟406室	fujiwara.yoko@ocha.ac.jp
村田 裕亮	食品貯蔵学	概ね平日8:30～9:30	総合研究棟510室	murata.masatsuna@ocha.ac.jp
市松 利恵	公衆衛生学	概ね平日12:20～13:00	総合研究棟509室	ikematsu.rie@ocha.ac.jp
板田 薫子	生活習慣病学	概ね平日12:20～13:00	総合研究棟612室	lida.kanako@ocha.ac.jp
守田 亜古	給食経営管理学	概ね平日12:20～13:00	総合研究棟410室	hirata.akoko@ocha.ac.jp
森光雄次郎	食品機能化学	概ね平日12:20～13:00	総合研究棟506室	morimitsu.yasujiro@ocha.ac.jp
山 智代	臨床栄養学	概ね平日12:20～13:00	総合研究棟407室	ichi.ikuyo@ocha.ac.jp
川原 恭子	食品微生物学	概ね平日12:20～13:00	総合研究棟301室	yamano.haruko@ocha.ac.jp

人間・環境科学科

氏名	専門	オフィスアワー	研究室部屋番号	メールアドレス
松浦 秀治	自然人類学・文化財科学	月曜12:20～13:20	総合研究棟609室	natsura.shuji@ocha.ac.jp
仲西 正	材料物性・高分子化学	木曜13:00～15:00	総合研究棟708室	nakanishi.tadashi@ocha.ac.jp
太田 裕治	人間工学・福祉工学	月曜13:00～15:00	総合研究棟809室	ohta.yuji@ocha.ac.jp
大瀧 雅孝	環境衛生工学	月曜10:30～12:00	総合研究棟710室	otaki.masahiro@ocha.ac.jp
近岡 展久	建築環境学・建築設計学	火曜11:00～12:00	総合研究棟811室	notooka.nobuhisa@ocha.ac.jp
近藤 恵	自然人類学・人類年代学	水曜14:30～15:30	総合研究棟611室	kondo.negumi@ocha.ac.jp

人間生活学科

発達臨床心理学講座

氏名	専門	オフィスアワー	研究室部屋番号	メールアドレス
井原 成男	病院臨床心理学	火曜12:10～13:00	大学本館351室	ihara.mariko@ocha.ac.jp
藤原 洋一	小児科学・小児神経学	木曜12:10～13:00	生活科学部本館2 363	yoichi1215@aol.com
高濱 裕子	発達心理学・保育学	木曜11:30～12:30	生活科学部本館2 362	takahama.yuko@ocha.ac.jp
藤田 宗和	非行臨床・心理学	木曜12:20～13:20	大学本館350室	fujita.munekazu@ocha.ac.jp
筑 崎子	発達臨床心理学・発達障害	火曜12:30～14:00	大学本館348室	takamura.tomoko@ocha.ac.jp
柴坂 寿子	子ども行動学	前期金曜12:20～13:20・ 後期木曜15:00～16:00	大学本館349室	shibasaka.hisako@ocha.ac.jp
浜口 順子	保育学・幼児教育学	金曜12:20～13:20	大学本館343室	takacchi.hanaguchi.junko@ocha.ac.jp
小玉 亮子	教育学・子ども社会学	前期金曜12:10～13:10・ 後期木曜12:10～13:10	生活科学部本館2 364	kodama.ryoko@ocha.ac.jp
青木紀久代	生産発達臨床心理学 保育・学校臨床	火曜12:20～13:20	大学本館342室	aki.kikuyo@ocha.ac.jp
伊藤亜矢子	学校臨床心理学・コミュニティ心理学	火曜12:20～13:20	大学本館332室	ito.yakoko@ocha.ac.jp
羽根 茂	臨床心理学・心理療法学	木曜12:20～13:10	大学本館333室	iwakabe.shigeru@ocha.ac.jp
岩間 吉子	発達心理学・幼児教育学	前期火曜15:00～16:00 後期木曜17:00～18:00	大学本館337室	gyosho.ikuko@ocha.ac.jp

生活社会科学講座

氏名	専門	オフィスアワー	研究室部屋番号	メールアドレス
杉田 孝夫	政治学・政治思想史	月曜11:00～13:00	大学本館302室	sugita.takao@ocha.ac.jp
藤崎 孝子	生活倫理学	木曜16:00～17:30	大学本館316室	fujisaki.hiroko@ocha.ac.jp
石井ケンタウチ子	家族社会学	火曜16:20～18:00	大学本館317室	ishii.kenta.musakochi@ocha.ac.jp
衣藤 伸子	労働経済学	月曜15:00～16:30	大学本館309室	negase.nobuko@ocha.ac.jp
小谷 寛男	生活法学	月曜15:00～16:30	大学本館307室	kotani.masao@ocha.ac.jp
大森 正博	公共経済学・産業組織・医療経済学	金曜15:00～16:30	大学本館308室	omori.masahiro@ocha.ac.jp
斎藤 悦子	生活経済学	月曜16:30～18:00	大学本館304室	saite.etsuko@ocha.ac.jp
マゼンタ マルセロ Marcello 見 弘(近)	家族法、比較法	火曜16:30～18:00	大学本館314室	marcelo.dc.alcantara@ocha.ac.jp

生活文化学講座

氏名	専門	オフィスアワー	研究室部屋番号	メールアドレス
鈴木 恒宏	比較文化史・生活造形論	火曜16:40～17:30	大学本館328室	suzuki.sadahiro@ocha.ac.jp
宮内 真久	日本民俗学	月曜12:15～13:15	大学本館327室	miyauchi.takahisa@ocha.ac.jp
池井 麻子	西洋美術史	金曜12:15～13:15	大学本館326室	ikui.yoshiko@ocha.ac.jp
鶴田 節子	日本美術史			

資料 5-⑦-B

○ピアサポート・プログラム (抜粋)

お茶の水女子大学全学ピアサポートの概要と特徴

各学部、グローバル教育センターが提供しているピアサポートの概要と特徴を以下の表にまとめました。

組織	設立年月	ピアサポートの内容と特徴
文教育学部 PSPページ 	2003年4月	主に、新入生の適応援助を目指し、講座ごとにボランティアで募集した先輩のサポーターが新入生の援助を行う。講座別に数名の教員がボランティアでアドバイザーとして関わる。
生活科学部	2004年4月	主に、学習支援や進路相談を目指し、学科や講座ごとに上級生が下級生に助言を行う。各学年の学生委員の選出、異学年の交流、進路の助言をしている。学科や講座の教員の代表が統括する。
理学部	2004年4月	主に、学習支援を目指し、学科ごとに上級生が下級生に（卒業生も含む）助言を行う。スーパーバイズ制を取り入れ教員が学生の個別指導、院生のTAの相談時間も確保し活用している。
グローバル教育センター (旧国際教育センター)	2002年4月	主に、留学生が留学目的を果たせるよう学習面、生活面からの支援と国際交流を目指す。大学院生チューターによる相談室運営と日本語添削と情報提供、国際交流グループ（TEA）の交流活動、国際学生宿舎メンターの生活面での助言を行う。相談担当の教員が全体のコーディネートをする。

ピアサポート・プログラム連絡会議メンバーは、次の教員が担当しております。

グローバル教育センター、 ピアサポート連絡会議リーダー	加賀美常美代
文教育学部	安成英樹
理学部	吉田裕亮
生活科学部	太田裕治

(ピアサポート・プログラム連絡会議の全体会議は年に数回行われ、各組織の情報交換を行っております。)

(大学 HP「ピアサポートについて」 <http://www.ocha.ac.jp/campuslife/peer.html>)

資料 5-⑦-C

○生活科学部 学部共通図書室の案内

9. 生活科学部 学部共通図書室の案内

生活科学部には、各学科・講座の図書室のほかに、学部共通図書室が3つあります。目的に応じて存分にご活用ください。

学部共通図書室（大学本館208室）

学部生全体のための資料室です。

とくに紙媒体の雑誌のバックナンバーや、家政学関係の文献・資料があります。

分室1：家庭科教員キャリアコース関連資料室（生活科学部本館2-266室）

家庭科教育に関する文献や資料を集めた資料室です。

教育実習生の授業計画作成に役に立つ参考資料類が豊富に揃っています。

家庭科教育に関わる卒論を作成する際の資料探索などにも活用できるでしょう。

自習スペースとしても自由に使えます。

分室2：消費生活アドバイザー資格取得支援プログラム資料室（生活科学部本館2-267室）

消費者学に関する文献や資料を集めた資料室です。

消費生活アドバイザー資格取得のための教科書や参考書類が揃っています。

資格試験受験のための公式テキストや、「過去問」の最新版もあります。

消費者問題や消費者学に関する卒論作成の際などにも活用できるでしょう。

自習スペースとしても自由に使えます。

分室1と分室2は、学生ロッカー室の上の階にあります。

どの部屋も、出入口の扉には、暗証番号方式のカギがかかっています。暗証番号は、所属の学科・講座の助手室などで教えてもらって下さい。

どの部屋にもコピー機は設置されていません。しかし、文献・資料類をコピーするための一時持ち出しは認めます。所定のノートに必要事項などを記入して持ち出し、その日のうちに元の棚に戻しておいてください。

学部共通図書室に関する問合せ先

人間生活学科・生活文化学講座 宮内 貴久 (miyauchi.takahisa@ocha.ac.jp)

学部共通図書室の案内（『生活科学部 履修の手引き 平成24年度』P.77～78）

資料 5-⑦-D

○人間生活学科で学ぶみなさんのために (抜粋)

● 生活社会科学講座助手室 (大学本館 301 室) について

開室時間 月・火・金 9 15～16 00、水 9 15～17 00、木 11 00～15 30

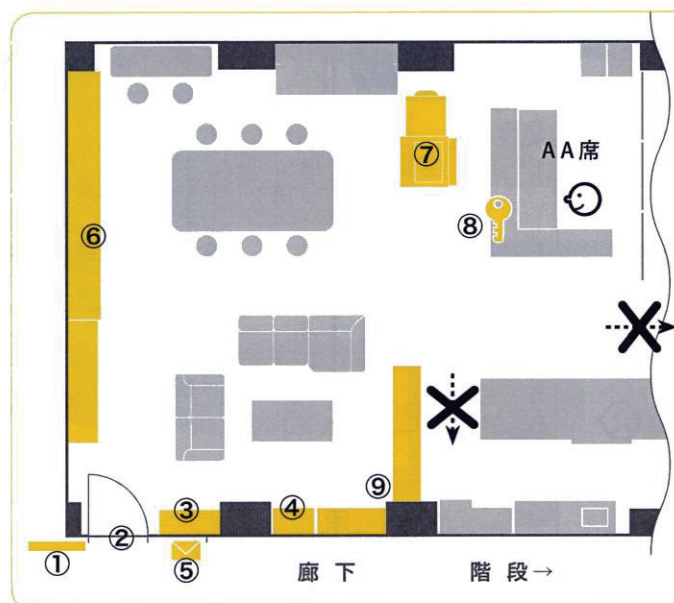
※臨時休室・夏期/冬期/春期休室あり

E-mail seisha@cc.ocha.ac.jp Tel 03-5978-5793

スタッフ アカデミックアシスタント 葦澤 ひろみ (月～水、金) 補佐 栗本 京子 (木)

今年度は生社助手室が
1年生の窓口になります。

○ 301 室 MAP



- ① 学科1年生向け掲示板
重要な情報も掲示しますので、
こまめに確認してください。
- ② 助手室入口・掲示板
- ③ 提出用レポートボックス
- ④ 返却用レポートボックスと
授業配布資料ボックス
- ⑤ ポスト (扉の外)
助手室閉室時のレポート提出、
資料室のカギ返却に使用します。
- ⑥ 卒業論文・修士論文
- ⑦ コピー機
- ⑧ 生社資料室のカギ
資料室は通常施錠されています。
使用時はカギを借りてください。
- ⑨ 雑誌棚

○ 使用上のルール

◆住所・電話番号・メールアドレス変更の届出

学科では、緊急時の連絡のために「学生カード」を書いてもらっています。今年度は生社助手室がカードを管理します。現住所やメールアドレスなどの変更があった場合には、速やかに連絡してください。

◆レポートの提出・返却

助手室に入ったらすぐ右に提出用 (図③)、その奥に返却用のボックス (図④) があります。

閉室時は、助手室ドアのポスト (図⑤) に入れてください。ただし、締切日を過ぎたレポートは受理しません。

◆卒業論文・修士論文、雑誌の閲覧

閲覧は自由ですが、帯出禁止です。

◆コピー機の利用

授業のレジュメをコピーする場合に、先生に使用許

可をもらい、利用できます。

※個人的なコピーは生協や、学生センター棟 2 階の「タダコピ」を利用してください。

◆生社資料室 (大学本館 303,305,310,315,318 室)

生社所蔵の図書、雑誌類は分野ごとに 5 つの資料室に配架されています。

- | | |
|--------------|----------------|
| 【303 室】法政資料室 | 【315 室】社会学資料室 |
| 【305 室】経済資料室 | 【318 室】家族関係資料室 |
| 【310 室】雑誌室 | |

生社助手室開室時間のみ利用可能です。利用時は生社助手室でカギを借りてください。その際に「鍵貸出簿」に記入し、使用後は速やかに返却してください。貸出期間は各資料室扉に掲示してありますので、必ず期限を守って利用してください。

人間生活学科施設案内 (『人間生活学科で学ぶみなさんのために』 P. 21)

資料 5-⑦-E 生活科学部図書室、資料室

図書室・資料室名	OPAC所在表示	場所	開室日	開室時間
生活科学部共通図書室	生活科学部共通図書室, 食物栄養学講座, 人間・環境科学講座, (旧)生活工学講座, (旧)人間科学講座, (旧)人類科学講座	本館 2-208	図書館サービスカウンターにお申し出ください。	
生活科学部共通図書室分室 1	生活科学部共通図書室分室 1	本館 2-266		
生活科学部共通図書室分室 2	生活科学部共通図書室分室 2	本館 2-267		
発達臨床心理学図書室	発達臨床心理学講座, (旧)児童	本館 3-353	月～金	10:00-16:00
生活社会科学助手室	生活社会科学講座, (旧)家庭経営 DB	本館 3-301	月～金	9:30-15:30
生活文化学図書室	生活文化学講座	本館 3-329	月～金	11:00-13:00
				14:00-17:00
生活環境研究センター	生活環境研究センター	総研棟 310	月～金	10:00-12:00
				13:00-17:00

附属図書館HP (「学内図書室、資料室一覧」)

http://www.lib.ocha.ac.jp/gakunai_library.html

資料 3-⑦-B (再掲) TAの配置状況(平成 23 年 5 月現在)

区分	開講授業数	TA申請授業数	TA配置授業数
文教育学部	777	143	132
理学部	431	103	88
生活科学部	468	76	75
大学院人間文化創成科学研究科(博士前期)	539	62	54
計	2215	384	349

(ファカルティ支援チーム作成)

【分析結果とその根拠理由】

自主学習への配慮として、全教員に対し、事前・事後学習の必要性を明示するよう指示を与えるとともに、学年担当教員を配置し、オフィス・アワーを設けている。またピアサポート・プログラムの実施等、自主学習のための環境整備を図っている。人間生活学科では、『人間生活学科で学ぶみなさんのために』を、入学時に学生に配布し、各講座の施設や教員の情報を示している。自主学習への配慮、「物理学サプリメント」等の補習授業の開講によって基礎学力不足の学生への配慮が組織的かつ適正に行われていると判断される。

観点⑧： 学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)が明確に定められているか。

【観点に係る状況】

生活科学部教育課程編成・実施方針(カリキュラム・ポリシー)に即して、学部・学科および講座のそれぞれ

が学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を定め、「生活科学部学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）」として大学HPに公開している（資料5-⑧-A）。卒業要件は、生活科学部履修規程第5条（別添資料5-⑧-1『学生便覧 履修ガイド』P.213）に示されている。

資料5-⑧-A

○生活科学部学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）	
生活科学部は、自然・人文・社会科学的教養に基づき、人間と生活についての総合的な学識を身につけ、生活者の立場から、社会で活躍できる優秀な人材を養成することを目的としている。	
課程を修了し学位が授与されるためには、学生には以下のことが要件として求められる。	
1. 生活科学部の学生は、所定の期間在学し、生活科学部履修規程に定められた科目群から所定の単位数を修得しなければならない。	
2. 学生は、教員の指導のもとに卒業論文のテーマを決定し、資料・データの収集を行い、学問の手法に則り、論理的な分析を行い、自ら卒業論文を完成することが求められる。卒業論文は、審査によって合格することが必要である。	
(1) 食物栄養学科	
生活者視点に立った食と健康の専門家、とくに食物と栄養に関する科学的視点と実践力を身につけた指導的人材の養成を目標としている。これを実現すべく、学科が定める栄養士免許取得および管理栄養士国家試験受験資格に必要な全単位を含む所定の単位を修得し、食品栄養科学分野に関する幅広い知識とその実践・応用能力を身につけたことが認められた者に、学位が授与される。	
(2) 人間・環境科学科	
生活者たる人間と環境との相互作用に関する理解を備えるとともに、生活面での諸課題に対して科学的手法を応用することで、人間と環境が共存しうる方策を考案し、かつ、実社会にて実践できる優秀な人材を養成することを目的とする。これを実現すべく、学科の教育理念・目標にそって設定された授業科目群を履修し、理工系の基礎学力を身につけ、所定の単位を修得した者に、学位が授与される。	
(3) 人間生活学科	
生活者の視点から、個人の発達や心の健康、人間と社会の関係、生活と文化について、多角的な視点と複合的なアプローチを駆使し、人間と生活を総合的に理解し探求する力を備えた優秀な人材を養成することを目的としている。これを実現すべく、学科の教育理念・目標にそって設定された授業科目群を履修し、人文社会科学系の基礎学力を身につけ、所定の単位を修得し者に学位が授与される。	
(大学HP http://www.ocha.ac.jp/program/diploma_policy/undergrad.html)	

別添資料・Web資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料5-⑧-1	卒業要件（『学生便覧 履修ガイド』P.213）

【分析結果とその根拠理由】

生活科学を文理融合の総合応用科学として位置づけ、高度の専門的知識と市民的教養、判断力を養うことを教育目標とした教育課程編成・実施方針に基づき、その習得によって学位授与に値するとする学部の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）は、各学科・講座のポリシーとともに明確に提示されている。

観点⑨： 成績評価基準が組織として策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

【観点に係る状況】

生活科学部履修規程第8条に基づき、成績評価は試験、平常の成績及び出席状況を総合して決定、同第9条に基づき「S、A、B、C、D」の五種類の評語を以て行っている（資料5-⑨-A、資料5-⑨-B）。平成23年度よりGPA制度による評価が導入され、大学HP教育開発センターHP「GPA制度についての説明」および『学生便覧 履修ガイド』、『生活科学部 履修の手引き』に説明されている（資料5-⑨-C、資料5-⑨-D）。冊子は入学時に学生全員に配付され、オリエンテーションにおいて説明がなされている。教員は、授業の成績評価基準をシラバスにおいて示し、それにしたがって成績評価を行っている。

資料 5-⑨-A

○成績評価基準

■ シラバス(成績評価基準)

学部生

— (1) 平成23年度以降に入学した学生の場合

成績の評価は、原則として試験、平常の成績及び出席状況を総合して、100点満点、60点以上を合格とする素点による評価またはレターグレード（S、A、B、C、D（不合格））による評定で評価されます。

レターグレードと評点区間、及び評価基準の対応関係は次のとおりです。

S（90点以上）	基本的な目標を十分に達成し、きわめて優秀な成果をおさめている
A（90点未満～80点以上）	基本的な目標を十分に達成している
B（80点未満～70点以上）	基本的な目標を達成している
C（70点未満～60点以上）	基本的な目標を最低限度達成している
D（60点未満不合格）	基本的な目標を達成していないので再履修が必要である

成績評価は上記の評価基準のほか、S評価を評価対象者の15%以内（履修者数が10人未満の場合は2名以下）に留めることを目安にした評価基準を設けて評定されます。履修放棄によって評定できない場合はD（不合格）となります。授業科目によって素点評価がなされる場合とレターグレードで評定される場合がありますが、後者の場合はつぎの規定により評点が定まります。 S=95、A=85、B=75、C=65、D（不合格）=55

— (2) 平成22年度以前に入学した学生の場合

成績の評価は、原則として試験、平常の成績及び出席状況を総合して、100点満点、60点以上を合格とするレターグレード（S、A、B、C、D（不合格））による評定で評価されます。

S	基本的な目標を十分に達成し、きわめて優秀な成果をおさめている
A	基本的な目標を十分に達成している
B	基本的な目標を達成している
C	基本的な目標を最低限度達成している
D	基本的な目標を達成していないので再履修が必要である

S、A、B、Cは合格で、Dは不合格です

成績評価は達成度評価が原則ですが、最上位評価であるS評価については、全評価対象の5%以下（評価対象者20人未満の場合は1人以下）を目安とするという適用のガイドラインを設けています。

— (3) 平成16年度以前に入学した学生の場合

成績の評価は、原則として試験、平常の成績及び出席状況を総合して、100点満点、60点以上を合格とするレターグレード（S、A、B、C、D（不合格））による評定で評価されます。

A	80点以上
B	70点以上80点未満
C	60点以上70点未満
D	60点未満

A、B、Cは合格で、Dは不合格です

(大学 HP「シラバス(成績評価基準)」 http://www.ocha.ac.jp/education/about_grade.html)

資料 5-⑨-B

○生活科学部履修規程（抜粋）	
（単位の授与） 第8条 授業科目を履修した者については、試験（論文、報告等を含む。以下同じ。）により学修の成果を評価して、所定の単位を与える。 2 試験は、原則として学年末又は学期末に行うこととする。ただし、病気その他正当な理由で試験を受けることができなかった者は、別に定める手続きにより追試験を受けることができる。 （成績の評価） 第9条 成績の評価は、原則として試験、平常の成績及び出席状況を総合して決定する。 2 成績の評価は、「S」（基本的な目標を十分に達成し、きわめて優秀な成果をおさめている）、「A」（基本的な目標を十分に達成している）、「B」（基本的な目標を達成している）、「C」（基本的な目標を最低限度達成している）、「D」（基本的な目標を達成していない。再履修が必要である）の5種類の評語をもって表し、「S」、「A」、「B」及び「C」を合格とし、「D」を不合格とする。 3 前項の成績の評価又は科目の原成績（素点）に基づき、成績の数値平均GradePointAverage（以下「GPA」という。）を算出するものとする。GPAに関し必要な事項は別に定める。	
成績の評価（『学生便覧 履修ガイド2012』P.31～33, 208）	

資料 5-⑨-C

○GPA 制度についての説明（抜粋）	
 教育開発センター Center for Research and Development of Education  お茶の水女子大学 Ochanomizu University	
functional GPA	
ご案内 シンポジウム About Us 学習支援システム 研究・開発 紀要 FD GP functional GPA GPAとは 評点とは GPA制度の留意点 GPA制度の効能 fGPA算定の例示 履修取消手続き お問い合わせ	ここで説明しているGPA制度は2011年度入学生から適用している制度です。それ以前に入学した学生は入学時の評価制度が維持され、それが卒業まで適用されます。 2011年度から実施している複数プログラム選択履修制度では、とくに専門強化プログラムにおいて、学修の順序性が求められ、その階梯を昇るには特定科目での一定の成績が後続科目の履修条件になる場合も出てきます。その際、当然、厳格な成績評価が前提になります。 ところが、本学における現行のレターグレード（S, A, B … D）による成績評価、あるいは通常導入されている一般的なGPA（Grade Point Average）においても、原成績の細かな差異が丸められて消えてしまうという欠点があります。この欠点は原成績の順位と算定されたGPAの順位で食い違いが生じてしまうという不都合も発生させてしまいます。 そこで本学ではGPA制度導入にあたり、そうした不都合を発生させない方法、すなわち原成績を線形に変換して直接グレードポイントを算定するファンクショナルGPAの方法を運用しています。 このfGPA制度の運用により、奨学金貸与や専攻進級などさまざまな選抜機会にも安心してこの指標を活用していただけます。
お茶の水女子大学 教育開発センター 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 TEL:03-5978-5764 責任者:教育開発センターHP運営委員会 半田智久 E-mail:handa.motohisa@ocha.ac.jp	
(GPA教育開発センターHP functional GPA https://crdeg.cf.ocha.ac.jp/crdeSite/GPA.html)	

資料 5－⑨－D

○成績評価ならびに GPA 制度について（抜粋）

2. 成績評価ならびに GPA 制度について



複数選択プログラム制のスタートに伴い、新しい成績評価制度が導入されました。以下ではそれについて簡単に説明します。詳しい資料が配付されていると思いますので、そちらも参考にして下さい。また、不明な点は、総合学修支援センターにもお尋ね下さい。

1. 各科目の成績表示について

成績通知票ならびに成績証明書には、受講した科目の成績が記載されますが、その評価は、数値によるものと、アルファベットによるものの、2種類の並記となります。前者は、素点をベースとした評価であり、グレードポイント（Grade Point、G P と略す）として、0.00～4.50までの数字が記載されます。一方、後者は、レターグレード（Letter Grade、L G と略す）評価であり、S、A、B、C、Dのいずれかが記載されます。

（1）素点をベースとする評価

担当教員が、成績を点数で付けた場合（必要に応じ、システム側で100点満点の素点評価に変換したうえで）次の式に基づいて、G P が計算されます（小数点第3位以下を切り捨てた、小数点2桁表示です）。

$$G P = (S S - 55) / 10 \quad (S S \text{ は } 100 \text{ 点満点に換算した素点評価})$$

もし、100点であれば、G P = 4.50となります。また、60点を合格ラインとしますので、その場合、G P = 0.50となります。一方、60点未満（不合格）であれば、G P は0.50未満となりますが、その場合は、G P = 0.00として切り捨てられます。したがって、G P の最大値は4.50、最小値は0.50です（不合格の場合は0.00）。次に、算出されたG P に基づき、次のようにL G が自動的に決定されます。

3.50 ≤ G P ≤ 4.50 であれば S

2.50 ≤ G P < 3.50 であれば A

1.50 ≤ G P < 2.50 であれば B

0.50 ≤ G P < 1.50 であれば C

0.00 = G P であれば D

この後で説明する「レターグレードによる評価」とは異なり、G P には中間点があることとなります。

（2）レターグレードによる評価

担当教員が、成績をL G（S、A、B、C、D）で付けた場合、G P は、

S であれば、G P = 4.00

A であれば、G P = 3.00

B であれば、G P = 2.00

C であれば、G P = 1.00

D であれば、G P = 0.00

が自動的に記載されます。（G P の数字はこの5種類のみであり、中間点はありません。）なお、

(1) (2) のいずれの評価でも、S 評価は、評価対象者の15%以内とされています（履修者数が10人未満の場合は2名以下）。

成績評価ならびに GPA 制度について（『生活科学部 履修の手引き 平成24年度』P. 5～7）

【分析結果とその根拠理由】

成績評価基準は、生活科学部履修規程において策定され、『学生便覧 履修ガイド』および『生活科学部 履修の手引き』に掲載されている他、入学時の新入生オリエンテーション等によって周知が図られている。教員は、シラバスに成績評価の基準を示し、それにしたがって成績評価を適切に行っていると判断される。

観点⑩： 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための組織的な措置が講じられているか。

【観点到係る状況】

成績評価の正確性を担保するための措置として、成績評価の基準を学則に定め、シラバスで成績評価方法の詳細が示されている。S評価の上限は、評価対象者の15%以内と定められている（前掲資料5-⑨-D）。学生は成績評価について、教務チームに異議申し立てを行うことができる（資料5-⑩-A）。教務チームは担当教員に問い合わせを行い、担当教員は成績評価の経緯を教務チームに報告し、教務チームはこれを学生に伝えるシステムがある（資料5-⑩-B、資料5-⑩-C）。解決されない場合には、教授会等に諮られ、また学年担当の教員に相談することができる（資料5-⑩-D）。

資料5-⑩-A

○学生サポート（抜粋）	
(3) 教務関係事務の相談	
履修上の各種の疑問は、学年担当や教務チーム（学生センター棟1F）に問い合わせ、事務担当窓口で解決できないときは、委員会や教授会等に諮りますから、教務チームに相談してください。	
教務関係の相談窓口（『学生便覧 履修ガイド2012』P.37）	

資料5-⑩-B 平成23年度成績評価に関する申立件数（教務チーム作成）

区分	件数
文教育学部	93 件
理学部	21 件
生活科学部	51 件

資料5-⑩-C 成績評価に関する申立への対応一覧（教務チーム作成）

No.	申立ての内容	その対応
学部1	成績評価に納得がいけないので、評価方法等を教えてほしい。	担当の先生に問合せ、詳細を確認した上で教務チームより回答している。（担当教員が本人が直接回答する場合もある。）
学部2	未採点科目があるが、いつ評価がつくのか？	授業担当教員に採点を督促した。
学部3	履修登録あるいは取消をしたはずなのに、反映されていない。	システムのログを確認し、本人に過失がない場合には修正登録・取消を行っている。

資料5-⑩-D 教授会規則第4条

○国立大学法人お茶の水女子大学教授会規則
（審議事項）
第4条 教授会は、次に掲げる事項を審議する。

一 学部又は研究科の教育課程の編成に関する事項
二 学生の入学、卒業又は課程の修了その他その在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項
三 教員の採用及び昇任のための選考に関する事項
四 その他当該学部等の教育研究及び運営に関する重要事項
(大学HP http://www.ocha.ac.jp/reiki/act/frame/frame110000009.htm)

【分析結果とその根拠理由】

成績評価に関しては、学則、シラバスに基準を詳細に示すことにより、正確性を担保している。学生からの異議申し立ては、事務局を通して授業担当教員が回答するシステムがあり、成績評価の客観性が担保されていると判断される。

観点⑪： 学位授与方針に従って卒業認定基準が組織として策定され、学生に周知されており、その基準に従って卒業認定が適切に実施されているか。

【観点に係る状況】

卒業認定基準はお茶の水女子大学学則第 22 条に定められ、『学生便覧 履修ガイド』に明記されている（資料 5－⑪－A）。卒業要件は生活科学部履修規程第 4 条によって定められ、『生活科学部 履修の手引き』に明記されている（資料 5－⑪－B）。これらの冊子は、入学時に学生全員に配付され、オリエンテーションにおいて説明がなされる。卒業要件である卒業論文の評価基準については、各学科・講座ごとに取り決めがあり、『生活科学部 履修の手引き』に示されている他、卒業論文中間発表会等の機会を通して周知が図られる。各学科・講座ごとに卒業認定審査を行い、教員の合議により評点を決め、最終的には教授会の議を経て、卒業認定を行う。

資料 5－⑪－A 卒業認定に関する規則（『学生便覧 履修ガイド 2012』P.177）

○国立大学法人お茶の水女子大学学則（抜粋）
（卒業）
第22条 学部に4年以上在学し、定められた授業科目を履修し、124単位以上を修得した者は、卒業生としてこれに卒業証書を授与する。ただし、生活科学部食物栄養学科については、138単位以上を修得した者とする。
○国立大学法人お茶の水女子大学学則（抜粋）
（審議事項）
第4条 教授会は、次に掲げる事項を審議する。
一 学部又は研究科の教育課程の編成に関する事項
二 学生の入学、卒業又は課程の修了その他その在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項
三 教員の採用及び昇任のための選考に関する事項
四 その他当該学部等の教育研究及び運営に関する重要事項

資料 5－⑪－B 卒業要件

○生活科学部履修規程（抜粋）
（卒業要件）

第5条 卒業するためには、別表第1—1に定めるところにより、124単位以上を修得しなければならない。ただし、食物栄養学科については、別表第1—2に定めるところにより、138単位以上を修得しなければならない。

2 人間・環境科学科及び人間生活学科において履修すべき授業科目及び単位数は、別表第3から別表第7及び別表第9に定めるところとする。また、食物栄養学科においては、別表第3、別表第8及び別表第9に定めるところとする。

3 学部共通科目の授業科目及び単位数は、別表第9に定めるところとする。

4 全学共通科目の授業科目及び単位数は、別表第10に定めるところとする。

5 外国人留学生特別科目の授業科目及び単位数は、別表第13に定めるところとする。また、単位の取扱いについては、人間・環境科学科及び人間生活学科は別表第1—1備考10とし、食物栄養学科は別表第1—2備考6のとおりとする。

6 特別設置科目の授業科目、単位数及び単位の取扱いについては、別表第14に定めるところとする。

(『学生便覧 履修ガイド2012』P.213)

【分析結果とその根拠理由】

卒業認定基準は、学則及び生活科学部履修規程において策定され、『学生便覧 履修ガイド』『生活科学部 履修の手引き』に記載されている他、入学時のオリエンテーションによって周知が図られている。卒業論文の成績評価は、教員の合議により評点を決め、透明性が確保されている。卒業認定基準にしたがって適切に卒業認定が実施されていると判断される。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

生活者の視点にたった総合応用科学としての生活科学の諸領域を包含する各学科・講座は、それぞれの特性に応じた個性的なプログラムを提供し、四年間一貫したきめ細かい専門教育を行っている。教育課程は、高度の専門知識を教授し、総合的な理解力および応用力を養い、社会生活において諸問題を解決しうる実践的な能力を養成することを主眼とした編成になっていると判断される。専門職につくための免許・資格の取得を積極的に促していることも評価される。

【改善を要する点】

特になし

基準 6 学習成果

(1) 観点ごとの分析

観点①： 各学年や卒業（修了）時等において学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、単位修得、進級、卒業（修了）の状況、資格取得の状況等から、あるいは卒業（学位）論文等の内容・水準から判断して、学習成果が上がっているか。

【観点到係る状況】

学部別平均単位取得数は、平成 22 年度/23 年度卒業生については、文教育学部 154.09/147.58 単位、理学部 151.75/146.82 単位、生活科学部 153.85/148.97 単位であり、本学部においても卒業要件 124 単位（食物栄養学科のみ 138 単位）を大きく上まわっている（教務チーム提供）。これは、学生の勉学意欲の高さを示すとともに、教職課程の履修（後述）を反映したものである。

本学部の学位授与者は、平成 22 年度 144 名、23 年度 140 名である（資料 6-①-A）。単位を標準修業年限内に取得して卒業していく学生及び標準履修年限の 1.5 倍内で卒業していく学生が、本学部でも 9 割前後である（資料 6-①-B、資料 6-①-C）。標準修業年限内卒業の割合は、平成 22 年度 91.8%、23 年度 87.8%であり、学生の在学中の学習は順調に行われたと言える。卒業論文は、各学科・講座において卒業判定会、卒論発表会を経て質の高いものが提出されるよう指導されている。本学部の留年率は、4 年次生に対して 11~12%、全学生に対して 3%程度であり、全学部の中間値である（資料 6-①-D、資料 6-①-E）。資格取得に関しては、食物栄養学科の管理栄養士合格率は平成 22 年度 89.7% (35/39)、平成 23 年度 92.3% (36/39)であった。教職免許取得率が全学部平均 3 割程度、生活科学部では 2 割前後である（資料 6-①-F）。全学部を通じて下降傾向にあるのは、教職免許更新制の導入が一因であると考えられる。

資料 6-①-A 学位授与の状況（教務チーム作成）

区分	平成 22 年度	平成 23 年度
	学位授与者数	学位授与者数
文教育学部	257	237
理学部	146	137
生活科学部	144	140

資料 6-①-B 標準修業年限内の卒業率（教務チーム作成）

区分	平成 22 年度			平成 23 年度		
	標準修業年限内の卒業生(a)	標準修業年限前の入学者数(b) ※19 年度入学者	標準修業年限内の卒業生（修了）率 (a)/(b)	標準修業年限内の卒業生(a)	標準修業年限前の入学者数(b) ※20 年度入学者	標準修業年限内の卒業生（修了）率 (a)/(b)
文教育学部	217	250	86.8%	209	240	87.1%
理学部	134	148	90.5%	131	147	89.1%
生活科学部	135	147	91.8%	129	147	87.8%

資料 6-①-C 標準修業年限内×1.5] 年内卒業率 (教務チーム作成)

区分	平成 22 年度						平成 23 年度					
	(d)のうち[標準修業年限×1.5]年間に学位を取得した者の数(c)				[標準修業年限×1.5]年前(平成 17 年度)の入学者数(d)	[標準修業年限×1.5]年内卒業(修了)率(c)/(d)	(d)のうち[標準修業年限×1.5]年間に学位を取得した者の数(c)				[標準修業年限×1.5]年前(平成 18 年度)の入学者数(d)	[標準修業年限×1.5]年内卒業(修了)率(c)/(d)
	H20 年度卒業	H21 年度卒業	H22 年度卒業	計			H21 年度卒業	H22 年度卒業	H23 年度卒業	計		
文教育学部	201	14	6	221	244	91%	215	30	6	251	264	95%
理学部	131	5	2	138	154	90%	140	8	1	149	153	97%
生活科学部	124	9	2	135	152	89%	131	6	1	138	147	94%

資料 6-①-D 留年・休学・退学の状況 (教務チーム作成)

(留年率)

区分	平成 22 年度			平成 23 年度		
	全学生数 [前年度] (a)	留年者数(b)	留年率(b/a)	全学生数 [前年度] (a)	留年者数(b)	留年率(b/a)
文教育学部	991	67	6.8%	989	48	4.9%
理学部	586	19	3.2%	569	13	2.3%
生活科学部	589	19	3.2%	584	20	3.4%

(休学率)

区分	平成 22 年度			平成 23 年度		
	全学生数 [前年度] (a)	休学者数 [前年度] (c)	休学率(c/a)	全学生数 [前年度] (a)	休学者数 [前年度] (c)	休学率(c/a)
文教育学部	991	9	0.9%	989	19	1.9%
理学部	586	4	0.7%	569	4	0.7%
生活科学部	589	5	0.8%	584	7	1.2%

(退学率)

区分	平成 22 年度			平成 23 年度		
	全学生数 [前年度] (a)	退学・除籍者数(d)	退学率 (d/a)	全学生数 [前年度] (a)	退学・除籍者数(d)	退学率 (d/a)
文教育学部	991	6	0.6%	989	10	1.0%
理学部	586	6	1.0%	569	9	1.6%
生活科学部	589	2	0.3%	584	3	0.5%

※全学生数(学部) = 学部 1~4 年生の在籍者数

資料 6-①-E 留年者の割合 (大学情報データベース)

区分	平成 22 年度			平成 23 年度		
	4 年次生数(a)	留年者数(b)	留年者率(b/a)	4 年次生数(a)	留年者数(b)	留年者率(b/a)
文教育学部	310	67	21.6%	289	48	16.6%
理学部	162	19	11.7%	154	13	8.4%
生活科学部	166	19	11.4%	165	20	12.1%

資料 6-①-F 資格取得の状況 (教務チーム作成)

区分	平成 22 年度			平成 23 年度		
	卒業者数(a)	教職免許取得者数(b)	取得率(b/a)	卒業者数(a)	教職免許取得者数(b)	取得率(b/a)
文教育学部	257	62	24.1%	237	32	13.5%
理学部	146	53	36.3%	137	31	22.6%
生活科学部	144	32	22.2%	140	24	17.1%

【分析結果とその根拠理由】

生活科学部の標準修業年限内卒業の割合は、平成 22 年度、23 年度ともに 9 割前前後であり、学生の在学中の学習は順調に行われたと言える。留年、休学、退学率も低水準である。卒業論文は、各学科・講座において質の高いものが提出されるよう指導されている。資格免許の取得率においても一定の成果がみられ、教育の効果が上がっていると判断される。

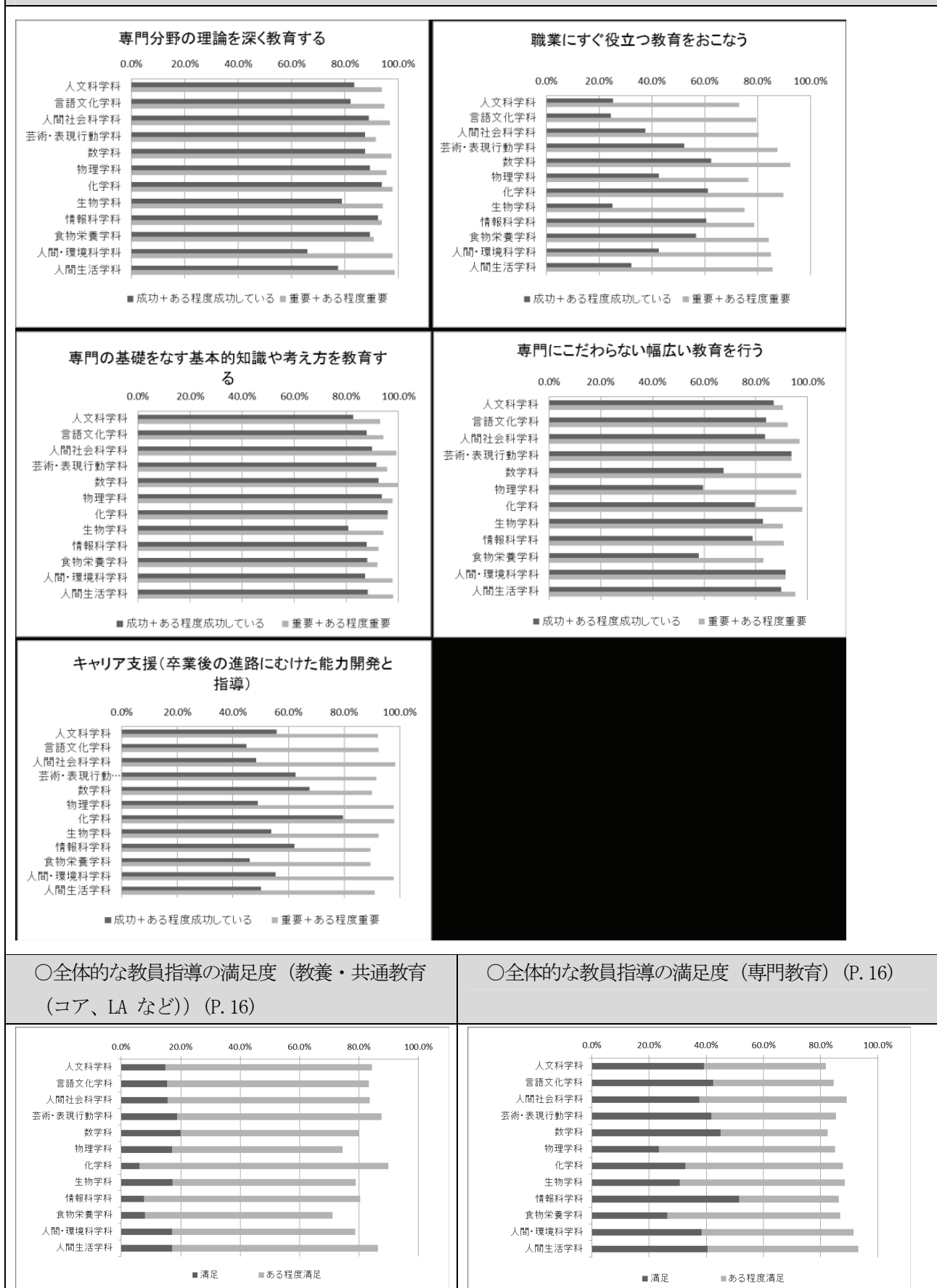
観点②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

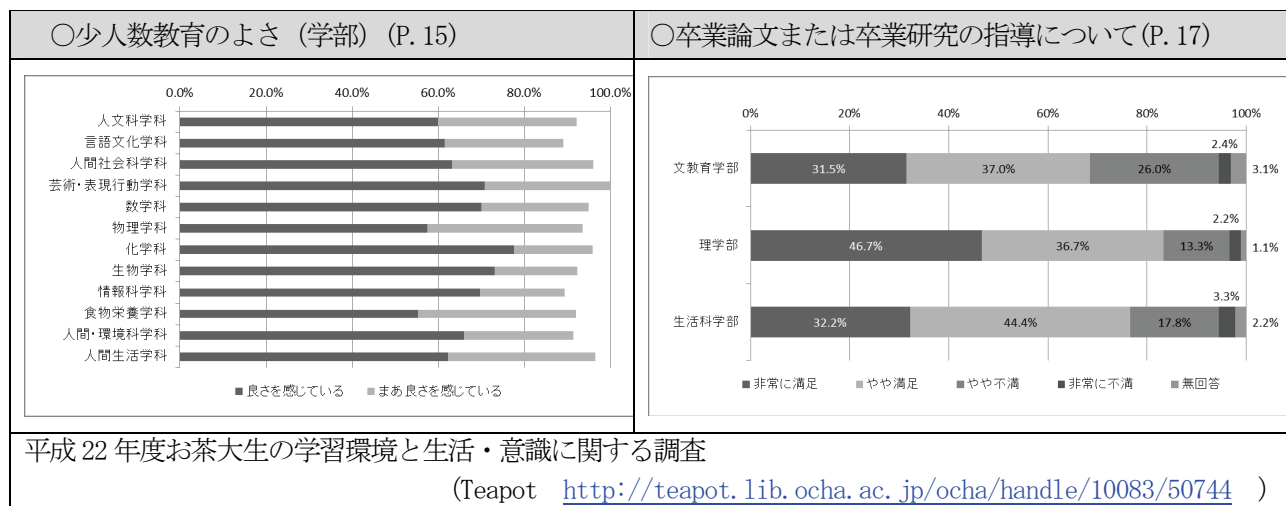
【観点に係る状況】

平成 22 年度の学習環境と生活・意識に関する調査によると、教育に対する学生の評価は、食物栄養学科では「専門分野の理論を深く教育する」、人間生活学科では「専門の基礎をなす基本的知識や考え方を教育する」、人間・環境学科では「専門にこだわらない幅広い教育を行う」の値が高く、それぞれの学科に特色のある学習成果があがっている（資料 6－②－A）。指導教員の評価については、専門教育の教員指導に対する満足度は高く、特に人間・環境学科、人間生活学科では 9 割以上が満足していると回答している。また、少人数教育のよさを高く評価する割合が全学部で多い。卒業論文または卒業研究の指導についての学部 4 年生対象の調査では、生活科学部は 32.2%が「非常に満足」、44.4%が「やや満足」であった。学期ごとに学生の授業の評価アンケートが実施され、その結果は担当教員にフィードバックされ、全学的な F D の取組みにも活用されている（資料 8－②－A）。

資料 6-②-A 平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査

○お茶大の成功度と将来の重要度(p. 21)





【分析結果とその根拠理由】

業評価アンケートを実施し、その結果が担当教員にフィードバックされ、活用されている。本アンケートの結果や学生意識調査の結果から、学生の教育全般に対する満足度の高さが確認される。授業評価等、学生からの意見聴取の結果から判断して、教育の成果は上がっていると判断される。

観点③： 就職や進学といった卒業（修了）後の進路の状況等の実績から判断して、学習成果が上がっているか。

【観点に係る状況】

平成 23 年度の 3 学部卒業生 514 名のうち就職者は 294 名 (57.2%)、進学者は 177 名 (34.4%) であった。その内訳を見ると、文教育学部の就職率（進学率）は 69.2%（19.8%）、理学部は 33.6%（61.3%）、生活科学部は 60.0%（32.9%）である（資料 6－③－A）。就職先は、多くは民間企業であるが、官公庁（平成 22 年度 18.2%、23 年度 8.9%）、教職（6.0%、7.7%）への就職も少なくない（資料 6－③－B）。

資料 6－③－A 進路の状況（学生・キャリア支援チーム作成）

区分	平成 22 年度							平成 23 年度						
	卒業生数 (a)	進学状況		就職状況				卒業生数 (a)	進学状況		就職状況			
		進学者数 (b)	進学率 (b/a)	就職者数 (d)	就職率 (d/a)	就職希望者数 (c)	就職希望者の就職率 (d/c)		進学者数 (b)	進学率 (b/a)	就職者数 (d)	就職率 (d/a)	就職希望者数 (c)	就職希望者の就職率 (d/c)
文教育学部	257	54	21.0%	151	58.8%	179	84.4%	237	47	19.8%	164	69.2%	170	96.5%
理学部	146	92	63.0%	47	32.2%	47	100.0%	137	84	61.3%	46	33.6%	48	95.8%
生活科学部	144	48	33.3%	79	54.9%	84	94.0%	140	46	32.9%	84	60.0%	90	93.3%

資料 6-③-B

○就職先一覧

平成22年度学科別就職先一覧

平成23年4月1日現在

文教育学部

■人文科学科(哲学)

医療法人 秀峰会
リンク情報システム(株)
プロカメラマン(事務所アシスタント)
あいおいニッセイ同和損害
保険(株)
(株)メディカルリサーチアンド
テクノロジー
(株)東京海上日動キャリア
サービス
群馬県職員
ジャパンケーブルネット(株)
第一生命保険(株)
横浜市職員

■人文科学科(歴史)

日本SE(株)
(株)三菱東京UFJ銀行
金融庁
(株)エヌ・ティ・ティ・データ
横浜役所
東京都職員
(株)スリムビューティハウス
新日本法規出版(株)
タマノイ酢(株)
日本マスタートラスト信託
銀行(株)
ブレンバンク(株)
(株)アネビー
東京国立博物館
(株)うさぎ薬局
公立学校共済組合
東日本電信電話(株)
海上自衛隊
(株)サマンサタバサジャパン
リミテッド
(株)山梨中央銀行
三井住友海上火災保険(株)

■人文科学科(地理)

(株)ゼンリン
明治安田生命保険相互会社
全日空商事(株)
(株)ハウスメイトパートナーズ
■グローバル文化学環(人文)
総務省
大和証券(株)
(株)電通

■言語文化学科(日文)

小金井市役所職員
アクサ生命保険(株)
(株)インターメディア
(株)ジュンク堂書店
中部電力(株)
(株)富士通ミッション

クリティカルシステムズ

陵南セミナー
(株)MS&Consulting
(株)ゆうちょ銀行
(株)フジ弘報社
伊藤忠フレッシュ(株)
(株)アイ・ティ・エス(パナナ園)
栃木県職員
板橋区役所
東芝テック(株)
(株)ジェイキャスト
アパホテル(株)
くまざわ書店
高山県庁
(株)トライグループ

■言語文化学科(中文)

日立電子サービス(株)
(株)岩手日報社
(株)内田洋行
タマノイ酢(株)
(株)テクノスジャパン

■言語文化学科(英文)

日本興亜損害保険(株)
日立オートモティブシステム(株)
(株)日本保育サービス
日本電信電話(株)
三井住友海上火災保険(株)
東京海上日動火災保険(株)
群馬県庁
宇都宮市役所
(株)デンソー
(株)京王エージェンシー
(株)ホクタテ
防衛省
(株)シンカーミクスル
(株)早川書房
アンダーソン・毛利・友常法律
事務所
郵便事業(株)
東京都立高等学校
大妻多摩中学高等学校
(株)日本政策投資銀行

■言語文化学科(仏文)

(株)ファイブフォックス
(株)ユニクロ
松山市役所
(株)マイネット・ジャパン
総務省
東京医科歯科大学職員
千葉大学(図書館職員)
郵船不動産(株)
(社)全日本ピアノ指導者協会
(PTNA)

■グローバル文化学環(言語)

(株)イデア
日本郵政(株)
千代田区役所
大和証券(株)
(株)博報堂

■人間社会科学科(社会)

(株)日本アクセス
(株)メディアコンピュータ
システムズ
有限責任監査法人トーマツ
東大和市役所
三井不動産住宅リース(株)
東日本電信電話(株)
(株)三井住友銀行
(株)ミツカングループ
東急建設(株)
共栄火災海上保険(株)

■人間社会科学科(教育)

(株)ハブ
文京区役所
横浜市
(株)イトーヨーカ堂
郵便事業(株)
東急建設(株)
(株)学究社
東京都(小学校教員)
大和証券(株)
(株)ビジュアルビジョン
横浜市(小学校教員)
福島県(小学校教員)
(福)社会福祉事業団協議会
■人間社会科学科(心理)
立教大学職員
お茶の水女子大学職員
(株)コヴィーティエン ジャパン(株)
(株)三井住友銀行
東日本旅客鉄道(株)

■グローバル文化学環(人)

(株)大広
日本ビューレット・バックカード(株)
■芸術 表現行動学科(舞踊)
Noism
(株)ベンチャーバンク
東京都庁
(学)大原学園
日本生命関連会社
■芸術 表現行動学科(音楽)

群馬県公立中学校
(株)資生堂
日本生命保険相互会社

理学部

■数学科

(株)エヌ・ティ・ティ・データ
(株)日立情報システムズ
東日本旅客鉄道(株)
(株)三菱東京UFJ銀行
エヌ・ティ・ティ・データ・フォ
ース(株)
神奈川県立高等学校
第一生命情報システム(株)
(株)かんぽ生命保険
東京海上日動火災保険(株)
桜蔭中学校・高等学校
親和中学校
佐野日本大学高等学校
みずほ情報総研(株)

■物理学科

大正製薬(株)
東日本旅客鉄道(株)
(株)かんぽ生命保険

■化学科

(株)北陸銀行
宮城県警察
光塩女子学院
(学)河合塾

■生物学科

富山県高等学校
(独)理化学研究所
茨城県庁
■情報科学科
みずほ情報総研(株)
(株)PFU
ソニー(株)
西日本電信電話(株)
東日本電信電話(株)
日本放送協会
日本ユニシス(株)
みずほインベスターズ証券(株)
(株)エヌ・ティ・ティ・データ
大日本印刷(株)
(株)YSK e-com
(株)ナビタイムジャパン
住商情報システム(株)
NSSLCサービス(株)
(株)日立製作所
TIS(株)

生活科学部

■食物栄養学科

日本製粉(株)
(株)ストリクトリー・シアトル
函館白百合学園高等学校
千葉県職員
(社)聖隷福祉事業団
東京都職員
不二製油(株)
東京大学職員
東洋水産(株)
東日本電信電話(株)

■人間 環境科学科

東京都職員
(株)西日本シティ銀行
アメリカンファミリー生命保
険会社
鹿島建設(株)
(株)SRA
(株)オービック
北海道旅客鉄道(株)
旭化成アミダス(株)
南陽(株)

■人間生活学科 発達臨床

心理学講座
最高裁判所事務総局
家庭裁判所調査官
(株)みずほ銀行
保育園(文京区保育士)
(株)さなる
池袋保健所
学習院幼稚園
(株)山口銀行
文部科学省
サーチファーム・ジャパン(株)
養育市幼稚園
伸びる会幼稚園
キリンビール(株)

■人間生活学科 生活社会

科学講座
(株)ジェイアール東日本企画
総合警備保障(株)
(独)住宅金融支援機構
静岡鉄道(株)
(株)三井住友銀行
(株)ニトリ
ニッセイ情報テクノロジー(株)
横浜役所
野村証券(株)
(株)三菱東京UFJ銀行

『大学案内 2012』P. 89)

【分析結果とその根拠理由】

本学の教育目的に沿って行われた教育の結果は高い就職率と進学率となって現れている。また、高度な専門性が必要とされる職に就くケースが多い。以上のことから、教育の成果や効果が上がっていると判断される。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

学生による授業評価アンケートをはじめとする各種調査を計画的に実施し、教育の達成状況を多様な角度から把握するシステムが整っており、その成果が教育の質の向上のために活用されている。

在学中の単位取得状況や、学士課程4年での卒業率、教職免許取得率の高さ、就職・進学状況などから判断して、多数の学生が在学中の教育を通して高い資質や能力を身に付けて卒業していると判断される。

授業評価アンケートを通して、本学の教育全般に対する学生の高い満足度が示されている。

【改善を要する点】

特になし

基準 7 施設・設備及び学生支援

(1) 観点ごとの分析

観点②： 教育研究活動を展開する上で必要な I C T 環境が整備され、有効に活用されているか。

【観点到係る状況】

生活科学部における I C T 環境については、学科、講座ごとに学生共用のパソコンが整備され、学習環境への配慮がなされている。食物栄養学科では 27 台、人間生活学科では、発達臨床心理学講座に 1 台、生活社会科学講座に 12 台、生活文化学講座に 6 台が整備され、それぞれ有効に活用されている。また学内にはノート型パソコンを使って安全にネットワークが接続できるように認証機能付き情報コンセントが設置されており、学生は自由に利用することができる。

本学部生は、学内共同利用施設の情報基盤センターが管理する複数の情報教室を、授業で使用していない時間には自由に利用できる。資料 7-②-A は学生調査における情報教室の満足度に関する本学部生の回答であり、非常に満足、やや満足の合計が、「情報教室の開室日、時間」については 45.7%、「情報機器の利用方法」については 46.0%であり、いずれも 50%以下の値である。情報教室の開室時間については「利用したことがない」という回答が 30%ある。

資料 7-②-A-

○教育サービスの満足度

区分	情報教室の開室日、時間	情報機器の利用方法
生活科学部	45.7%	46.0%

(非常に満足、やや満足の計)

(「平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査報告書」P. 22)

【分析結果とその根拠理由】

I C T 環境はおおむね整備されているが、学生調査における教育サービスの満足度は 5 割に満たず、情報教室を使用したことのない学生も 3 割にのぼる。理由の一つに情報教室の存在や利用方法が周知されていないことが考えられ、今後は情報教室の存在や開室時間等の学生への周知を徹底するなど改善が必要である。

観点③： 図書館が整備され、図書、学術雑誌、視聴覚資料その他の教育研究上必要な資料が系統的に収集、整理されており、有効に活用されているか。

【観点到係る状況】

本学図書館は教育研究活動を支える総合図書館として、インターネットや電子ジャーナルなどの印刷媒体以外の資料を包括的に収集保存しており、図書館 H P を通して詳細な利用説明がなされている (Web 資料 7-③-1)。図書の検索については、館内の端末およびインターネットを通して学外から可能である。図書館収蔵以外の学科・

講座所蔵の図書についても検索することができる。

生活科学部の図書、学術雑誌、視聴覚資料については、各学科・講座で必要なものを定期購読あるいは購入しているが、電子ジャーナル化の増大により、整備のしかたも変わりつつある。購入した学術雑誌は、学生の閲覧に配慮し、定期的に製本されている。各学科・講座に図書室・資料室が設置され、専門分野の学術雑誌、図書が系統的に整備されており、学生の閲覧も自由である（前掲資料 5-⑦-D、E）。人間生活学科では、生活文化学講座において資料室 1、実物資料室 1、発達臨床心理学講座において資料室 3、調査資料保管室 1、生活社会科学講座において資料室 4、雑誌室 1 室があり、それぞれが蔵書、学術雑誌など十分量の図書を備え、全体として実質的な形で人間生活学科図書館の体制をとっている。他に食物栄養学科と人間・環境科学科の共通図書室 1 室があり、さらに学部共通図書室（前掲資料 5-⑦-C）には、家庭科教員キャリアコース関連資料室および消費生活アドバイザー資格取得支援プログラム資料室が整備されている（前掲資料 5-③-D）。

Web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
Web 資料 7-③-1	お茶の水女子大学図書館 (http://www.lib.ocha.ac.jp/)

【分析結果とその根拠理由】

学部共通図書室、学科共通図書室、さらに講座ごとに複数の図書・資料室が整備され、本学部の図書整備の体制については、おおむね良好であると判断される。

観点④： 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

【観点に係る状況】

本学部の学生の自習室として第 6 講義室（大学本館 209 室）が開放されており、授業で使用されていない時間帯に自由に学生が利用することができる。本自習室は、夜間部にも学生に利用されている。上記の学部共通図書室や学科・講座の図書・資料室での自習も可能である。また学内には、学生の自主的学習施設として、総合学修研修センター、図書館、情報基盤センター、グローバル教育センターがあり、自習やパソコンの利用ができる。学生は各施設の開館時間、利用規則に従って勉学意欲を高めるべく効果的な施設利用を行っている。自主的学習環境に関する学生への利用案内も学生支援センターHPに整備されている（Web 資料 7-④-1）。平成 22 年度の調査によれば、自習室を利用したことがない学部生は 23.4%にとどまり、多くの学生が自習室を利用していることがわかる（前掲資料 5-⑥-B 付表 P. 22 Q15 参照）。

Web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
Web 資料 7-④-1	施設利用案内 (http://www.ocha.ac.jp/gss/support_center/facilities/index.html)

【分析結果とその根拠理由】

自習室として学科・講座の図書・資料室が開放されている他、教室 1 室が自習室として確保されている。また学内的にも種々の自主的学習環境が整備されており、おおむね効果的な利用がなされていると判断される。

観点⑤： 授業科目、専門、専攻の選択の際のガイダンスが適切に実施されているか。

【観点に係る状況】

生活科学部では新入生に対して入学式直後に 1 泊 2 日の新入生セミナーを実施している（資料 7-⑤-A）。学科・講座ごとに学年担任、カリキュラム委員など複数の教員と上級学生が同行し、専門に関する 4 年間の学習計画、教職関連科目や一般教養科目の選択など履修に関する具体的方法が説明される。本学部は毎年『生活科学部履修の手引き』を作成し、4 年間の履修計画の情報を共有するようにしている（前掲資料 5-⑤-B）。また在来生への履修ガイダンスを行う合宿セミナーも設けている。食物栄養学科では 1～4 年生、および院生と教員により、人間・環境科学科では 3 年生と教員による合宿セミナーが行われ、専門や専攻を選択する際のガイダンスがなされている。

履修に関する説明は、学科・講座によってカリキュラムの内容が異なるため、それぞれの特性に従って行われている。人間・環境科学科では、1 年次から 4 年次までに履修する科目「専門教育科目必修プログラム」を「主プログラム（必修）（選択）」と「強化プログラム（選択）（建築）」に、専門以外を「学部共通科目、教職共通科目」「コア科目」「教職に関する科目」と分類し、学生が理解しやすいように工夫している（資料 7-⑤-B）。食物栄養学科、人間・環境科学科では、必修科目の他、教職科目、コア科目、学部共通科目など選択科目も含めて時間割モデルを示し、学生の履修計画の参考としている（資料 7-⑤-C）。資格の取得や副プログラムについては、学科・講座の特性に応じた説明がなされている。

人間生活学科では、学生生活支援体制として 1 年生担当助手室を設け、支援を行っている他、カリキュラム委員による、講座を超えたプログラム選択や学習計画相談体制があり、複数プログラム選択履修制度の導入に伴う学生への情報提供を積極的に行っている。特に人間生活学科 1 年生の主プログラム選択に関する相談・説明会は入学時と夏休み前の 2 回行われ、10 月の予備調査を経て 1 月にウェブ申請し、調整後 2 月に結果が発表され、ほぼ 1 年間かけてプログラム選択の指導が行われている。

資料 7-⑤-A 新入生セミナー

○平成 24 年度新入生セミナー実施要項

平成 24 年度 新入生セミナー実施要項

1. 目的：新入生に大学の概要、履修方法等を理解させ、起居をともにすることにより
学生同士、学生と教職員の融和と親睦をはかり、相互に理解を深める。
2. 実施：新入生（理学部・生活科学部）に対して 1 泊 2 日の日程でセミナーを実施する。
平成 24 年 4 月 9 日（月）～4 月 10 日（火）
3. 場所：独立行政法人 国立女性教育会館
〒355-0292
埼玉県比企郡嵐山町菅谷 728 番地
電話 0493-62-6711

資料 7-⑤-B カリキュラムの構成 (『生活科学部 履修の手引き 平成 24 年度』P. 29)

○人間・環境科学科カリキュラムの構成



カリキュラムの構成

◎ 必修科目 ○ 選択科目
 ● 二級建築士受験資格関連科目
 ☆ 家庭科教員免許に関する科目

	1 年 (2012年度)	2 年 (2013年度)	3 年 (2014年度)	4 年 (2015年度)
専門 教育 科目 必修 プログラム	主 プログラム (必修) ◎ 物理学 ◎ 基礎有機化学 ◎ 数学物理学演習 I ◎ 人体解剖学	◎ 環境科学 ◎ 生物化学 ◎ 統計学	◎ 情報工学演習 ◎ 人間環境科学演習 ◎ ● 人間環境科学実験実習 I ◎ 人間環境科学実験実習 II ◎ 人間環境科学実験実習 III	◎ 人間環境科学輪講 I ◎ 人間環境科学輪講 II ◎ 卒業論文
	主 プログラム (選択) ○ 数学物理学演習 II ○ ヒトと文化 ○ ● 建築一般構造 ○ ● ☆ 住居学概論 ○ 生活科学概論	○ 物理化学 ○ 反応工学論 ○ 環境生理学 ○ 人体計測学演習 ○ 機器分析演習 ○ ☆ 応用統計学 ○ ● 基礎構造力学※ ○ ● ☆ 建築環境計画論	○ 科学英語演習 (英語以外の語学をコア科目 の必修としている場合は 主プログラムの選択科目)	
	強化 プログラム (選択) ○ ● 設計製図基礎 ○ ● 建築環境工学※	○ 数学物理学演習 III ○ 人類進化史 ○ 人間工学 ○ 環境衛生学	○ ● 環境物理学 ○ 環境材料物性 ○ 統計学演習 ○ システム工学 ○ 水環境工学 ○ ● 建築材料科学 I ※ ○ ● 建築構造力学※ ○ 人間環境科学特別講義 ○ 人間環境科学特別実習 I ○ ● 人間環境科学特別実習 II	
	強化 プログラム (建築)	● 建築設計製図演習 I ● 建築設計製図演習 II ● 建築材料科学 II ※ ● 建築意匠論※ ● 建築施工※ ● 建築法規※ ● 生活設備学	● 建築史※ ● 環境デザイン論※ ● 測量学※	● 住生活論※
学部共通科目 教職共通科目	☆ 家族関係論 ☆ 家政経済学概論 ☆ 食物学概論 ☆ 被服学概論	☆ 調理実習 ☆ 家庭機械及び家庭電気	☆ 児童学概論 ☆ 被服製作実習 ☆ 家庭看護学	
コア科目 (L A、基礎講義、 語学など) の例	◎ ☆ スポーツ健康実習 ◎ ☆ 情報処理演習 (生活 D) ◎ 基礎英語 I ◎ 基礎英語 II ◎ 安全管理概論 ◎ 生物人類学 ☆ 法学 I (日本国憲法)	◎ ☆ 中級英語 ◎ 一般物理学実験 ◎ 一般化学実験 ● 知覚認知と環境デザイン※	◎ 科学英語演習 (英語をコア科目の必修として いる場合は必修)	
教職に関する科目	☆ 道德教育の研究 ☆ 教職概論 ☆ 教育原論 (思想・歴史) ☆ 教育原論 (社会・制度) ☆ 生徒指導の研究	☆ 教育心理 ☆ 教育課程論	☆ 教育方法論 ☆ 家庭科教育法 I ☆ 家庭科教育法 II ☆ 家庭看護学 ☆ 保育実践論 ☆ 学校カウンセリング ☆ 特別活動の研究	☆ 道德教育の研究 ☆ 教育実習 ☆ 事前・事後指導 ☆ 教職実践演習

資料 7-⑤-C モデル時間割 (『生活科学部 履修の手引き 平成 24 年度』P. 14)

○食物栄養学科モデル時間割 (抜粋)

【1 年次・前期学期 (2012 年)】

	1 / 2 限	3 / 4 限	5 / 6 限	7 / 8 限	9 / 10 限
月	(自由選択) コア	(自由選択)	生活科学概論 学部共通 / 教職	児童学概論 学部共通 / 教職	基礎有機化学 学部共通・必修
火	(自由選択) コア	情報処理演習* コア・必修	スポーツ健康実習* コア・必修	家族関係論 学部共通 / 教職	
水	教職概論 教職	教育方法論 教職	(自由選択) コア	(自由選択) コア	(自由選択) コア
木	基礎英語 I* コア	応用統計学 学部共通 / 教職	解剖生理学 I 専攻・必修	医療の健康 学部共通 / 教職	
金	独 / 仏 / 中国語 コア	生徒指導の研究 教職	(自由選択) コア	(自由選択)	

【1 年次・後期学期 (2012 年)】

	1 / 2 限	3 / 4 限	5 / 6 限	7 / 8 限	9 / 10 限
月	道德教育の研究 教職	教育原論 (制度) 教職	家政経済学概論 学部共通 / 教職	住居学概論 学部共通 / 教職	法学 I コア / 教職
火	(自由選択) コア	調理科学 専攻・必修	スポーツ健康実習* コア・必修	食物学概論 学部共通 / 教職	生化学 専攻・必修
水	教育原論 (思想) 教職	基礎化学 A 全学共通	(自由選択) コア	(自由選択) コア	(自由選択) コア
木	基礎英語 II* コア	応用統計学 学部共通 / 教職	解剖生理学 II 専攻・必修	(自由選択)	
金	独 / 仏 / 中国語 コア	特別活動の研究 教職	基礎調理学実習 専攻・必修		

【分析結果とその根拠理由】

新入生セミナーによって教員や上級生による詳細なカリキュラムの指導があり、ガイダンスは適切に実施されている。『生活科学部 履修の手引き』は、学科・講座ごとに懇切丁寧に作成され、実際の時間割モデルを 1~4 年次まで提示するなど学生の側にたった手引き書として全学の履修ガイドの理解を助けるものである。

観点⑥： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。

また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

【観点に係る状況】

複数プログラム選択履修制度については、総合学修支援センターがこれを全面的にサポートしている。同センターは学内共同教育研究施設であり、総合的な学修相談、学修指導などの支援を行っている。プログラム履修方法、履修登録や取り消し、プログラムの変更、成績評価など、さらに各種学修支援システムの利用や資格取得についての相談も受けている。総合学修支援センターのHPに学生からの相談内容と回答がアップされ学生間で情報が共有されている（資料7-⑥-A）。また生活科学部全教員のオフィス・アワーが生活科学部のHPおよび『生活科学部 履修の手引き』に掲載され、学生は教員が指定した時間帯に学習相談に行くことができる（Web 資料7-⑥-1、前掲資料5-⑦-A）。留学生にはチューター制度や留学生相談室が整備されており、指導教員の指示のもとに本学の大学院生が留学生に個別に指導を行い、学習効果を上げることが期待されている。また留学生の日本語学習面でのサポートや生活支援なども行っており、大学HPに紹介されている（Web 資料7-⑥-2）。

人間生活学科では入学時に冊子「人間生活学科で学ぶみなさんのために」が配布され、その中で各講座の1年生担任、カリキュラム委員、学科長と講座主任の名前とそれぞれの役割について示し、内容に応じて、相談・助言・支援を行うことができるようにしている。また、日常的な質問については発達臨床心理学講座、生活社会科学講座、生活文化学講座の3講座が毎年持ち回りで担当の助手室をき決め、相談を受け付けている。

別添資料・Web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
Web 資料7-⑥-1	教員オフィスアワー (http://www.hles.ocha.ac.jp/seikatsu_kyoinH23.pdf)
Web 資料7-⑥-2	個人チューター制度、留学生相談室 (http://www.ocha.ac.jp/intl/intl-st/4-6.html)

資料7-⑥-A

○学習支援センターに寄せられた相談の例		
Q1	主プログラムを選択する時期はいつですか？	
A1	理系については、入学時点で申請。文系については、1年次終了時（1月頃）に、Web 申請し、申請者数（第一希望者の数）が受け入れ上限数を下回っている場合は、そのまま決定します。受け入れ上限数を上回っている場合は、当該主プログラム提供コース・講座において選考し、通知します。	
Q2	第2プログラム、第3プログラムを選択する時期はいつですか？	
A2	第2プログラムは、文系理系とも2年次終了時に、Web 申請により選択できます。第3プログラムは、2年次終了以降、随時、Web 申請可能です。	
Q3	履修科目決定までのモデルプランは？	
A3	コア科目の必修科目（語学、情報、スポーツ健康）を埋める →所属学科の必修科目を埋める →時間割に入れてみて、空いている時間帯の科目を調べて、履修するか個別に決める。	
Q4	一年次のおすすめの履修の仕方を教えてください	
A4	コア+主プログラムのCCBMのピンクの科目を優先的にとるとよいでしょう。	
Q5	一年次はどれくらい単位を取得すればよいですか？	

A5	教職や資格取得を希望すると、週 15 コマ前後になります。 ただし、各授業の評価も重要なので、余裕をもって履修できるかどうか検討し、授業だけでなく、サークル活動やアルバイトなどの兼ね合いも考えて時間割を作成してください。
----	---

【分析結果とその根拠理由】

学習支援に関する学生のニーズは総合学修支援センターを中心に把握されており、また生活科学部教員のオフィス・アワー一覧がHPに掲載され、学生の相談をいつでも受ける体制を敷いている。人間生活学科では発達臨床心理学講座、生活社会科学講座、生活文化学講座に共通の1年生のための相談窓口を設置し、多数の相談を受け付けている。学生支援体制は整備されているといえる。

観点⑦： 学生の部活動や自治会活動等の課外活動が円滑に行われるよう支援が適切に行われているか。

【観点に係る状況】

食物栄養学科では ochas (Web 資料 7-⑦-1) を学科内で立ち上げ、公認サークルとして全学から学生が集まって活動をしている。

別添資料・Web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
Web 資料 7-⑦-1	ochas ウェブサイト (http://ochashp.web.fc2.com/)

【分析結果とその根拠理由】

食物栄養学科で立ち上げた公認サークル ochas は、学科をこえて全学からの参加が可能であり、活発に活動している。学生支援は円滑に行われているといえる。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

図書室については、特に人間生活学科において、講座ごとに専門性の高い資料室が整備されており、教員・学生ともに活用されている。カリキュラムの履修や資格取得に関する指導は『生活科学部 履修の手引き』により徹底的になされ、新入生セミナーでも活用されている。

【改善を要する点】

該当なし

基準 8 教育の内部質保証システム

(1) 観点ごとの分析

観点①： 教育の取組状況や大学の教育を通じて学生が身に付けた学習成果について自己点検・評価し、教育の質を保証するとともに、教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか。

【観点到係る状況】

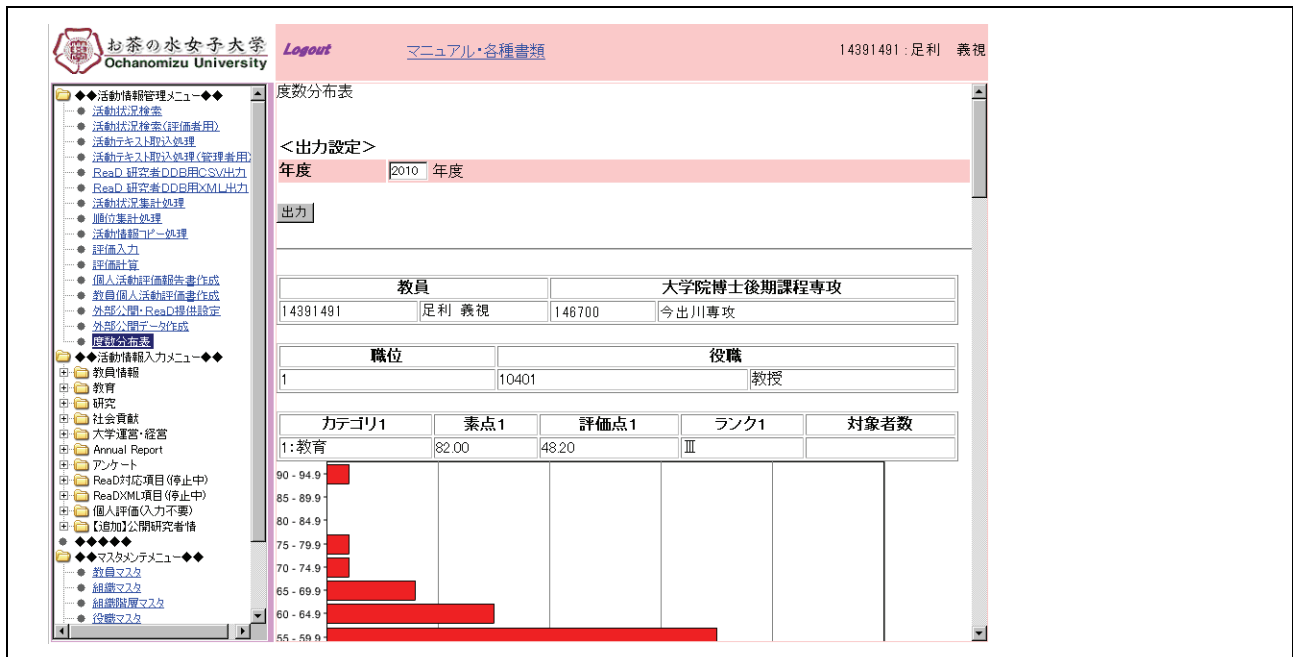
生活科学部は理系の食物栄養学科および人間・環境科学科、文系の人間生活学科の三学科からなり、文理融合型の学部である。本学部の特徴を活かした十分な教育を行うため、学部カリキュラム委員会が学部全体のカリキュラム管理を行っており、学部長の出席のもと定期的開催され、カリキュラム内容、学生の反応などについて活発な意見交換の場となっている。学部共通科目の「生活科学概論」は各分野の教員がオムニバス形式で授業を行うもので、文理融合型の学部の特徴が活かされる科目である。学習成果については人間・環境科学科および生活社会科学講座では、毎年、院生および卒業生の研究成果を『生活工学研究』『生活社会科学研究』として印刷物の形でまとめ、学生の研究成果の蓄積を重ねている。教育の取組状況を自己評価する手がかりとして教員活動状況データベースへの入力が全学的に課せられている（資料 8－①－A）。本学部では『生活科学部 履修の手引き』を毎年作成し、学科・講座ごとのきめ細かいカリキュラムの説明、4 年間の履修計画および資格の取得法などを記載している。また学科・講座別に行う在来生合宿セミナーでは学生および教員が学外で研修や懇親を行っており、さまざまな視点から学生が身に付けた学習成果を評価できる体制となっている。

資料 8－①－A 教員活動状況データベース

○教員活動状況データベース

(活動内容入力画面)

(評価結果画面)



【分析結果とその根拠理由】

生活科学部のカリキュラム管理を行い、学部長出席のもとで定期的開催されるカリキュラム委員会が、活発な意見交換により教育の質の保証や改善に寄与している。また学科・講座ごとに行われる在来生合宿セミナーは、教員が直接、学生の学習成果を評価できる機会である。また教員活動状況データベースの入力を通して教育の自己評価が行われ、教育の質の向上を保証する体制はおおむねとられていると判断される。

観点②：大学の構成員（学生及び教職員）の意見の聴取が行われており、教育の質の改善・向上に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされているか。

【観点に係る状況】

学生による授業評価アンケートが毎学期実施され、アンケート調査の結果は各教員に配布され、教育の質の改善・向上にむけての手がかりとして貴重な情報となっている（資料 8-②-A）。また学生による教育・生活評価調査がインターネットウェブサイトを使って行われ、教育カリキュラム、入試、学生支援、女性支援、情報環境、国際交流の各項目について詳細に調査された結果が学部生、大学院生ごとに報告され冊子体となっている（『平成 22 年度 お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査』）。シラバスには各教員のオフィス・アワーが明記され、学生はその時間に直に教員に質問し、指導を受けることができる。

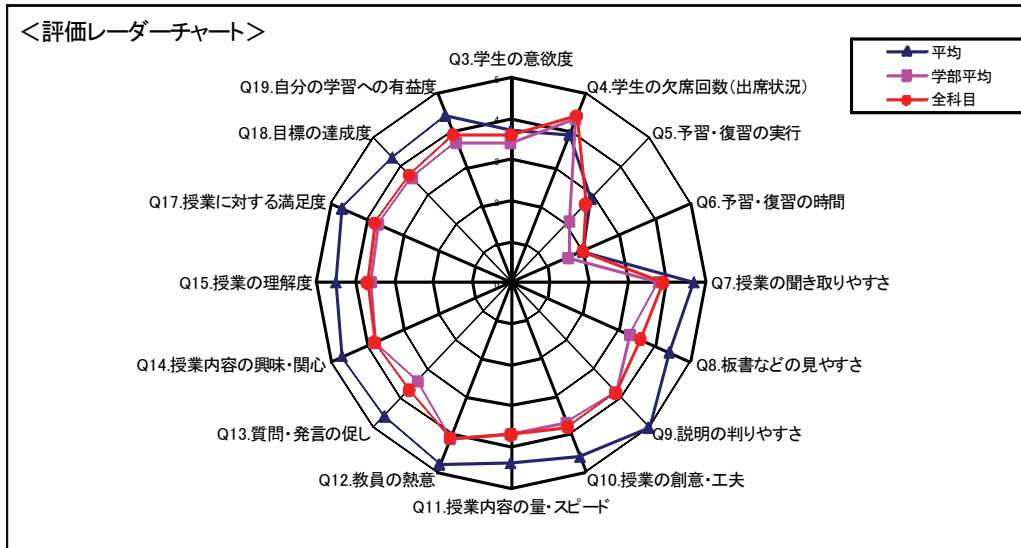
本学部には、各学科・講座から選出された委員と学部長より構成されるカリキュラム委員会があり、学部教育全般に関わる問題を共有して、カリキュラム編成に当たっている。また人間生活学科では 3 講座 3 名のカリキュラム委員が、複数プログラム選択履修制度のプログラム選択や学修計画に関する学生の相談を、講座をこえて受け付けている。教授会では毎回、各学科・講座からの報告、意見等を出してもらい、学部教員間の情報共有をはかっている。

資料8－②－A学生からの意見聴取

○授業アンケート結果集計表（事例）													
（全体）													
授業アンケート結果集計表													
学部・学科		〇〇〇学科						履修者数		18 名			
教員		□□ □□						回収数		12 名			
科目		〇△〇△演習						回収率		62.50 %			
項目別回答分布(人数と平均値)													
質疑内容	回答						平均			満足度との 相関係数			
	1	2	3	4	5	無回答	平均	学部計	全学計				
Q1. シラバスの活用	0	2	0	0	8	0	—	—	—	—			
	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	80.0%	0.0%							
Q2. 授業の選択理由	0	0	0	7	3	0	—	—	—	—			
	0.0%	0.0%	0.0%	70.0%	30.0%	0.0%							
Q3. 学生の意欲度	0	1	1	8	0	0	3.7	3.4	3.6	-0.307			
	0.0%	10.0%	10.0%	80.0%	0.0%	0.0%							
Q4. 学生の欠席回数（出席状況）	0	0	2	7	1	0	3.9	4.3	4.4	0.284			
	0.0%	0.0%	20.0%	70.0%	10.0%	0.0%							
Q5. 予習・復習の実行	2	0	5	3	0	0	2.9	2.1	2.7	-0.272			
	20.0%	0.0%	50.0%	30.0%	0.0%	0.0%							
Q6. 予習・復習の時間	3	3	3	0	0	1	2.0	1.6	2.0	-0.864			
	30.0%	30.0%	30.0%	0.0%	0.0%	10.0%							
Q7. 授業の聞きやすさ	0	0	0	3	7	0	4.7	3.8	3.9	-0.429			
	0.0%	0.0%	0.0%	30.0%	70.0%	0.0%							
Q8. 板書などの見やすさ	0	0	1	4	5	0	4.4	3.3	3.6	0.066			
	0.0%	0.0%	10.0%	40.0%	50.0%	0.0%							
Q9. 説明の判りやすさ	0	0	0	0	10	0	5.0	3.8	3.8	0.000			
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%							
Q10. 授業の	0	0	1	2	7	0	4.6	3.7	3.8	0.592			
	0.0%	0.0%	10.0%	20.0%	70.0%	0.0%							
Q11. 授業内容の量・スピード	0	0	1	4	5	0	4.4	3.7	3.7	0.724			
	0.0%	0.0%	10.0%	40.0%	50.0%	0.0%							
Q12. 教員の熱意	0	0	0	2	8	0	4.8	4.1	4.1	0.218			
	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	80.0%	0.0%							
Q13. 質問・発言の促し	0	0	1	2	7	0	4.6	3.4	3.7	0.263			
	0.0%	0.0%	10.0%	20.0%	70.0%	0.0%							
Q14. 授業内容の興味・関心	0	0	0	3	7	0	4.7	3.8	3.8	-0.429			
	0.0%	0.0%	0.0%	30.0%	70.0%	0.0%							
Q15. 授業の理解度	0	0	0	5	5	0	4.5	3.6	3.7	0.218			
	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%							
Q16. Q15で理解度が低い者	0	0	0	0	0	0	—	—	—	—			
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%							
Q17. 授業に対する満足度	0	0	0	3	7	0	4.7	3.7	3.8	1.000			
	0.0%	0.0%	0.0%	30.0%	70.0%	0.0%							
Q18. 目標の達成度	0	0	1	5	4	0	4.3	3.6	3.7	0.307			
	0.0%	0.0%	10.0%	50.0%	40.0%	0.0%							
Q19. 自分の学習への有意性	0	0	1	4	5	0	4.4	3.7	3.9	0.395			
	0.0%	0.0%	10.0%	40.0%	50.0%	0.0%							
Q20. 視聴覚機器設備	—	—	0	1	9	0	—	—	—	—			
	—	—	0.0%	10.0%	90.0%	0.0%							
＜評価レーダーチャート＞													
＜評価棒グラフ＞													
（1 枚目）													
授業アンケート結果集計表													
学部・学科		〇〇〇学科						履修者数		18 名			
教員		□□ □□						回収数		12 名			
科目		〇△〇△演習						回収率		62.50 %			
項目別回答分布(人数と平均値)													
質疑内容	回答						平均			満足度との 相関係数			
	1	2	3	4	5	無回答	平均	学部計	全学計				
Q1. シラバスの活用	0	2	0	0	8	0	—	—	—	—			
	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	80.0%	0.0%							
Q2. 授業の選択理由	0	0	0	7	3	0	—	—	—	—			
	0.0%	0.0%	0.0%	70.0%	30.0%	0.0%							
Q3. 学生の意欲度	0	1	1	8	0	0	3.7	3.4	3.6	-0.307			
	0.0%	10.0%	10.0%	80.0%	0.0%	0.0%							
Q4. 学生の欠席回数（出席状況）	0	0	2	7	1	0	3.9	4.3	4.4	0.284			
	0.0%	0.0%	20.0%	70.0%	10.0%	0.0%							
Q5. 予習・復習の実行	2	0	5	3	0	0	2.9	2.1	2.7	-0.272			
	20.0%	0.0%	50.0%	30.0%	0.0%	0.0%							
Q6. 予習・復習の時間	3	3	3	0	0	1	2.0	1.6	2.0	-0.864			
	30.0%	30.0%	30.0%	0.0%	0.0%	10.0%							

○授業アンケート結果集計表													
学部・学科		〇〇〇学科						履修者数		18 名			
教員		□□ □□						回収数		12 名			
科目		〇△〇△演習						回収率		62.50 %			
項目別回答分布(人数と平均値)													
質疑内容	回答						平均			満足度との 相関係数			
	1	2	3	4	5	無回答	平均	学部計	全学計				
Q1. シラバスの活用	0	2	0	0	8	0	—	—	—	—			
	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	80.0%	0.0%							
Q2. 授業の選択理由	0	0	0	7	3	0	—	—	—	—			
	0.0%	0.0%	0.0%	70.0%	30.0%	0.0%							
Q3. 学生の意欲度	0	1	1	8	0	0	3.7	3.4	3.6	-0.307			
	0.0%	10.0%	10.0%	80.0%	0.0%	0.0%							
Q4. 学生の欠席回数（出席状況）	0	0	2	7	1	0	3.9	4.3	4.4	0.284			
	0.0%	0.0%	20.0%	70.0%	10.0%	0.0%							
Q5. 予習・復習の実行	2	0	5	3	0	0	2.9	2.1	2.7	-0.272			
	20.0%	0.0%	50.0%	30.0%	0.0%	0.0%							
Q6. 予習・復習の時間	3	3	3	0	0	1	2.0	1.6	2.0	-0.864			
	30.0%	30.0%	30.0%	0.0%	0.0%	10.0%							

(2 枚目)



【分析結果とその根拠理由】

授業評価アンケートは毎学期行っており、学生側にも教員側にもほぼ定着し、個々の授業に対する意見の聴取に有用な手段となっている。教員は集計された結果を知ることにより授業の進め方の改善、工夫を量ることができる。学部カリキュラム委員会は、学部教育の意見交換の場であり、問題点を共有しながらカリキュラム編成にあたっている。人間生活学科では3講座間で複数プログラム選択履修制度に関して情報共有をはかっている。以上より、教育の質の改善・向上にむけての継続的体制は整備されていると判断される。

観点③： 学外関係者の意見が、教育の質の改善・向上に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされているか。

【観点に係る状況】

生活科学部では消費生活アドバイザーの資格取得のための支援プログラムを設けており、学部長のもとに各分野別スタッフおよび学外支援者がいる。このプログラムでは、学生への説明会に、毎年必ず消費生活アドバイザー資格を取得した卒業生に参加してもらい、各種の情報や意見の交換を行っている。本プログラムは、家庭科教員キャリアコースと同様に、履修計画のアドバイスと資格取得に関する情報提供を目的とし、パンフレットを作成して、新入生が受講する学部共通科目の「生活科学概論」で支援体制が説明されている（資料5－③－D）。

平成18年度の部局別自己点検・外部評価で指摘された、シラバスの利用率が低い点については改善が行われた。ウェブ上で公開すると同時に授業時に配布を行い利用率の向上を図り、またシラバスに成績基準を記載することを行った（資料8－③－A）。

資料8－③－A

○部局ごとの自己点検・外部評価で指摘された点の改善状況

生活科学部改善策3：

シラバスの利用率が低い点については、ウェブ上で公開すると同時に授業時にも配布することにより利用率の向上を図っている。また、シラバス成績評価基準を記載した。

部局別評価結果報告書（部局ごとの自己点検・外部評価で指摘された点の改善状況 P. 28）

(http://www.ocha.ac.jp/introduction/hyouka/pdf/050101_18hyoukakekka-bukyoku.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

受験資格が得られる消費者生活アドバイザーのための支援体制があり、その説明会には消費生活アドバイザー資格を取得した卒業生が参加し、情報や意見交換を通して教育の質の改善、向上に向けて活かされている。

観点④： ファカルティ・ディベロップメントが適切に実施され、組織として教育の質の向上や授業の改善に結び付いているか。

【観点に係る状況】

毎学期末に行っている学生による授業評価アンケートの実施と、集計結果の担当教員への配布は、教員の質の向上と授業の改善に向けたファカルティ・ディベロップメント（FD）の一環となっている。また教員の授業参観が、学部ごとにFDとして行われている。生活科学部FDの案内がファカルティ支援チームの学部担当よりメールにて教員に送られ（資料 8-④-A）、教員は事前に参観授業の担当者に連絡、参観後はファカルティ支援チーム学部担当にコメントを提出する。生活科学部の授業参観は3学部が開かれ、生活科学部と理学部は相互に参観できる。2学部を参観した場合は2か所にコメントを提出する。コメントには自分の授業に取り入れたい点（注目した点）やFD実施に関する意見など記載する（資料 8-④-B）。学部の参観教員数は、平成22年度、23年度ともに18名であった。

資料 8-④-A 平成22年度生活科学部FDについて（ファカルティ支援チーム作成）

○平成22年度生活科学部FDについて

1. 目的:お互いに授業を参観・評価することで、授業方法内容等の改善を行うと同時に、ジョイント型・対話型・討論型など、将来の授業形態の開発につなげる。
2. 期間:平成22年6月21日(月)から7月9日(金)までの3週間
3. 5月31日(月)から6月25日(金)に行われる理学部のFDのための授業参観も可とする。ただしこの場合は、アンケートを理学部と生活科学部の2箇所に提出しなければならない。
4. 対象授業:生活科学部担当常勤職員の全科目(ただし、授業の形態やその他の理由で参観不可の科目は除く。)とする。事前にメール等で担当教員に連絡すること。
5. 参観者:生活科学部全教員、他学部の教員も可とする。
期間中1科目以上を参観し、期日までに教育支援チーム生活科学部担当(*****@ocha.ac.jp)にアンケートを提出すること。
7. 今年度の評価の対象になりますので参加ください。
*科目一覧表とアンケート用紙は、本学HPの全学教育システム改革推進本部のページの【生活科学部】からダウンロードしてください。
(http://www.ocha.ac.jp/edu_p/news/20100527.html)
*アンケートの締め切りは、7月12日(月)

*回収方法は、メールにて添付し、教育支援チーム生活科学部担当 (*****@ocha.ac.jp) まで。

資料 8-④-B 平成 22 年度生活科学部 F D 授業参観アンケート・コメント集

○学部共通科目「生活科学概論」に関するアンケート・コメント	
生活科学概論	(注目した点) ①門領域外の学生にもわかりやすくいろいろな事例を使って内容を表現していた点。 ②授業の流れをわかりやすく始めと最後に伝えていた点。 (コメント) 生活科学部は広い範囲の専門にわたる先生方がおり、今回初めて理系の先生の担当授業に参観させてもらいました。授業の対象は生活科学部全ての学生に対するため、文系の学生にもわかるように話の内容に工夫がされていました。ある身近な現象を数式を使ってとらえると、法則性がとらえられ、現象をわかりやすく表現できることを示しておられました。内容的にもとてもおもしろく、授業の準備を丁寧にしたことがよくわかりました。文系の人でもこのような授業を受ける機会があるということがすばらしいと思います。
○「生活科学部 F D」実施への意見	
	(コメント) 授業参観の F D だけでなく、チームで行っている授業など複数の教員間で話し合いを重ねて実習など授業を実施している場合もあるので、このような授業そのものを F D とみなすこともできると思います。
	(コメント) F D の授業参観の期間についてですが、いつも同じ時期の、しかも今年は授業期間の短い中で最も授業の忙しい時期に行われましたが、このような短い期間に限定しなくてもいいのではないのでしょうか。また、後期の授業はいつも対象にならず、枠を外して一年に一度、各自がそれぞれの時期に担当の先生に申し込み行う形で十分対応できるのではないかと考えています。今回は指定された期間の中ではまったく時間がとれなかったもので、上述した 7 月 11 日の授業をそれにとってかわる形で位置付けていただけたらと思いました。
	(コメント) 授業参観自体は、おもしろく有益だと思う。しかし、F D だけに限らず様々な取り組みがなされいて、自分の講義の準備時間が減っている。本末転倒にならないようにしなければいけないと自戒したい。

【分析結果とその根拠理由】

学部ファカルティ・ディベロップメントとして毎年行われている授業参観は、他学部の参観も可能とし、専門以外の分野の授業展開をみることで評価されている。参観した教員のコメントによれば、授業参観という F D 自体は評価されるが、期間の限定に対する不満や、自身の授業準備時間への影響など、体制を見直すべく意見があり、この点は改善を要する。

観点⑤： 教育支援者や教育補助者に対し、教育活動の質の向上を図るための研修等、その資質の向上を図るための取組が適切に行われているか。

【観点に係る状況】

生活科学部にはアカデミック・フェロー (A F) が 1 名 (食物)、アカデミック・アシスタント (A A) が 7 名 (食物 3 名、人間・環境科学科、発達臨床心理学講座、生活社会科学講座、生活文化学講座各 1 名) おり、学科・講座の実験・実習の授業および事務的補佐を行い、学部における教育活動の質の向上のために貢献している。特に

食物栄養学科では管理栄養士養成課程として管理栄養士の助手が4名必須であり、4名は必修科目である食物栄養関連の実験・実習の助手を務め、担当教員と連絡を密にして授業を補佐している。学科・講座の教育支援に携わるものに、修士および博士課程の学生によるティーチング・アシスタント(TA)があり、授業の補助を行っている。TAは、本学大学院に在籍する優秀な学生に教育補助業務を行わせることにより、本人の資質の向上をはかる目的もあり(資料8-⑤-A、前掲資料3-⑦-B)、また1時間単価1200円の支給手当は学生の経済的支援ともなっている。学期はじめに説明会に参加させ、職務内容を把握させている。

資料8-⑤-A 教育支援者、教育補助者に対する研修等

○国立大学法人お茶の水女子大学ティーチング・アシスタント取扱要項(抜粋)	
(趣旨)	
第1条 この要項は、国立大学法人お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科(以下「研究科」という。)に在籍する優秀な学生をティーチング・アシスタント(以下「TA」という。)として教育補助業務を行わせ、大学教育の充実及び指導者としてのトレーニングの機会提供を図るとともに、これに対する手当支給により、処遇の改善に資するため、必要な事項を定める。	
(職務内容)	
第2条 TAは、授業担当教員の指示に従い、学部又は研究科博士前期課程の学生に対する講義、実験、実習、演習等の教育補助業務に従事する。	
(実施計画)	
第11条 授業担当教員等は、TAに教育補助業務を行わせる授業科目について、別に定めるところにより実施計画書を作成するものとする。	
(実施報告書)	
第12条 TAは、毎年度末又は毎学期末までに、別に定めるところにより実施報告書を教育機構長に提出するものとする。	
(研修)	
第13条 学長は、TAに対して、必要な研修を行うものとする。	
(「お茶の水女子大学規則集」)	

資料3-⑦-B(再掲) TAの配置状況(平成23年5月現在)

区分	開講授業数	TA申請授業数	TA配置授業数
文教育学部	777	143	132
理学部	431	103	88
生活科学部	468	76	75
大学院人間文化創成科学研究科(博士前期)	539	62	54
計	2215	384	349

(ファカルティ支援チーム作成)

【分析結果とその根拠理由】

教育支援者や教育補助者に対して、担当教員との連絡や全学的説明はなされているものの、教育活動の質の向上を図るための研修が学部として十分に行われているとはいえない。しかし、学科・講座によって異なる専門的な内容を含めた研修を、学部規模で行うことは難しく、全学で行う全体的な話と専門的かつ具体的な説明をする学科・講座ごとの研修にわけて行うことが望ましい。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

生活科学部 FD として、他学部にも開かれた授業参観が行われ、参加教員のアンケート回答は学部で共有されている。消費生活アドバイザー支援プログラムには、学外者として卒業生が関わり、教育の質の改善につながっている。

【改善を要する点】

教育支援者や教育補助者に対して、教育活動の質の向上を図るための研修や資質を向上させるための取組について検討が必要である。また教員や学生からのヒアリングをセミナー等利用して積極的に行うこと、卒業生など学外者の意見を反映させる場をつくること、FDの実施期間を工夫し、FD参加率を上げるなど、学部教育の質の確保のための改善策を検討する必要がある。

(1) 観点ごとの分析

観点①：大学の目的（学士課程であれば学部、学科又は課程等ごと、大学院課程であれば研究科又は専攻等ごとを含む。）が、適切に公表されるとともに、構成員（教職員及び学生）に周知されているか。

【観点到係る状況】

本学部・学科の目的は、『大学案内』、『学生便覧 履修ガイド』、『教育情報公開のレビュー』、『学内規則集』、『募集要項』に掲載され、広く公表されている。公表状況を資料 10-①-A に示す。これらはHP上で見ることができ、本学の構成員である教職員、学生、受験生、さらに一般の人々へ情報を提供している。特に、『大学案内』（資料 10-①-B）、『募集要項 2012』（Web 資料 10-①-1）では、学部・学科の目的が詳細に述べられ、学科別の特徴が説明されている。大学案内はHP上で簡単に操作できる Smart パンフ版を提供し、受験生や一般の人々へ本学部の情報を積極的に公表している（資料 10-①-C）。刊行物による公表以外に、学生に対しては毎年、新入生を対象に「新入生セミナー」が1泊2日で実施され、学部・学科の目的周知の機会が作られている（資料 10-①-D）。

別添資料・Web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
Web 資料 10-①-1	生活科学部の目的（「募集要項 2012」）（ http://www.ao.ocha.ac.jp/admissionpolicy.html ）

資料 10-①-A 大学・学部学科の目的の周知状況（平成 23 年度）

資料名	掲載内容		掲載箇所	配付先又はアクセス対象				主な配付先 (冊子の場合)	配付数又はアクセス件数
	冊子	HP		教職員	学生	受験生	一般		
大学案内	○	○	各学部の紹介	○	○	○	○	オープンキャンパス	20,000
大学概要	○	○	大学憲章	○	○	○	○		2,000
大学院パンフレット	○	○	各専攻の目的	○	○	○	○		1,000
教育情報公開のレビュー	—	○	各学部、大学院各専攻の目的	○	○	○	○		22,010
学内規則集	—	○	学則、大学院学則(学部の目的、大学院の目的)	○	○	○	○		149191 (※)
履修ガイド	○	—	大学憲章、カリキュラムポリシー、大学の目的、大学院の目的	○	○	○	○	学生・教職員	※:一般向け規則集のトップページへのアクセス者数を集計。
			(文教育学部) 学生便覧・履修ガイド(P43-98)						379
			(理学部) 学生便覧・履修ガイド(P99-129)						246
			(生活科学部) 学生便覧・履修ガイド(P131-156)						217
募集要項	○	○	各専攻の目的、入学者受入方針(アドミッションポリシー)	○	○	○	○	オープンキャンパスで配布 志願者、高等学校、予備校など	842
学位授与方針	—	○	本学のディプロマ・ポリシー	○	○	○	○		選抜要項: 6,414 部 推薦入試: 950 部 一般入試: 5,595 部 編入(文・生): 455 部 編入(理): 250 部 私費留学生: 165 部 AO入試: 758 部 高大連携: 100 部 計 14,687 部
									※HPでの公表はH24から

(広報チーム[大学案内・大学概要・大学院パンフレット・教育情報公開のレビュー・学内規則]、教務チーム[履修ガイド・大学院履修ガイド]、入試チーム[募集要項]作成)

※HP版のあるものについては、学内外の全ての方が閲覧可能であることから、対象は全部とした

○生活科学部・学科の目的

Faculty of Human Life and Environmental Sciences

<http://www.hles.ocha.ac.jp/>

生活科学部

生活を科学する

科学技術の進展、情報化、国際化、少子高齢化など、現代社会は急速に変化し、それにつれて私たちの生活も大きく変わろうとしています。価値観の多様化が進むなかで、人間らしい豊かで健康な生活や、異なる人々との共生、また、環境と人間との共存を実現するためにはどうすればよいか。この問いに答えることは、私たち一人ひとりにとって重要なことであると同時に、時代の要請でもあります。生活科学部は、この要請に応えるために、多角的な視点と複合的なアプローチで解き明かすことを目指しています。

文理融合・学際的に生活を科学する

生活科学部は自然科学系の食物栄養学科、人間環境科学科と、人文社会科学系の人間生活学科の3学科から構成された文理融合型の学部です。人間生活学科は、発達臨床心理学講座、生活社会科学講座、生活文化学講座の3講座から構成されています。したがって生活科学部では専門分野を深く学ぶだけでなく、学際的に幅広く学ぶこともできるのが大きな特徴です。このため、2011年度からスタートした「複数プログラム選択履修制度」では、生活科学部に独自の学際プログラムとして「消費者学学際プログラム」を設けています。消費生活に伴う諸問題を、学際的・多角的・総合的に学ぶことを目指しており、消費生活アドバイザー資格取得を目指す人にも最適のプログラムです。

各学科では少人数教育の特色を活かして実験・実習や卒業論文指導などユニークで密度の濃い授業をおこなっています。それぞれの学科・講座は、食の科学と健康、人間と環境との相互関係、個人の発達や心の健康、人間と社会の関係、生活と文化について多角的な視点と複合的なアプローチで解き明かすことを目指しています。時代の流れを敏感につかみながら、理系と文系の学問研究を土台にして人間と生活について総合的に見つめ直してみましょう。

食物栄養学科

毎日の生活に欠かせない「食」には、おいしさ、栄養や健康、製造や安全性など、さまざまな側面があります。「食」に関する研究は、どの分野も大切でありこれからはますます重要になってきます。このように多岐にわたる「食」に関する分野を総合的な視点でとらえ、人々が健康で豊かな食生活を送るために必要な専門的知識と実践的能力を身につけることを、本学科は目指しています。

人間・環境科学科

本学科は衣服、飲料水、建築、医療福祉など、私たちが取り巻く身近な課題に対し、理工学的アプローチから解決方法を探ります。科学技術の分野において、研究成果を社会に還元することが求められている中、こうした生活・環境関連の課題をテーマの中心にすることにより、先進的な役割を果たすことを目指しています。したがって、身の周りの課題を理工学的なテーマとして研究してみたい人、また、社会における科学技術のあり方に深い関心を持つ人を求めます。1年間の勉学を通じて、科学技術の実践的な応用、生活関連分野のタイムリーなテーマへの取り組み、研究成果の社会での応用・評価などを学びます。

人間生活学科

発達臨床心理学講座

<http://www.develop.ocha.ac.jp/>

発達臨床心理学講座は人間理解に関する教育・研究と心理臨床・保育実践との連携・融合を目指します。心理臨床と保育の現場を有機的につなぐ知識の開発・創造のために、実践的な研究を進めています。学部段階では、発達心理学・臨床心理学・保育学・児童学・子ども社会学などその方法論を学びます。実習として、実験、観察、面接、心理テスト、質問紙など、実践に必要な心理学の基礎を学び、また、児童発達支援・保育所で観察実習をおこない、子ども理解や保育的コミュニケーションに向かう資質養成を目指します。幼稚園・学校教育の教員養成や、大学院に進んでの心理臨床や保育の専門家や研究者養成などの準備教育の場でもあります。

人間生活学科

生活社会科学講座

<http://www.soc.ocha.ac.jp/>

私たちの身の回りではさまざまな問題が生じています。派遣労働をはじめとした非正規雇用の増加、少子高齢化社会における医療・介護制度のあり方、社会的・経済的格差にどの様に取り組むか、DV（ドメスティックバイオレンス）や児童虐待など数々に暇がありません。私たちは、生活に関わる、こうした社会・経済問題に対して、生活者の視点に立つて、法学、政治学、経済学、社会学などの社会科学の方法とジェンダー研究の視点を用いて分析し、問題解決の方法について考えていきます。

人間生活学科

生活文化学講座

<http://www.sevthe.ocha.ac.jp/>

文化を語るには、美術・思想・文学・歴史など、いわゆる人文科学のさまざまな分野とアプローチがあります。そのような領域を横断するかたちで、ひとの日常生活に関わる文化を学際的に論じるのが本講座です。衣食住はもとより、デザインや風水、恋愛・結婚や家族に関する思想など、生活に関わる文化であれば何でも対象になります。日本を知り、世界を知る——生活をテーマにした新しい文化論の構築に参加してみませんか。

(『大学案内2012』p. 74～84)

○Smart パンプ版『大学案内 2012』

日経進学ナビ

and or 検索

閲覧履歴

Check Tools

PIP/動画 ON-OFF

PIP/動画 リスト表示

お気に入り パンプ

検索結果

目次

メモ書き込み一覧

お気に入りパンプ

生活科学部

Faculty of Human Life and Environmental Sciences

未来を切り拓く力を養おう

生活科学部は、このように現代社会の発展に貢献するために、生物科学、人間科学、環境科学の分野を専門とし、その基礎となる学問を深く研究し、その応用分野として、社会の発展に貢献することを目的としています。また、学生が社会で活躍するための力を養うために、専門分野の知識だけでなく、コミュニケーション能力、リーダーシップ、問題解決能力などを身につけるための教育を行っています。生活科学部は、このように現代社会の発展に貢献するために、生物科学、人間科学、環境科学の分野を専門とし、その基礎となる学問を深く研究し、その応用分野として、社会の発展に貢献することを目的としています。また、学生が社会で活躍するための力を養うために、専門分野の知識だけでなく、コミュニケーション能力、リーダーシップ、問題解決能力などを身につけるための教育を行っています。

http://daigaku.shingakunavi.jp/p/school/detail/pamphlet/pl_6620400_50/index_univ.html?startpage=6&keyword=&scl_no=6620400&logo_flag=1&mtr_flag=1&cid=sp0100070501

○平成 24 年度新入生セミナー実施要項

平成 24 年度 新入生セミナー実施要項

1. 目的：新入生に大学の概要、履修方法等を理解させ、起居をともにすることにより学生同士、学生と教職員の融和と親睦をはかり、相互に理解を深める。

2. 実施：新入生（理学部・生活科学部）に対して 1 泊 2 日の日程でセミナーを実施する。
平成 24 年 4 月 9 日（月）～ 4 月 10 日（火）

3. 場所：独立行政法人 国立女性教育会館
〒355-0292
埼玉県比企郡嵐山町菅谷 728 番地
電話 0493-62-6711

【分析結果とその根拠理由】

さまざまな刊行物に大学、学部・学科の目的が掲載されている。それらは、冊子及びHPの形式によって適切に公表され、構成員に周知されている。さらに、学生に対しては、毎年、「新入生ガイダンス」が実施されており、学部・学科の目的を理解させるよう努めている。

観点②： 入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針が適切に公表、周知されているか。

【観点に係る状況】

入学者受け入れ方針は、「募集要項」（資料 10-②-A）、HP上の「入試情報：アドミッション・ポリシー」（Web 資料 10-②-1、前掲資料 4-①-B）に示されている。「募集要項」は、オープンキャンパスや高等学校、予備校等で配布され

(配布数は全学部で約 14,000 部)、本学志願者への周知に努めている(資料 10-②-B)。教育課程の編成・実施方針は、『学生便覧 履修ガイド』(資料 10-②-C)と『生活科学部 履修の手引き』(資料 10-②-D)、新入生セミナーの実施(資料 10-①-D)によって、学生へ周知されている。さらに、HP上の「学士課程カリキュラム・ポリシー」における学部・学科、プログラムの公表は、本学学生のみならず学外関係者にも本学の教育内容を提供している(web 資料 10-②-E)。

別添資料・Web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
Web 資料 10-②-1	学科のアドミッション・ポリシー (大学HP http://www.ao.ocha.ac.jp/admissionpolicy_1.html)

資料 10-②-A 学生募集要項(「平成 24 年度 学生募集要項 一般入試」P.1)

生活科学部	現代のわたしたちの日常生活は、日々、地球規模の変化と連関の中で営まれており、あらゆる場面で持続可能性が問われています。生活の質と作法を再検討し、現代にふさわしい価値と規準を発見し創出することは、まさに時代の要請だといえます。 生活科学はこの要請に応えるために、食の科学と健康、人間と環境、人間の発達と心の健康、人間生活と社会、人間生活と文化に関する諸問題を、高度に専門分化した学知を結集して、生活者の視点から多面的かつ総合的に解明することを目指しています。 生活科学部の特徴は、第 1 に、このような文理融合の総合応用科学としての生活科学を学ぶ点にあります。第 2 に、(1)高密度の講義、(2)少人数の実験・実習・演習、(3)個別的な卒業論文指導を軸とする少人数教育にあります。また特に家庭科の教員免許を取得しやすいカリキュラムになっていることも生活科学部の特徴の一つです。 生活科学部は、人間と生活と環境を分析的かつ総合的に理解する技法を学び、専門的学知に裏打ちされた確かな教養と豊かな構想力を身につけ、将来、社会の多方面で活躍する女性リーダーを育成することを使命としています。 高校での学習はすべての科目が、大学での勉学に必要な基礎です。志願学科の別を問わず、家庭科・芸術科目・保健体育も含め、オールラウンドの学力を身につけておくことを望みます。
-------	---

資料 10-②-B 募集要項配布先と配布数(入試チーム作成)

資料名	掲載内容	掲載箇所	配付先又はアクセス対象				主な配付先(冊子)	配付数又はアクセス件数
			教職員	学生	受験生	一般		
募集要項(冊子・HP)	各専攻の目的、入学者受入方針(アドミッションポリシー)	(学部) http://www.ao.ocha.ac.jp/admissionpolicy.html 1	○	○	○	○	オープンキャンパスで配布 志願者、高等学校、予備校など	【学部】 選抜要項: 6,414 部 推薦入試: 950 部 一般入試: 5,595 部 編入(文・生): 455 部 編入(理): 250 部 私費留学生: 165 部 AO 入試: 758 部 高大連携: 100 部 学部計 14,687 部

○生活科学部履修規程（抜粋）

3 生活科学部

生活科学部履修規程（P.213）により、以下の別表のとおり卒業に必要な単位124単位を修得してください（ただし、食物栄養学科については、138単位を修得してください）。各学科プログラム等に関することは、別表2-14を参照してください。

別表第 1 - 1 （第5条関係）																			
学 科 別	科 目 区 分	必修及び選択必修の科目・単位								自由に選択して履修する科目・単位							卒 業 に 必 要 な 履 修 単 位 数		
		コア科目				専門教育科目(必修プログラム)				コ ア 科 目	専 攻 科 目	学 部 共 通 科 目	自 由 科 目	他 学 部 の 科 目	全 学 共 通 科 目	教 職 共 通 科 目		教 職 に 関 する 科 目	必修以外の 選択プログラム
		文 理 融 合 リ ベ ラ ル ア ー ツ	基 礎 講 義	情 報	外 国 語	ス ポ ー ツ 健 康	主 プ ロ グ ラ ム	強 化 プ ロ グ ラ ム	副 プ ロ グ ラ ム										
人 間 ・ 環 境 科 学 科				30			60		20					14				124	
人 間 生 活 学 科				30			42		20					30				124	

5 お茶の水女子大学生生活科学部履修規程

- （趣旨）
- 第1条 国立大学法人お茶の水女子大学生生活科学部の教育課程及び履修方法については、国立大学法人お茶の水女子大学学則、国立大学法人お茶の水女子大学複数プログラム選択履修制度実施規則又はこれに基づく別段の定めによるほか、この規程の定めるところによる。
- （授業科目の区分）
- 第2条 授業科目は、コア科目、専門教育科目、専攻科目、学部共通科目、自由科目、全学共通科目、教職共通科目、教職に関する科目及び外国人留学生特別科目とする。
- 2 コア科目は、文理融合リベラルアーツ、基礎講義、情報、外国語（英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語及び朝鮮語）及びスポーツ健康とする。
- 3 専門教育科目は、主プログラム、強化プログラム、副プログラム及び学際プログラムを構成する科目とする。
- 4 専攻科目は、各学科において設置する科目とする。
- 5 学部共通科目は、各学科の基礎となる科目又はきわめて関連の深い科目であって必修又は選択として指定する。
- 6 自由科目は、生活科学部の他学科の科目及び他学部の科目とする。
- 7 全学で共通して履修できる科目として、全学共通科目を置く。
- 8 教育職員免許法（昭和24年法律第147号）及び教育職員免許法施行規則（昭和29年文部省令第26号）に定める教職に関する科目を置く。また、教科に関する科目として教職共通科目を置く。
- 9 外国人留学生に対して、外国人留学生特別科目を置く。
- 10 第1項の規定にかかわらず、特別設置科目を置く。
- （他学部の授業科目の履修）
- 第3条 文教育学部及び理学部の授業科目は、これを履修することができる。

『学生便覧 履修ガイド2012』P.137、213）

資料 10-②-D 教育課程の編成・実施方針（『生活科学部 履修の手引き 平成 24 年度』P. 2）

○生活科学部 履修の手引き「はじめに」

はじめに

お茶の水女子大学では新たな教育システムを平成23年度より立ちあげました。本履修の手引きは新しいシステムの下で、平成24年度に入学された学生のための手引きで、卒業するまでこの手引きに従って履修してください。また「お茶の水女子大学学生便覧2012」には履修にかかわる規則や学則が、「履修の手引き」にはカラーコードベンチマークなどの説明があります。また大学のHPにはそれぞれの授業のシラバスもありますので履修の参考にしてください。

平成23年度から本学では、21世紀型リベラルアーツを基礎とした広い視野のもとに、創造性と実践性を備えた専門基礎力を持つ人間を育成する、学生主体の複数プログラム選択型専門教育課程を導入し、主プログラムと選択プログラムの組合せにより、多様な可能性をもつ専門基礎力を育成することとしました。生活科学部では、複数プログラム選択型にした学科と、そうでない学科がありますので注意して履修してください。また1年次には幅広く学ぶと同時に2年次にそれぞれの興味や将来を考えていくつかの分野に分かれて履修をしていく学科もありますので、将来を考えて主プログラムや副プログラムなどの履修計画を立てられるように望みます。またカラーコードベンチマークシステムを導入し、それぞれの授業科目のカリキュラム全体での役割も分かりやすくしましたので、学年進行に伴ってカラーコードベンチマークやシラバスを参考に履修計画を立てることを心がけてください。4年後には幅広い視野と専門的な知識を持って卒業していただきたいと思います。

生活科学部長 大塚 譲

Web 資料 10-②-E 「学士課程カリキュラム・ポリシー」

○生活科学部の教育課程編成・実施方針（抜粋）

生活科学部の教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）

生活科学部は、人間と生活と環境を分析的かつ総合的に理解する技法を学び、専門的学知に裏打ちされた確かな教養と豊かな構想力を身につけ、将来、社会の多方面で活躍する女性リーダーを育成することを使命としている。この目的を実現するために、食の科学と健康、人間と環境、人間の生活（発達と心の健康、社会、文化）という人間生活の主要問題群に従って、学部を3学科で編成し、高度に専門分化した学知を結集して、現代生活の諸問題を、生活者の視点から多面的かつ総合的に解明することを目指す。カリキュラムは以下の見地から構成される。

1. 文理融合の総合応用科学としての生活科学という見地からカリキュラムを構成する。
2. 公共の利益に資する高度な専門知識、市民的教養、判断力を身につけることをカリキュラムの根本理念とする。それを実現するために、質の高い講義、少人数の実験・実習・演習、個々に応じた卒業論文作成指導を基軸とするカリキュラムの中で、思考力と対話能力を広めかつ深める。
3. 専門教育に関連する各種資格の取得を念頭に置いたカリキュラムを構成し、卒業後の進路選択に資する。高等学校・中学校教員免許（家庭）取得のための科目を設置する。

(1) 食物栄養学科

豊かな食生活と健康な社会の実現に向けて、食物と栄養に関する科学的視点と実践力を身につけた人材の育成を教育の目標としている。そのために、食物と栄養に関する広範な学問領域に関して教育を行う。この教育目標を実現するために、次の方針のもとにカリキュラムを実施する。

- ① 本学科は、入学年次から2年次までに自然科学系の基礎科目を履修するのと併行して、食物と栄養に関する基礎学問領域の教育を行う。
- ② 3年次には、食物と栄養に関するより専門性の高い専攻科目と実験実習を履修する。
- ③ 4年次には、食物と栄養に関する科学研究の専門教育として、卒業論文を必修とする。少人数教育による実験実習を重視し、卒業研究では食物栄養学科や生活環境教育研究センターの各研究室にて、特定のテーマに関する研究教育を行う。

- ④ 本学科を卒業すると栄養士免許と管理栄養士の国家試験受験資格が与えられる。栄養教諭免許取得のための科目を設置する。

(大学HP http://www.ocha.ac.jp/program/curriculum_policy/undergrad.html)

【分析結果とその根拠理由】

入学者受け入れ方針については、「募集要項」とHPによって、本学が志願者に対してどのような能力や適性を求めているのかを社会に公表している。教育課程の編成・実施方針は、『大学案内 履修ガイド』『生活科学部 履修の手引き』さらに新入生ガイダンスの実施によって、学生や教職員へ周知されている。また、HPによる「学士課程プログラム・ポリシー」の公表は、学外関係者に対して、本学学生が得た知識・技能の質・量を提供している。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

本学部、学科の目的は、『大学案内』、『学生便覧 履修ガイド』『教育情報公開のレビュー』、「学内規則集」、「募集要項」等のさまざまな刊行物やHPに掲載され、広く公表されている。入学者受入方針は「募集要項」とHP上の「入試情報：アドミッション・ポリシー」に詳細に記載されており、志願者のみならず社会への周知に役立っている。また、教育課程の編成・実施方針については『学生便覧 履修ガイド』、『生活科学部 履修の手引き』、HP上の「学士課程プログラム・ポリシー」と年に1回開催される1泊2日の「新入生セミナー」によって周知の徹底がなされている。HPは、一般の人々へ情報を提供するために、詳細にわかりやすく記述されている。

【改善を要する点】

本学部・学科の目的、入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針について、本学に関係する者（入学者志願者、在学者、保護者、卒業（修了）生の雇用者、社会全般）への公表をさらに進めるために、HPの有効活用がますます必要となるだろう。グローバルな視野を持ち、国内外で活躍できる女性の輩出が大学の教育目標の一つであることを鑑みれば、英語による発信をさらに充実させることは重要である。同時に、英語以外の言語による教育情報の公開についても考慮すべきである。